



万太郎「まきますか、  
まきませんか？」



しまつくま

## プロフィール-万太郎

---

名前:キン肉万太郎

出身地:キン肉星

現住所:東京都美波理(ビバリー)公園

身長体重:176cm 83kg

超人強度:93万パワー

年齢:15歳

好きな物:カルビ丼、ギャル、星座

嫌いな物:風呂、こんにゃく

必殺技:キン肉バスター、ターンオーバーキン肉バスター、キン肉ドライバー、万太郎一番絞り、マッスルミレニアム

備考:キン肉星の王子でお坊ちゃん。現在は日本(の一部)を防衛。超人才オリンピック決勝まで駒を進める。

うさぎが首をかしげる。

...おや...、nのフィールドに異変が...。.....ふふ、やってくれましたね...。...たゆたうは束の間の灯火...。...揺れ動くは運命の影...

...これもまた...、薔薇乙女に課せられた責務なのかもしれません...

...交差する影は...、何を映すか...

実に興味深い...

深い深い霧の中、うさぎは消えた。

名だたる超人達が集い、その頂点を決める祭典。その名は、超人オリンピック。

そして超人オリンピックは準決勝まで進み、試合はクライマックスを向かえていた。

「大渦(メイルストローム)パワー!!」

男は背中合わせに相手の体に飛び乗り、両腕をキャッチした。

男の技が、敵の両腕に莫大な負荷をかけている。

「グギャオァ!」

「あ〜〜っと、ケビンのフェイバリット、オラップがイリューヒンの腕を締め上げる〜!」

ケビンのオラップは華麗に決まっていた。

脱出は不可。イリューヒンは断末魔の叫び声を上げてしまう。

「大腿骨、腰骨、上腕筋のホールドが見事に決まっています! これは逃げられませんよ〜!」

解説は興奮した面持ちで実況している。

ケビンのセコンドであるクロエも、この激戦に思わず身を乗り出した。

「情けなどかけるな! 二度と自分に挑ませないように捻じ伏せろ!」

「言われずともそのつもりだ!」

クロエの言葉に反応したのか、ケ빈はさらに身体をのけぞり、イリユーヒンの腕を締め上げる

。

ケビンの体が黄金色に強く輝きだす。

「はぁぁあっ！！」

生々しい音が響く。イリューヒンの腕は、破壊された。

「うひゃあ！ イ、イリューヒンの腕があ～」

決勝進出を決めていた万太郎も、これには顔を逸らしてしまう。

「何ということだ～～！ イリューヒンの腕が、オラップに耐えられずにもげてしまった～！」

「ウギャアアアア!!」

イリューヒンの叫び声が、場内に飛び散る。

それと同時に、甲高い金属音が鳴り響いた。

「ここでゴングが鳴る！ ケビンマスク、ロシア代表イリューヒンを打ち破り、決勝進出～！」

観客、実況の騒然とした中、ケビンは高らかに腕を上げ、勝利宣言をした。

「ロシア人サポーターの消沈ぶりとは裏腹に、イギリス人サポーターは大歓声をあげて…」

「あ、リングを見てください！ ケビンがイリューヒンを担いでいます！」

解説がケビンを指差す。

ケビンはイリューヒンを肩に担ぎ、遥か下の観客達を見下ろしていた。

「本当です。真剣勝負をしたライバルへの情けなのでしょうか？」

「ケビン。万太郎に凍てつく恐怖を与えてやれ」

「ふん、救助の担架なんざいらねえ。俺が下に落としてやる！」

ケビンは、意識定かでないイリューヒンを遥か上空のリングから投げ落とした。

「あ〜〜っと! ケビン、天高いリングの上からイリューヒンを叩き落した!!」

「う、イリューヒン!!」

イリューヒンの危機に駆け出したのは、万太郎のセコンドであるミートであった。ミートは、ギリギリの所でイリューヒンを救いだす。だがその時、ミートの足から鈍い音が響き渡った。

「うっああ!」

「ミっ、ミート!」

万太郎は直ぐに駆け寄った。

「だ、大丈夫かミート!」

キッドやセイウチンも急いで駆けつける。

「おい、見ろ! さっきの衝撃でミートの両アキレス腱が切れてやがる」

キッドが悲痛な面持ちで声を上げる。

「も、申し訳ございません、二世」

万太郎に抱えられたミートがゆっくりと口を開けた。

「ミート…。大丈夫! ミートのしたことは正しいよ…! 後は僕に任せなって」

「二世…。…本当に、申し訳ありません…」

急いで駆けつけた救護班が二つの担架を持ってきて、イリューヒン、ミートを乗せた。

ミートが運ばれるのを見送ると、万太郎は鋭い目付きでリングを見上げた。

「ケビン!! 僕はお前を許さない!!」

万太郎はケビンを指さして糾弾した。

だが、ケビンは悠然と構えている。

「ふん、そういうものは拳で語るもんだ。最も、ミートのいなくなった貴様に、語れる程の力があるとは思えんがな」

「な、何を〜！」

万太郎は怒りを露にしている。

すると、ケビンのセコンドであるクロエが、ケビンと同じくリングの上に立った。

「万太郎よ、断言してやる。ミートのいないお前など、ケビンと私のコンビに一分と持たん！」

「う、うう...！」

「次に破壊されるのは、お前だ...！」

「うう.....あああ...！」

イリューヒンの無惨な姿が脳裏によぎる。万太郎の顔は、みるみる青ざめていった。

胸は抉られ、両腕がもがれたイリューヒンの光景は、戦歴の浅い万太郎に深い絶望を与えた。

「そこまでよ。続きは決勝のリングで行いなさい！」

超人オリンピック委員会の一人であるジャクリーンが間に入ってきた。  
二人の争いが収まると、ジャクリーンはマイクを手を取った。

「それでは、超人オリンピック・ザ・レザレクション、グランドファイナルは一週間後の10月23日。  
東京国立競技場にて16:00にゴングとなります！皆さまのご来場を心よりお待ちしております！  
」

ジャクリーンが手仕舞をかけると、ケ빈は悠々と退場した。

万太郎も、キッド達に励まされながら帰っていった。

会場を出ると、万太郎は仲間達の練習の誘いを断り、キン肉ハウスに籠ってしまった。

その理由は言わずもがな、ケ빈に臆したためである。

実際、万太郎の性格は基本的に陽気である。  
だが、同時にネガティブな面を持つ。

万太郎の今までの戦歴は無敗であるが、同時に臆病風に吹かれた回数も同等である。

臆病風に吹かれる度にミートや仲間達に支えられ、何とかリングの上に上がってきたのだ。

その闘いが嫌いである万太郎が、ケ빈の残虐ファイトに恐怖してしまうのは無理からぬ話しであった。

そして今は、万太郎を宥めすかし、鼓舞してきたパートナーのミートもなく、万太郎の心は深く沈んでいた。

万太郎が電気も付けずに壁際で座りこんでいると、突如として電話のベルが鳴った。

だが万太郎は微動だにせず、しばらくしてベルも鳴りやんだ。

だが、ベルは再び鳴りだし、しつこく音をたてた。

さすがに万太郎も煩わしく感じたのか、腰を上げて電話を取った。

「うるさいなあ、誰だよ！」

「...巻きますか、巻きませんか？」

「へっ...？」

突然のことに万太郎は固まったう。

ようやくこれがイタズラ電話だと結論づけると、万太郎は無言で電話を切った。

「全く...！」

怒りながら壁際に戻ろうとすると、再度、ベルが鳴った。

万太郎は勢いよく電話を取ると、怒鳴りこんだ。

「しつこいぞ！僕がキン肉万太郎だと知ってのイタズラか！」

万太郎は怒気をあらわに叫んだ。

だが、相手の無機質な声は変わらず、相変わらず巻きますか、巻きませんか、と繰り返した。

これには万太郎も怒り心頭する。

「よおし、巻いてやる！巻いてやるから今すぐ僕んちに来い！」

万太郎がそう怒鳴ると、電話は突然切られた。

「全くもう...！僕はキン肉星の王子なんだぞ！無礼千万だよ、ったく...！」

万太郎が壁際に戻ろうとすると、万太郎は勢いよくこけた。

「ふんぎゃっ！イタタ.....なっ、何だよこれ...」

万太郎が明かりをつけると、床には重厚に出来た西洋風の鞆が佇んでいた。

「こんなのあったっけ？」

興味深々に鞆を見る万太郎は、それが開くことに気づく。

ゆっくりと鞆を開けると、そこには一体の人形と、ぜんまいが入っていた。

「に、人形...？ミートのかな？いやいや、ミートにそんな趣味はないぞ。じゃあ.....父上のだったり？」

万太郎は取り敢えず、片手で人形を持ち上げると、色々な角度から観察してみた。

「しかし、凄い凝ってるなあ。指の関節も一つ一つちゃんと出来てるし」

万太郎が感心していると、一つの穴に気づいた。

「鍵穴...？このぜんまいを入れるのかな」

万太郎は何の気なしにぜんまいを入れると、ピタリと嵌まった。

そのまま何回転か回すと、ぎこちなく人形は動き出した。

驚いた万太郎は、人形を離した。

しかし人形は、一人でに、ゆっくりと立ち上がった。

両の目が開けられると、その人形は万太郎に問いかけた。

「...あなたが、ぜんまいを回したの...かしら？」

「うひゃあ！に、人形が喋った～！」

「あー！カナは人形じゃないかしら！カナは誇り高いローゼンメイデン第二ドール...って聞いているかしら!？」

万太郎は壁際まで後退り、手を擦り合わせて南無阿弥陀仏を唱えていた。

何とかして誤解を解くも、数分を要した。

「え、君もしかして超人？」

「ちーがーうーかしら！カナは誇り高きローゼンメイデン第二ドール、金糸雀かしら～！」

金糸雀は頬を膨らませながら答えた。

「あなたが巻きますって答えたから私が来たのかしら」

「あっ！あのイタズラ電話はお前だったのか～！」

万太郎は金糸雀を掴むと上下左右に振り回した。

「お、落ち着くかしら～～...」

万太郎が手を離すと、金糸雀は涙目になりながら訴えた。

「ミーディアムを選ぶのは、このピチカートかしら！カナじゃないかしら～！」

そういうと、小さな光の玉が金糸雀の後ろから出てきた。

「うっ、僕が悪かったって。だから泣かないでよ」

「カナは泣かないかしら。強いかしら...！」

しばらくして金糸雀が落ち着くと、ようやくアリスゲームについて話し出した。

「ってことかしら。分かった？万太郎」

「うん、分かんない」

「ええ～!?今までのミーディアムはこの説明でみんな分かってくれたかしら～！」

「うるさい、僕は横文字が三つ出てくるとパンクすんだ！」

「どうしようもない脳筋かしら…」

金糸雀は一息吐くと、ゆっくりと繰り返し話し出した。

「いいかしら。カナ達は、人間と契約して力を出すかしら。この契約者をミーディアムと言うのだけれど、今は知らなくていいかしら。まあとにかく、私達ドールは人間の力を借りて闘うのかしら」

それから金糸雀は再びアリスゲームについて分かり易く話した。

「ほおほお、つまり、螺で動くカラクリ超人達が父上を巡って闘っていると」

「何か不本意な解釈だけど、おおむねその通りかしら～」

先程は混がらがっていたものの、一応は理解したらしい。

「それで万太郎、契約して力を貸して欲しいかしら～？」

「そんなのやなこったかしら～」

「あ～っ、真似するなかしら～！それに何で断るかしら～！」

「だって僕、面倒くさいのやだし」

「うえっ…！そ…それはひどいかしら…」

金糸雀はすっかりしょんぼりしてしまった。

そんな様子を見て、思わず万太郎は気の毒に感じる。

少し気まずさを感じた万太郎は、何とか言葉を紡ごうとした。

「ま、まあ…。代わりに、他の契約者が見つかるまで、僕の家において良いよ」

言った傍から万太郎は後悔したが、時既に遅く。

「本当かしら!?やった〜！」

金糸雀の表情はうって変わって、とても嬉しそうにしており、撤回なんて言い出せる空気ではなかった。

「う〜ん...ま、いっか」

万太郎も存外、満更でもないようだ。

翌朝

「起きるかしら～！」

ガンガンと甲高い音が響き渡る。

「う、うるさいよ！ミート！」

金糸雀のフライパン叩きに、万太郎は起き上がって怒鳴り返した。

「ミート...？」

「あっ...いや...何でもないよ」

「ふーん。もう、やっと起きたかしら。ねぼすけも大概にするかしら」

「いやいや、もっと起こし方を考えてよ...。これじゃあ僕の寿命が縮んじゃうよ」

万太郎は、ミートの不在に寂しさを感じる間もなく、金糸雀に文句をこぼす。

「ま、いつか善処するかしら。それより、朝食が出来てるからとっとと食べるかしら」

早く早く、と金糸雀は万太郎の背中を押して、ちゃぶ台につかせた。

「ま、居候の身として、これくらいはやってあげるかしら」

「うげ...こ、これは...」

そこには、原材料が卵のみの料理が数々並んでいた。

「ふふん、これこそカナ特製料理、万卵全席かしら～！」

「おお～素晴らしい～...って、ちょっと待てい！何で食材が卵オンリーなんだ！」

「素材の味を生かす為、無駄なものは全部はぶいたかしら～。職人のこだわりってやつかしら」

「なぜ、こだわった…。僕はカルビ丼が食いたいよ～」

「ほら、四の五の言っていないで、取りあえず食べるかしら」

「う...うん」

万太郎は、恐る恐る玉子焼きを口に運んだ。

「う、美味しい...！」

「やった...！って、当然かしら！カナに死角はないかしら！」

口では不満そうに言うも、金糸雀の表情は笑顔に変わっていた。

「さ、どんどん食べるかしら～」

金糸雀は次々に皿を勧めてきた。

しかし、その皿には目玉焼き、スクランブルエッグ、プレーンオムレツ等々であって、万太郎には、

「...ここからが本当の地獄だ...！」

厳しいらしい。

一段落すると、金糸雀は勝手に湯飲みを拝借し、お茶を淹れた。その向かいでは、万太郎が仰向けに倒れ込んでいた。

「そう言えば、万太郎は学生なのかしら？」

金糸雀の問いに万太郎は少し上体を起こした。

「いや、僕は学生じゃないよ」

「じゃあニートかしら？」

「違うよ！僕の仕事は、日本防衛っていう凄い任務なんだ！」

「？万太郎は警察官かしら？」

「それともまた違うよ。僕達超人は、日本から依頼されて配属された用心棒みたいなもんさ。悪行超人達はとても強いから、それ専門に正義超人が派遣されるんだよ」

「へえ、それはとても凄いかしら～」

「なっはっはっ、まああねえ、もっと誉め称えなさ～い」

「調子に乗ったかしら～...」

その時、ちょうどテレビが、超人オリンピックの特集に変わった。

『超人オリンピックの決勝戦は、万太郎VSケビンマスクというカードになり...』

「あ、万太郎が決勝戦に出るのかしら!？」

「へっへーん。僕の実力を持ってすれば、お茶の子さいさいさ。今や僕は、国民的大スターなのさ～」

だが案の定、特集の殆どがケビンのことで、特に終盤まで残しておいたオラップについてだった。

「ちょちょい待てえ！日本代表の僕の話はあ!？」

「ぷっ、あははは、やっぱり万太郎かしら～」

万太郎がムツとした表情でそれを見ていると、次にミートの負傷に報道が変わった。

「...ミートって、さっき私と勘違いした人?かしら？」

「...そうだよ。ここでミートと一緒に住んでたんだけど、今は入院中なんだ」

テレビでは、小さなミートがイリュージョンをキャッチした場面が流れていた。

「このミートって人は、良い子かしら...」

「ああ、地球の平和の為に頑張ってくれる、心優しいパートナーだよ...」

万太郎が少し感傷的になっていると、金糸雀が突然立ち上がった。

「よおし、こうなったら特訓かしら！そしてケビンとやらをやっつけて、ミートの敵討ちかしら！」

「えっええ〜、今から!？」

「当然かしら！万太郎は悔しくないの？同じ正義超人を蔑ろにして、ミートを負傷させたケビンを！」

「た、確かに悔しいよ...！」

「よおし、その怒りを特訓にぶつけるかしら！」

金糸雀は万太郎の手を取ると、勢いよく家を出た。

「まずは、ミートの特訓メニューを教えるかしら？」

「本当に始まっちゃったよ...女の子で大丈夫かな...」

「むう、侮っちゃいけないかしら！この金糸雀にかかれば、名参謀の後釜もちよちょいのちょいかしら。ほら、とっとと教えるかしら」

万太郎の不安とは裏腹に、金糸雀は意外な才能を発揮した。  
レスリング技術に関しては全くの素人だが、代わりに凄い閃きがあった。

金糸雀が時折見せるアイディアは、練習の効率を遥かに上げた。

「ほらほら、後200回頑張るかしら」

「うひゃあ...」

そしてどうやら、金糸雀は中々の熱血乙女らしい。  
こうして、熱の入った金糸雀によって、不本意ながらも夕方まで特訓は続いた。

「まあ、今日はこんなもんかしら」

「うはあ...はあ、まさか...ミートより厳しいなんて...！」

万太郎は既に満身創痍のようで、地面に大の字で倒れていた。

「万太郎は、意外と物覚えが良いかしら」

「はっは、あたり前さ。なんたって昔は、弁護士を目指してたからねえ」

「...信じられないかしら...！って、キン肉星の王位継承者なんだから、弁護士になるのは無理かしら！」

金糸雀の指摘に、今気づいたとばかりに頭を抱える。

「あっ!!そうだった！...じゃあ、あの時の努力は一体なんだったんだ～！」

「...はあ、やっぱり万太郎はアホかしら～...」

金糸雀はおでこに手を当てて、ため息を吐いた。

それからパラソルを開くと、笑顔で万太郎の方を向いた。

「それじゃあ、夕飯の買出しに行くかしら」

「え、もう!? もうちょっと休憩してからにしようよ」

「うるせえかしら。カナも練習に付き合ってお腹ぺこぺこなのだよ」

万太郎の文句を華麗に聞き流した金糸雀は、意気揚々と公園を出て行った。

「って、ちょっとまってよ。僕お財布持ってきてないよ！」

「そこは抜かりないかしら。カナが既に持ってきてるかしら～」

「い、いつの間に〜!？」

「楽しんでズルして頂きかしら〜」

「返せ!このでこっぱち〜!」

「あ〜、カナのおでこを馬鹿にするなかしら〜!これはチャームポイントかしら〜!この豚マンタ〜」

二人は言い合いを繰り返しながら、スーパーに向かった。

因みにそのスーパーは、区内で一番卵が安いらしく、ピチカートが練習の間に見つけていた。金糸雀曰く、これも計算済みかしら〜、だそうだ。

ぶつぶつと文句を言いながらも、万太郎はしっかり買い物を終えた。

そしてキン肉ハウスのある公園に戻ると、そこには金糸雀のと同じ作りの鞆が落ちていた。

「これは...ドールの鞆かしら! もしかしたら、この近くに二人目のドールがいるかもしれないかしら」

「他の姉妹が...？」

その時、万太郎達の足下が突如に崩れた。

「う、うわぁ!」

「きゃっ!」

万太郎達が避けると、先程いた地面に巨大な十字痕が付いていた。

「ふん、避けやがったか...」

「だ、誰だ！危ないじゃないかあ！」

「んな暢気なこと言ってる場合じゃないかしら！これは敵襲かしら！」

声のした方を向くと、そこには西洋式の兜を被った、屈強な超人がこちら歩いてきていた。

「万太郎...！よもや、俺を忘れたわけではあるまい...？」

「お、お前は...ブラッドキラー...！」

ブラッドキラーとは、万太郎の始めて闘った悪行超人であり、辛くも勝利した過去がある。

「お前に破れてから、俺は地獄の修行を重ねたんだぜえ...」

そう言うと、ブラッドキラーは右手を上げた。

その手には、何かが握られていた。

「そして今日！俺は、力を手に入れた！」

ブラッドキラーは、右手に握っていたものを下に叩きつけた。

叩きつけられたそれは、人形の形をしていた。

「真紅!？」

金糸雀は思わず、真紅の元に駆け寄る。

「この人形のクリスタルは最高だ...！力がみなぎってくるわ！」

「まさか...真紅のローザミスティカを奪ったのかしら!？」

「ふん、これは人形には分不相応だ...！貴様のも俺に渡せ！」

言い終わらない内に、ブラッドキラーは金糸雀に掴みかかった。

直ぐさま、万太郎が両腕を防ぎに入る。

「ブラッドキラー…。お前の相手はこの僕だよ！」

「小癪な！捻り潰してくれる！」

ブラッドキラーは、火の噴くような殴打を浴びせる。

だが万太郎は、ブラッドキラーの波状攻撃を全てガードしていた。

「ふん、少しはやるようになったか…。だが、今の俺様の敵じゃねえ！」

ブラッドキラーは、万太郎の両腕を掴むと空中に放り投げた。

「進化した俺様の力を見せてやる！ ローザクロイツァー！」

ブラッドキラーの胸の十字痕から、十字型の赤い波動が飛び出した。

「うひゃあ！」

万太郎は、防衛本能で体を丸める。

それが万太郎に当たる刹那、

「そうはさせないかしら！ ディスコード！」

金糸雀がバイオリンを奏でると、無数の音の衝撃波が飛び出した。

それは赤い波動に連続してあたり、間一髪で軌道がずれた。

その隙に万太郎は体制を立て直す。

「ちい、人形風情が…！ 邪魔をするんじゃねえ！」

今度は金糸雀に、十字の波動が向かっていく。

金糸雀はバイオリンを構えるも、それより速く波動が襲いかかる。

バイオリンを盾代わりに使うも、それごと金糸雀は吹き飛ばされてしまった。

「金糸雀...！」

「うっ...私に構わずそいつを倒すかしら！」

金糸雀はバイオリンでガードした為か、そこまでの傷は負っていなかったが、バイオリンの弦が切れていた。

「おおっと、よそ見は禁物だぜえ万太郎。ブラッドボンバー！」

金糸雀の方を向いていた万太郎に、強烈なラリアットが襲いかかった。

万太郎は咄嗟にガードをするも、腕ごと吹っ飛ばされてしまう。

「ああ～...良いぞ良いぞ...力がみなぎってくる！」

「っ...前に闘った時とは、段違いに強い...！」

万太郎は直ぐに立ち上がると、ブラッドキラーを正面から持ち上げた。

「あっ、万太郎！それは危険かしら！直ぐに離すかしら！」

「大丈夫。このスープレックスで終わらせてやるさ...！」

「くくくっ嬢ちゃんの言う通りだぜ。ローザクロイツァー！」

ゼロ距離から十字の波動が飛び出し、万太郎を地面にめりこませる。

「ぐはっ...！」

倒れた万太郎に休みを与えず、ブラッドキラーは無理矢理に持ち上げた。

「万太郎...！起きるかしら！」

「...はっ！危ない！」

金糸雀の声に気づいた万太郎は、直ぐにブラッドキラーと間合いを取った。

「ふん、往生際の悪いやつが...！とっとと俺様に殺されちまいな！」

「くっ...！」

「万太郎！ブラッドキラーの胸の両端を見るかしら！あのバーが開いた時に波動が飛び出すかしら！」

「胸...？」

「ちいっ余計なことを...だが、当てちまえば関係ねえ！」

ブラッドキラーは発射の構えをする。

万太郎は冷静に胸を見て、開いた瞬間に直ぐに飛び、波動をかわした。

「あいつの攻撃は単発だから、直ぐに間合いを詰めるかしら！」

金糸雀の言葉を素直に聞いたのか、万太郎は一気に間合いを詰める。

「ふん、遅いわ！ローザクロイツァー！」

「万太郎！相手の足に飛びかかるかしら！」

万太郎は体を低くして、ブラッドキラーの両足に飛び込んだ。波動は目標を失って、宙に消えた。

「そしてそのまま股を潜るかしら！」

万太郎は相手の足を掴んだまま、その股を潜った。

そして相手の足をインディアンデスロックに固め、敵の頭をネックブリーカーに構えた。

「くらえ！万太郎一番絞り！」

「グギャアア...！」

万太郎は、足首、背骨、首を同時に締め上げる。

ブラッドキラーの背骨が大きく軋み出した。

「うおおお！」

万太郎も渾身の力で締める。

「くっくそお...」

ブラッドキラーは、左手を万太郎がロックしている手にかざすと、そこから薔薇の弁を放出した。

「うわあ！」

痛みに、思わず万太郎は手を離してしまう。

「万太郎、後ろ！」

金糸雀の声もむなしく、万太郎はブラッドキラーに捉えられた。

「さあて、フィニッシュといこうか！」

ブラッドキラーは、万太郎の股に片手を入れ、もう片方で肩を掴み、万太郎を逆さまに持ち上げる。

そして、天高く飛び上がった。

「くくくっ。この高さからローザクロイツァーで叩きつければ、お前は終わりだ！」

「くそう...！ぬ、抜けれない...！」

万太郎は必死に脱出を試みるが、ブラッドキラーにがっちりと固定され、身動きが取れない。

ブラッドキラーの高笑いの中、金糸雀は何かを待っているかのように、静かであった。

ブラッドキラーが万太郎を下にして、ローザクロイツァーを撃つ準備をする。

そして手を離そうとした刹那、

「今かしら！万太郎、奴の足を捉えるかしら！」

直ぐさま、万太郎は背後にあるブラッドキラーの足を捉える。

「何をもがくかぁ！」

「次に足であいつの頭を掴んで、反転するかしら！」

万太郎は両足でブラッドキラーの頭を挟むと、体を大きくのけ反った。

「うおおお、火事場のクソ力ぁ!!」

万太郎の額に肉の文字が浮かび上がると、万太郎は渾身の力で反転する。  
そうすると、ブラッドキラーの頭が地面に向いた。

「持ってる敵を引っ張り、肩に相手の頭を乗せるかしら！」

万太郎はブラッドキラーの足を引っ張り上げ、その頭を肩に担ぎ、キン肉バスターの体勢に入る。  
。

「ぐおっ！こ、この技は！？」

「まだまだ！」

万太郎は、ブラッドキラーの体を前後反転させる。

「そのまま奴をぶっ倒せかしら～！」

「ターンオーバーキン肉バスター！」

天高くから、万太郎は重力に任せて勢いよく落下する。

万太郎が地面に激突すると、その周辺が大きくめり込んだ。

技は完全に決まり、ブラッドキラーは意識を手放している。

万太郎が手を離すと、ブラッドキラーは力なく地面に落下していった。

「...やったかしら～！万太郎の勝利かしら～！」

金糸雀は万太郎のもとに駆け寄って、抱きついた。

「ははっ...もう疲れたよ～」

万太郎の額から肉の文字が消え、へなへたと座りこんだ。

「お疲れ様かしら...。あっ、ローザミスティカ！」

金糸雀が声を上げると、直ぐにブラッドキラーの体を探った。

ブラッドキラーを横にすると、背後から、ピチカートのような妖精が出てきた。

「...ホーリエ！」

ホーリエと呼ばれた精霊は、赤いクリスタル状のものを携えていた。

「これが...ローザミスティカかしら...」

ホーリエはローザミスティカを持ちながら、よろよろと万太郎のもとに向かった。

「...これを僕にくれるの...？」

ホーリエは、万太郎の手元でローザミスティカを離すと、頷くように上下にゆれた。

「.....これは、金糸雀に譲るよ。僕よりも、金糸雀の方が必要でしょ？」

万太郎は両手を金糸雀に向ける。

「...カナも貰えないかしら...。ミーディアムでない人から貰っては、これはアリスゲームじゃないかしら。お父様も納得してくれないかしら」

「そ、そうなの。うーん...じゃあこれどうしよう...？」

「元の持ち主に返すかしら。カナは、真紅に帰ってきて欲しいかしら...」

「うん、分かったよ」

万太郎は真紅のもとに歩みよると、ローザミスティカを真紅の胸に当てた。

当てられたローザミスティカは、ゆっくりと真紅の体に取り込まれた。

「これで完了かしら！後はぜんまいを巻くだけかしら～」

「...何か今回は、金糸雀に助けられちゃったな...」

「ふふん、お礼と感謝は大歓迎かしら」

「うーん...、お礼になるか分からないけど、僕、金糸雀と契約するよ」

「えっ！本当かしら！」

「うん。金糸雀が姉妹のことを大切に想ってるのは、良く分かった。その金糸雀となら、この苛酷なゲームに協力しても良いかなって...」

そっぽを向きながら、万太郎は言った。

「万太郎…。もしかして契約を嫌がったのは、このゲームを止めさせようと思ってのことかしら…!？」

「そ、そんな深く考えてないよ！ただ僕は、闘うことは悪を倒すことと考えてたから、どうしても賛成出来なかつただけさ」

「じゃあ、今は納得したのかしら？」

「納得はしてないけど、僕は金糸雀を信じる...！金糸雀ならきっと、皆を幸せにできるよ」

「万太郎...。それはちょっと臭いかしら～...」

「なっ！茶化すんじゃないやい！これでも恥ずかしいの耐えて言ったんだよ！」

「ふふっ。万太郎にカッコいい台詞は似合わないかしら～」

「う、うるさい...ほら、契約するよ」

「分かったかしら。では、この指輪に誓いの口づけを...」

金糸雀が左手を差し出すと、万太郎は薬指の指輪にキスをした。

「これで良いの...？」

「ええ、完了かしら。左手を見るかしら」

左手のグローブを外すと、薬指に薔薇を象った指輪が付いていた。

「へえ～...って、あれ！これ取れないぞ！」

「因みに取ろうとすると、肉ごと持ってかれるかしら」

「え～っ!?聞いてないよ！」

「男なら小さいことは気にするなかしら～」

万太郎はまだ指輪を外そうと試みている。

「さて、カナも万太郎の為に一肌脱ぐかしら」

「ほえっ？」

「契約したことで、もう二人は一心同体かしら。だから、カナも万太郎の為に一緒に闘うかしら！」

「...それは、僕のセコンドになってくれるってこと...？」

「セコンド...？取り敢えず、カナも一緒にケビンを倒すかしら！」

「...ああっ。よろしく、金糸雀」

万太郎が手を差し出した時、きゅ〜っと気の抜けた音が聞こえた。

「お、お腹すいたかしら〜...」

「...そうだね。ご飯にするか」

万太郎は、真紅と金糸雀を抱き上げると、キン肉ハウスに戻っていった。

## プロフィール-ケビンマスク

---

名前:ケビンマスク

出身地: イギリス

年齢: 18歳

身長体重: 218cm 155kg

超人強度: 117万パワー

好物: 魚のフライ

必殺技:OLAP、タワーブリッジ、ロイヤル・ストレッチ、トルネードフィッシャーマンズスープレックス、ビッグベン・エッジ

備考:伝統ある名家のロビン家に生まれる。その家柄のせいか、幼少の頃よりスパルタ教育を受け、一時は悪行超人に走った経歴を持つ。現在は一匹狼として、中立の立場にいる。イリ्यूヒンを降して、超人オリンピック決勝に進む。セコンドはクロエ。

## プロフィール-クロエ

---

名前:クロエ

出身:ロシア→イギリス(帰化)

身長体重:210cm 150kg

超人強度:100万パワー

歳:58歳(但し機械超人ゆえ、老化はない)

好物:ボルシチ

好きな事:バラライカを弾く事

必殺技:ダブル・スタナー、スクリュードライバー、パロ・スペシャル

備考:謎多き超人。ケビンの父、ロビンを師としており、その縁によって、ケビンのセコンドに就くこととなる。

結局、この日も技の練習をせずに終わった。

クロエは、リングの横のベンチに腰掛けた。

ケ빈は打倒万太郎の特訓や、肉体強化のトレーニングは素直にやってくれるが、技の習得については、私の意見を全く聞いてくれない。

私は常々、父、ロビンマスクの技をケ빈が継承してくれたらと思う。

ケ빈は父でさえ持ちえなかったマイルストロームパワーを修得した。

キン肉族の持つ火事場のクソ力にはまだ劣るが、決勝までには互角、いやそれ以上にまで仕上げるつもりだ。

このマイルストロームパワーと、ロビン家の誇るテクニックが組み合わせれば、これ以上に恐ろしいものはない。

だが、現実にはそれは困難であった。

ロビンとケ빈の確執...

この親子には大きな亀裂があった。

ロビンは、息子を強く育てたかった。

ロビン家は元々、超人レスリングの名門であり、先祖代々厳しかったのだが、ロビンは殊更、ケ빈にスパルタを強いた。

それは、超人オリンピックでキン肉マンに勝てなかった過去を息子の代ですすいで欲しかったのかもしれない。

だが、ロビンのスパルタぶりは激しく、寝食以外はほぼトレーニングであり、学校にも行かせずにトレーニングをさせた。

ケ빈はそれが嫌で家を飛び出してしまい、一時は悪行超人に加担したこともあった程だ。

クロエはロビンの弟子として、何とかこのケ빈に技を継いで欲しかった。

そのクロエの視線の先では、ケ빈が練習後のクールダウンを行っていた。

そんなケ빈を見ていると、クロエは駄目元であると知りつつも、つい口走ってしまう。

「ケ빈よ、もう一度、ロビンの技を受け継ぐことを考えてくれないか？」

「.....」

ケ빈は黙々と身体の筋肉を整えている。

「俺は何も、父親の意志を継げと言っている訳ではない。ロ빈は、弟子という色眼鏡を取っても、稀代の業師であることには変わらない。その彼から技を盗み、お前というものを更に高みに行かせたいんだ...！」

クロエの熱い言葉をよそに、ケ빈は立ち上がった。

「.....明日の練習は、7時から始める」

そう言うと、ケ빈は練習場から出て行ってしまった。

後に残されたクロエは、大きくため息を吐いた。

「...ふう。骨の折れるやつをパートナーに選んじまったな...だが、何としてでも習得させてやりたい...!」

夏が終わり、少し肌寒く感じ始める十月下旬。

クロエはコートを羽織って、帰路についていた。

吐く息が白くなるのはまだ先だが、クロエのため息は周りの温度を少し下げているように感じた。

セコンドを始めた当初から、ケビンに格闘技術を教えるのは難航していた。

坊主憎ければ袈裟まで憎し、とはよく言ったもので、ケビンは父親どころか、ロビン家のファイトスタイルでさえも憎悪していた。

ケビンにOLAPを教えるときも大分渋っており、結局、ロビンも習得にまでは至らなかったということで、オリジナルホールドとして納得させた。

今までは、悪く言えばクロエの舌先三寸で言いくるめてきたが、流石に今回のことはそう簡単にはいかない。

クロエが思案しながら歩いていると、クロエの借りているマンションが見えた。

はるばるロシアを出て、クロエは日本にやってきている。  
それもこれも、ケビンの為だ。

ふと、自分の部屋を見上げると、何か流星らしきものが、自分の部屋の窓に突っ込んでいった。

「!? 悪行超人の仕業か!？」

クロエは急いで自室に駆け込んだ。

クロエが自室のドアを勢いよく開けてリビングに行くと、そこには窓をぶち抜いたであろう、大きな鞆が二つ置かれていた。

「いたた...着地に失敗しちゃったですう」

「もう、翠星石。無茶な飛び方はやめようってあれほど言ったじゃないか」

鞆が開くと、そこから二つの人形が出てきた。

「な、なんだ...これは...!」

クロエが呆然として見ていると、二つの人形はクロエに気づいた。

「あ、人間ですう!」

一つの人形がそそくさともう一つの人形の陰に隠れてしまった。

「あはは...、初めまして。僕はローゼンメイデン第四ドール、蒼星石。で、こちらが姉の第三ドール、翠星石です」

「ちょ、ちょっと待ってくれ...。思考が追いつかん...」

クロエはこめかみを手で押さえて、頭を少し冷静にさせた。

その間に、蒼星石は翠星石に窓を直すよう命じた。

翠星石が、ぶつくさと文句を言いながら修復している隣で、蒼星石はアリスゲームや、自分達についてをクロエに語った。

「ほう、なんとも悲しい戦いをしているのだな」

「...それが、僕達の使命でもありますから」

「いや、他人の戦いにとやかく言うつもりはない」

蒼星石が暗い表情になると、クロエはすぐに言い直した。

「...ふう。ほら、終わったですよデカ人間」

窓の修理を終えた翠星石が、クロエのもとへやってきた。

翠星石も、取り敢えずはクロエを怖い人間だとは思わなくなったらしい。

「本当に元通りにしたんだな」

クロエの言葉に、翠星石は得意そうに腰に手を当てて答えた。

「ふっふ、翠星石を舐めるなですう、デカ人間」

「ふむ、私は人間ではないのだがな」

「えっ、どういうことですか？」

「自己紹介がまだだったな。私はクロエ。正義超人だ」

「正義超人？そう言えば、翠星石たちを最初に巻いた男も同じこと言ってたですう。イタイ子かと思ってたですけど」

「僕は、あのコスプレのことだと思ってたよ」

「むむっ...何と超人を知らないのか...」

困ったようにクロエが顎に手を当てる。

「...もう一度、あの修復をお願い出来るか？」

「えっ？」

クロエは大きく身体を捻ると、窓際の壁に拳を叩きつけた。

爆裂音が部屋中に響き渡ると、壁は豆腐のように砕け散っていった。

「「.....！」」

二人のドールは余りの出来事に呆然としていた。

「...まあ、このように超人というのは、人よりも身体能力が高いやつらのことを言うんだ」

「すっ、すげーですう。デカ超人」

「うん...！凄まじい力だ。この力なら、契約者としても十分だよ」

「あっ、そうですう。クロエ、とっとと私たちと契約するですよ」

翠星石が急かすようにクロエに詰め寄る。

「...そういえば、お前達には契約する者が必要だったんだな。...ふむう」

「やっぱり、僕たちとの契約は無理ですか...？」

「私には今、やるべきことがあってな。ちょっとひねくれた弟子を更正させねばならんのだ」

クロエのその言葉に、翠星石は目を輝かせて答えた。

「それなら、私たちに任せるですう！」

「そうだね。僕たちの力を使う時だ」

二人が突然、意気揚々としたのを不思議がって見ていると、蒼星石がつけ足すように説明した。

「まだ説明してなかったね。僕たちは庭師といって、人の心の樹を手入れすることが出来るんです」

「そうですう。二人合わせれば、ひねくれ人間の一人や二人、ちょろいもんですう」

「何とも信じ難い話だな...」

「もう。じゃあ、翠星石達がそのひねくれ人間を直すことが出来たら、契約するですよ」

「ちょっと....、翠星石...！」

クロエは腕組みをして、しばし考えた。

「...分かった。正直、藁にもすがる思いだったからな。お前達の力を信じてみよう」

「あ、ありがとうございます」

「任せるですう。更生させることが出来たら、ちゃんと翠星石達と契約するですよ」

「ああ、成功したなら、私も全力で答えよう」

「よし、取り引き成立ですう。もうやっぱやめた、はなしですよ」

「大丈夫だ。男に二言はない」

「それじゃあ、翠星石達はもう寝るです。明日を楽しみにしておくですよ」

「それじゃあ、おやすみ。クロエ」

双子はそう言うと、さっさと鞆の中に入ってしまった。

クロエは自然と息を吐く。

「ふう...あっ、壁...」

次の日、人形達は朝食を済ますと、クロエと一緒に練習場に向かった。

クロエが練習場の扉を開くと、既にケビンがストレッチをしていた。

「遅かったな、クロエ」

「気合いが入りすぎだ、ケビン」

ケビンは昨日のやり取りなど忘れたように、いつもの如く振る舞う。

クロエは、持ってきた機材を隅に置くと、ケビンの背後に回りストレッチを手伝った。

ケビンがストレッチに集中している間に、双子は練習場の柱に隠れる。

「まともなやつにしか見えないですう。更生させる必要あるですか？」

「いや、ああいうのに限って、意外と根深い溝を持っていたりするものさ。それにほら、クロエが今朝言ってたじゃないか」

「ああ、父親に恨みがあるんですね。まったく、お父様に会えない私たちもいるのに、贅沢な悩みです！」

「しーっ...！翠星石、声が大きいよ...」

蒼星石が直ぐに翠星石の口元をおさえるも、異変に気づいたケビンが柱の方を向いた。

「...今、何か聞こえなかったか？」

「さあな。大方、忍び込んできたパラッチ辺りじゃないのか？それより、ウォームアップがてらにキックの練習をするぞ！」

そう言うと、クロエはキックミットを取り出して構えた。

ケ빈はそれに下段蹴り、中段回し蹴り、そして上段跳び蹴りを流れるように浴びせた。

そして、様々なシチュエーションでの蹴り技を試した後、タックルを百本行い、昼休憩に入った。

休憩室での時間、二人は黙々と飯を食べ続けた。

二人が食べ終わると、立ち上がろうとするケ빈をクロエが制した。

「待て。食べた直後の運動は良くない。体調を気遣って、仮眠を取ろう」

「うん？今まではやっていなかったが、どういうことだ？」

「いや、そろそろ決勝戦も近いからな。下手なことで体を壊して欲しくない。仮眠といっても、十五分程度だ。少し休憩時間が延びたと考えてくれ」

「まあ...お前が言うのなら、俺はやるが...」

クロエは休憩室にマットを敷くと、そこにケ빈を横にさせた。

「では十五分後、お前を起こしにくるからな」

「...わかった」

休憩室を出ると、クロエは真っ直ぐ柱の奥へと向かった。

「...お前たち、もう少し静かにしてくれないか？危うくケビンにばれるところだったぞ」

柱の裏では、未だに蒼星石が翠星石の口を塞いだ状態でいた。

蒼星石が苦笑いをすると、クロエは小さくため息を吐いた。

「...蒼星石、そろそろ離してやれ」

蒼星石が離すと、翠星石は勢いよく息を吸った。

「はあ...はあ...。空気がうまいですう。って蒼星石ひどいですう!姉を殺す気ですか!？」

「ははっ、ごめんごめん。でも、ばれるよりはましだったんじゃないかな」

「うう...もう知らんですう！」

「.....もういいかな？」

二人のやり取りを苦笑いで見ていたクロエが、口を開いた。

「ケビンは今寝ている。夢の世界とやらの恐らく入れるはずだ。お願いできるか？」

「分かりました」

「了解ですう」

双子が返事をする、クロエは休憩室に案内した。

休憩室に向かう途中、机の上に古ぼけたマスクがあるのを翠星石が見つけた。

「このぼろっちいマスクは何ですか？ケビンののに似ている気もするのですが...」

クロエがそのマスクを見ると、少し苦い顔をした。

「...それはケビンの親父、ロビンのマスクだったものだ...」

「お父様のマスク...?」

「へえ、なんだかんだ言っても、やっぱり父親が好きなんですかねえ?」

「ふっ、そうだったら良いのだがな。あいつがこれを持ってきた...盗ってきた理由は、父親へ仕返しするためさ」

「えっ...?」

「ケビンの父親は、ライバル、キン肉マンに不覚にも敗れた。未だかつて破れたことのないロビン家の敗北に、父親は多くの非難を浴びた」

クロエは何かを思い抱いているのか、マスクを持ち上げると、複雑な表情でマスクの傷を撫でた。

「額の部分に大きな裂け傷があるだろう?これは、ロビンがキン肉マンに敗れた時の傷だ。これを見るたびに、ロビンはあの時の屈辱を思い出すそうだ。そしてケビンは、父親に最大の屈辱を与えるため...このマスクを奪った」

「...なんて...」

「残酷な仕返しだ...。気高いロビンにとって、あの敗北を想起するマスクを奪われるというのは、過去をえぐられる以上の苦痛だろう」

クロエは静かにマスクを置いた。

「なんて捻くれた野郎ですう!これは一度翠星石がお説教してやるですう!」

「落ち着いてよ翠星石。でも、中々根が深い問題なんだね...これは大仕事になりそうだな」

「...よろしく頼む」

三人は休憩室前に着くと、窓から中を窺った。

「...大丈夫ですう...。あいつは完全に眠ってるですよ...」

翠星石が小声で報告する。

「よし...じゃあ入るけども、ケビンの眠りは浅いから、くれぐれも音は立てないようにね...?」

蒼星石がそう言うと、静かにドアを開けた。

中に入ると、早速双子は、夢の扉を開けた。

ケビンの頭上に暗雲のようなものが立ち込めて、思わずクロエは声を出しそうになったが、すんでのところで堪えた。

「では、翠星石達は行くですけども、クロエはここで待ってるですか?」

「いや、私も行かせてもらおう。ケビンのパートナーとして、この目で見届けたい」

「分かったですう。それじゃあ翠星石たちの後が続くですよ」

そう言うと、翠星石はケビンの頭上に出来た渦の中心に飛び込んだ。  
続いて蒼星石も飛び込む。

「...待ってろよ、ケビン...」

クロエも続いて飛び込んだ。

渦から抜け出すと、そこには灰色の世界が広がっていた。

「な、何だここは...!?!」

「ケビンの心の中だよ。夢の世界は、その人の心の中を表すのさ...」

クロエが見渡すと、周りには超人達の死体や、血痕の付いた凶器などがあちこちに散らばっていた。

「心がかなり荒んでるですう。余り見ていたくねえですう」

「そうだね。早く心の樹のところまで行こう」

そう言うと、二人は宙に浮かび、蒼星石は心の樹の方へと飛んでいった。

「良いですかデカ超人。飛ぶコツはですね...っていないですう!？」

既にクロエはそこにいなく、蒼星石に走って付いていっていた。

「こんの体力バカ超人～!翠星石を置いていくなですう!」

三人が心の樹に向かっていて、徐々に景色が変わっていった。

「少しずつ明かりが見えてきたですう」

「倒れている人達も、殺されてるといよりも、ノックアウトされたって感じだね」

確かにその周辺には、武器や血などは無く、超人オリンピックで倒した超人などがいた。

だが、明るさはまだ遥か彼方にあり、クロエ達の周辺は、未だ明るいとは言えない。

「私の力でも、ケビンの心を晴らせていないのか...」

「いや、そんなことはないよ。あの向こうにある光は、クロエが灯したもののさ。クロエの気持ちは確かにケビンに伝わっているよ」

蒼星石は彼方の光を指しながら、微笑んだ。

「おっ、着いたですう」

泉が見えると、二人の人形はゆっくりと降りてきた。

そしてしばらく歩くと、大きく振れた樹に出くわした。

「大きいですう...でも、凄く曲がってて、窮屈そうですう」

「この大きな枝が、樹を真っ直ぐ成長させるのを妨げているんだね...」

そこには立派に成長している木があった。

だが、その木は自らの枝によって大きく曲げられ、斜めを向いていた。

「これが、ケビンの心の樹...なのか？」

「そうですう。立派に捻くれて成長しやがってるですね。これは矯正が大変そうですう」

「この枝が邪魔なんだけど、この枝には沢山の葉がついてる。恐らく、切ったら幹の成長を弱め

てしまうかもしれない」

「仕方ないですう。ここで切つとかないと、いずれこの樹は折れちまうですう」

「そうだね。じゃあ、レンピカ...！」

蒼星石は大きな鋏を取り出し、邪魔な枝を切ろうとした。

「うっ...!」

突然、蒼星石の左手に石がぶつかり、鋏を落としてしまった。

「な、なんですう!？」

翠星石も驚いて辺りを見回す。

すると、ケビンの樹の上から、人が飛び降りてきた。

「...てめえら...何してやがる...!？」

三人の前に姿を現したのは、ケビンと同じマスクを被った、十歳くらいの男の子だった。

「...お、お前は...ケビン...なのか？」

「だったらどうした!言うておくが、俺を親父と同じ正義超人だと思っくんじゃねえぜ!俺の樹に触れた代償は、死でもって償わせてやる!」

「おいケビン...!俺が分からないのか!？」

「知らねえな...!だが、お前からはダディと同じ匂いがする...反吐が出る匂いだ...!」

ケビンは、本当に憎らしいものを見るような態度でクロエに言った。

「恐らくあいつは、忌まわしい過去を隠すために、潜在的本能が生み出したものだ。多分、何を諭しても通じないと思うよ」

「.....」

「じゃあ、力づくでどかすです!スイドリーム!」

翠星石は、如雨露を取り出すと、ケビンの足元に向かって水をかける。

ケビンの足元から大きな蔓が現れると、ケビンに襲いかかる。

ケビンは斜め前に飛ぶ。回避。ケビンは一気に翠星石との距離を詰める。

翠星石は空中に逃げようとした。

だが、それよりも早くケビンが追いつく。

「はあっ!」

翠星石の如雨露を蹴飛ばす。  
勢いを駆って、強烈な回し蹴りを脇腹に繰り出した。

「きやあっ!」

守る暇なく、翠星石は吹っ飛ばされた。  
クロエが追い、何とかキャッチする。

「このっ!」

すぐさま蒼星石が、ケビンに斬りかかる。  
その隙をつき、翠星石は如雨露を拾いに向かう。

蒼星石は鋏を剣のように振り回し、ケビンを圧倒しようとする。

ケビン。かわされる。  
ケビンは脱力した構えで、巧みに振り下ろされる鋏を避ける。  
そして降り下ろされた刃を避け、両手で刃の部分を挟んだ。

「なっ!真剣白刃取り!？」

ケビンは両手で鋏を外側に捻って、後方の泉に投げ捨てた。

「まだまだあ!」

蒼星石はすぐにケビンに掴みかかる。

だがケビンにあしらわれ、のしかかるように抑えられた。

そしてケビンは、左腕で蒼星石の首をロックする。  
そしてその状態から蒼星石を肩に担ぎ、もう片方の腕で左足を掴み、宙に跳んだ。  
そして体を勢いよく回転させ落下する。

「トルネードフィッシャーマンズスープレックス!」

「うあっ!!」

勢いをつけた状態で、蒼星石を背中から地面に叩きつけた。

「あれは、私が教えた技...! 何故、子供のケビンが知っているんだ!?!」

「ここはケビンの心の中ですう。心は過去に縛られていても、恐らく経験やパワーは十八歳のままですう...」

ケビンが蒼星石の髪を掴んで起こそうとする。

その腕をクロエが掴んだ。

「おいたが過ぎるな...。お前のパートナーとして、その根性を叩き直してやろう...!」

「貴様...!この俺に、説教を垂らすな!!」

ケビンは二倍近い身長差をものともせず、クロエに上段跳び蹴りを放った。

クロエは悠々とかわす。

「お前に蹴りを教えたのは、この俺だ!」

クロエはしゃがんでケビンの軸足を取る。

そして体を捻らせた。

だがケビンは諦めない。

勢いを利用し、足をクロエの腕に巻きつける。

そして腕ひしぎに持っていった。

「ちっ!往生際が悪いぞ!」

それを察知したクロエは、腕を振り下ろして、ケビンを脳天から叩きつけようとする。

「俺は...ダディに負けねえ!!」

ケビンはそれに更に勢いをつけ、足をクロエの腕から首に巻きつけ、腕をロックした。

そして頭から落下させる。

「くっ!」

地面。落ちる。しかし、当たる直前で蔓がクロエを助ける。

そして大きな蔓は、ケビンを絡め取った。

クロエは、倒れている蒼星石を抱えると、ケビンから直ぐに離れる。

「蒼星石!」

「大丈夫...って、ちょっと強がるのも厳しいかな...」

クロエは、蒼星石を木陰の木に寄りかからせた。

「ケビンが強くなっている...!だがそれ以上に、私の体が思うように動かない...!」

「それは、ここが夢の中だからですう…。ここでは思いの丈が強さに結びつくです……うっ！」

翠星石は力を緩めなかったが、ケビンに強く巻きついた蔓は、その動きを徐々に弱めていった。

「な、なんつー力ですう…!契約者なしといえども、夢の世界でドールを圧倒するなんて…!」

「はあああ!!メイルストロームパワー!」

ケビンの体が黄金に輝くと、ケビンは力づくで蔓を引きちぎった。

「そ、そんな...!ありえねえですう...」

「もう一度、俺がケビンと闘う。翠星石、援護を頼む!」

「...了解ですう!」

クロエはケビンに向かって走った。

「使わないと自戒していたのだが...。夢の中ならノーカウントだろう...」

クロエは右拳を構えると、手の甲から四本の鋭い針が出てきた。

「ゆくぞ!伝説超人(レジェンド)の力を見せてやる!」

クロエは高くジャンプすると、体を回転させながら、右拳をケビンに向けた。

「スクリュードライバー!」

クロエは矢の如くケビンに突っ込んだ。

ケビンは避けようとしたが、蔓が足を封じる。

「逃がさねえですよ...!蒼星石の仇はとるですう!」

「いや...僕、死んでないんだけど...」

逃げれないと悟ったケビンは、頭を下げる。

そして、鋼鉄のマスクで攻撃を受けた。

激しい金属音が響き、ケビンは蔓ごと遠くに飛ばされた。

「翠星石!今のうちに蒼星石の剣を持ってくるんだ!」

「わ、分かったですう!」

翠星石は急いで泉へと向かった。

「...くっ...そうはさせるか!」

ケ빈は朦朧とする意識の中、翠星石を追おうとする。

だが、その行く手をクロエが遮った。

「残念だが、まだ俺との戦いが残ってるぞ!」

「くそっ!そこをどけえ!」

ケ빈は力任せに腕を振るった。

クロエはそれを全て、すんでのところでかわす。

「お前の怒りも分かるが、俺も師の恩に報いる為、お前にベルトを授ける野望があるんだ...!ここで負けるわけにはいかない!」

クロエはラッシュを避けると、伸びきったケ빈の右腕を掴んだ。

掴んだ腕を巧みにアームロックに持っていく。

「クロエの地獄の特訓は、夢の中でも続くぞ。さあ、これを解いてみる!」

「ぐがあ...!師匠面してんじゃねえぞ...!こんなものお...!」

ケ빈は力づくで脱出を試みるが、全てクロエにあしらわれる。

「俺が教えたフィッシャーマンを覚えているということは、お前はこの技の脱出の仕方を知っているはずだ。やってみろ!それとも、親父のやり方は嫌いか?」

「くそおお!」

「早く抜けないと、腕の感覚が消えてしまうぞ」

クロエは容赦なく腕をひねる。

ケ빈は左手を後ろ手に回すと、右手を捻り、出来た空間を使って右手を押し込みながら外した。

「はあはあっ...」

「出来るじゃないか!次はタックルだ。かわしてみろ!」

クロエは身体を低くして、ケ빈に向かった。

「何でだろう...?僕にはとても、二人が闘っているようには見えない...。どちらかといえば...そう、兄弟のじゃれあいのような...」

蒼星石は陰しい目つきとは対照的に、穏やかな眼差しで二人の行方を追っていた。

クロエは、攻撃するケ빈をあしらいながら、時には足払いでケ빈を倒す。

「先ほどまで圧倒していたケ빈が、手も足も出なくなっている...。もしかしたら、ケ빈の心に何か変化が起きているのか...?」

二人の攻防を見つめているうちに、蒼星石はあることに気づいた。

「あっ、ケビンの身体が少しずつ大きくなっている!」

先ほどまでクロエの半分未満の身長しかなかったケビンが、今では170近い身長にまで伸びていた。

伸びるにつれて、今まで体格で優勢に立っていたクロエの攻撃が、徐々に弱まってくる。

「うおおおお!」

ケビンは、普段のクールな態度とは裏腹に、獣の如く闘争心を燃やしながらかクロエにラッシュをかける。

「来い...!俺を倒してみろ...!ケビン!」

時にはケビンの拳を受けながらも、クロエは静かに隙を窺う。

その時、翠星石が泉から剣を拾い上げ、蒼星石のもとに走って来た。

「蒼星石!この剣であの枝を切るです!」

「...何!」

駆け戻った翠星石の声に、ケビンは振り返ってしまった。

「隙ありだ!」

クロエはケビンの腕を掴んで、ケビンの後方に跳んだ。

そして両足をケビンの足と絡め、ケビンの両手を後方に回し、チキンウィングに固める。

「これが俺の必殺技(フェイバリットホールド)、パロススペシャルだ!」

「ぐおおおお!」

クロエの必殺技は一つの芸術が如く、残酷にも完璧なる美しさを誇っていた。

クロエが腕を前方に倒すと、ケビンの腕から骨の軋みによる不協和音が響きわたる。

「す、すごえですう...」

翠星石は思わず見惚れていた。

「翠星石! 鉄を!」

「そ、そうだったです! 蒼星石、これを!」

翠星石は水滴を纏って光る鉄を渡した。

「クロエが抑えているうちに行くですう!」

「ああ、分かってるよ」

蒼星石は未だに痛む体に鞭打って、心の樹に向かって飛んでいった。

「うおおおお! やめろおお!!」

ケビンは体を大きく捻らせながら抗った。

「ツンドラの墓石と謳われた技だ。暴れれば暴れる程、この技は食い込むぞ!」

クロエは躊躇うことなくケビンの腕を締め上げる。

「ケビンよ。これが最後の特訓だ。パロススペシャルからテクニックで抜け出すことは出来ない。脱出方法は力のみだ...! 来い! お前の本当の底力を見せてみろ!」

「...くそっ!メイルストロームパワー!」

ケビンの体が輝きだす。

「ぬるいぞ!ケビン!」

クロエは力を弾き返した。

「がはあっ...!」

ケビンの体からは輝きが失せ、膝が地面に着いた。

「ケビンよ。キン肉族の火事場のクソ力は、自身の力の五十倍近い力を放つことが出来る。何故だか分かるか...?」

「ぐ、ぐああ...。し、知ったことか。元からのDNAじゃねえのか...」

「それは違う...!火事場のクソ力は、本来どの超人にも備わっている、想いの力だ!決して怒りや憎しみで固まった力でも、ましてや先天的なものでもない!」

ケビンの唸る声が徐々に小さくなっていく。

「お前のメイルストロームパワーも、自らの想いで増長も縮小もする。今までは父親への怒りで放っていたようだが、それでは過去の自分にすがっているだけ...!過去に頭打ちされて、力に伸び代はない! 超えろ...!過去の自分と決別し、今の自分に打ち勝ち、明日を見つめろ...!強さは、常に前にしかない!」

クロエの叱咤に、ケビンの眼は静かに燃え出す。

「.....俺が過去に、親父に縛られているだと...!そんな訳があるか!俺は、高みを目指す!親父がたど

り着けなかった最強の頂へ...!俺が...この俺が...!」

ケビンの体に輝きが戻りだす。

「ダディは確かに強かった...!だが、最強は親父じゃねえ!俺が...俺が...地上最強となる...ケビンマ  
スクだ!!」

ケビンの体は、元の身長に戻り、その体は、かつて無いほどに輝きだした。

その輝きと共鳴するように、心の樹も黄金色に光りだした。

「わっ!なんだ...これは...!?心の樹が自ら光りだすなんて...!」

「うおおおお!!メイルストロームパワー!!」

ケビンの背筋が大きく膨張すると、それがバネとなってケビンの腕は段々横に開いていく。

「なんと!これ程の力とは...!」

「はあああ!!」

ケビンが渾身の力で引っ張ると、クロエのクラッチから、腕が外れた。

外れると、クロエは直ぐにケビンから離れた。

二人は構え直す。

静寂。だが、ケビンから輝きが失われると、ゆっくりとケビンは崩れ落ちていった。

それと同時に心の樹の輝きも失われた。

「ケビン!」

クロエはすぐに駆けつけ、ケビンを抱き起こした。

ケビンは憔悴しており、口を動かしているが、その声は弱々しく、聞き取れない。

クロエは、耳を口元にやった

「...俺は...いつも、親父と比べられていた...いや、俺自身が較べていた...」

ケビンは、臃げにクロエに視線を合わすと、訥々と語りだした。

「...俺は確かに、親父の練習に嫌気が差して家を出ていった...。だが、その時の恨みなど、憂さ晴らしに明け暮れているうちに消えちまった...。だが、その代わりに、俺の心には違う傷が出

来た...」

少し口篭り、ケ빈は若干の逡巡を起こした。

「二人とも、大丈夫かい...?」

蒼星石と翠星石は二人のもとに駆けつけた。

その二人に対して、クロエはそっと人差し指を唇に付けた。

「...続けてくれ、ケ빈」

ケビンも決心がついたのか、再び話し始めた。

「俺は一転して、アウトローの側に走った。だが...そこで待っていたのは、表の世界と変わらない軽蔑だった...。父の存在は、裏の世界の奴等にまで畏敬の念を抱かせ、その父へ逆らった俺には...冷たい仕打ちしかなかった...。だから俺は、居場所を求めて悪行超人のもとに走ってしまった...。

俺の人生に、ことごとく干渉してくる親父が嫌いだった...。俺への期待は、親父というフィルターを通してであったし、俺への非難は、親父という名分に依ったものだった...。

俺は怖い...。親父の技を使うことで、俺が俺でなくなりそうなんだ...。俺は、親父の一切関わらない人生を歩みたい...。俺だけの人生を...。...悔しいじゃねえか...てめえの人生まで、他人に歩かれちゃあ...」

「ケビン...。そうだ、これはお前の人生だ。好きに生きればいい。しかし、お前の体には確かに、ロビンの血が流れている。これは紛れのない事実だ。...だが、それを含めてお前だ...!ロビンの血を受け継いでいる...それは正負の産物ではない。それは、ケビンというものを位置付ける、一つのアイデンティティだ。

そして俺は、ロビンの息子であるお前も、未だに反抗期なお前も、勝ち気なお前も、全てを認める!お前がケビンであることを俺が証明する!お前は、俺の大切なパートナーだ...!」

「...クロエ...」

二人はしばしの間、抱き合っていた。

その様子を二人の人形は離れて見つめる。

「...これが、友情パワーってやつですか...かあ〜、臭いですう」

「ははっ、茶化しちゃいけないよ、翠星石。僕達は今、立ち会っているんだ。確かな絆が、紡がれる場面に」

「むう、蒼星石も臭くなっちゃまいがったですう。...そういえば蒼星石、枝はちゃんと切ったですか?」

「いや、僕は切ってないよ。というよりも、切る必要がなかったんだ」

「どういうことです？」

「不思議なことにね。心の樹が輝きを放った後、妨げていた枝が朽ちていたんだ」

「吹っ切れやがったんですか、あいつは。もうクロエと結婚してやがれですう」

しばしの弛緩した空気が流れる。

だが、それは大きな地鳴りによって壊された。

「な、何だ!？」

「な、何ごとですう!？」

「地面が!...いや、空も...。空が...割れてる...!」

天蓋にガラスのような大きな亀裂が走りだし、空だった破片が落下してきた。

「きゃっ!ど、どういうことですう!?!ケビンの心はもう解決したんじゃ...」

「多分その逆さ。ケビンの心を占めていたしがらみが消えて、心が地殻変動を起こしているんだ!」

「な、なんてことですう!」

「早く脱出しよう!ここで巻き込まれれば、心の残滓の中に閉じ込められてしまう!」

蒼星石たちはすぐに飛び上がった。

だが、常に悲劇は重なって起きる。

「うっ...ちょっと長く...いすぎたですかね...」

「くっ...まさか、ここでリミットになるなんて...」

二人は力尽き、落下してしまった。

落下してきた蒼星石をクロエが抱きとめる。

「ど、どうしたんだ約者のいないドールは...三十分以上、夢の世界にいられないんだ...」

「何だと!?ならば今すぐ契約を...」

「いや...もう遅い...かな...。それよりも...早く...脱出を...」

「...分かった!」

蒼星石を抱き上げると、翠星石がないことに気づく。

周囲を見渡すと、翠星石は地割れでできた断崖に落ちかけていた。

「くっ!間に合えっ...!」

クロエは直ぐに走ったが、それより先に翠星石は落下してしまう。

しかし同じく、青い影も一緒に崖に飛び込んでいく。

「ケビン!」

すぐさま崖の中を覗く。

遙か下で、ケビンは壁の突起に掴まっていた。

「ケビン!今すぐ助けにいくぞ!」

「やめろ!それじゃ脱出に間に合わない!」

「しかし...!」

「俺がこの人形を投げる!キャッチしたら、それを抱えてお前は出口に走れ!」

「...しかし!ケビン、お前はどうするんだ!」

「俺を舐めるな!こんな場所からなど、すぐに脱出してみせる!」

ケビンは不敵にも笑みをこぼすと、翠星石を天高く放り投げた。

それを片手でキャッチする。

クロエが走りだそうとした時、途切れ途切れながら、翠星石がクロエに訴えた。

「だ、だめですう...。私たち庭師がいなきゃ...ケビンはこの変動から脱出できないですう...。ここで半身のケビンが潰れたら...あいつは現世で眼を覚まさなくなっちゃうですう...」

「な、何だと...!それでは、すぐにも助けなければ...!」

クロエが再び崖の下に顔を現すと、ケビンから怒号が飛んだ。

「何をしているクロエ!早く逃げろ！」

「だがケビン!ここでお前を助けなければ、お前は二度と向こうで目を覚まさなくなるんだぞ!

「クロエ!お前は、このケビンを認めたんだろ!だったら、そのケビンのいうことを信じろ!」

「ケビン...。...必ず戻って来い!まだ俺の特訓は終わってないからな!」

「..... I'll be back...! 地獄でも戻ってきてやるさ...!」

クロエは踵を返すと、出口に向かって走り出した。

「...だ、だめですう...。戻らなきゃ...戻らなきゃ...あいつは死んでしまうですう...」

翠星石は、ない力でクロエの胸を叩いて抗議した。

クロエはそれを黙って受け止める。

「...な...何とか言えですう...」

「...これは、あいつの決めた覚悟だ...。それを踏みにじってしまうと、私は友として、男として、ケビンに顔向けが出来ない...!」

「...そ...そんなプライドなんかで!.....クロエ...泣いてるですか...?」

「ああ...!助けられない俺が不甲斐ない!情けない!...俺に出来ることは、あいつの覚悟が...死への運命ではなく、生に向かうのだと、祈るだけだ...」

「クロエ...。...ケビンが...助けに来てくれた時の眼は...とてもカッコ良かったです...。あいつは...きっと生きるです...。生きて欲しいです...。翠星石も...一緒に祈るですよ...」

「...ふふっ。それは...心強い...!女性の祈りほど、男を励ますものはない...!」

ク?らに走り続けた。

足に天蓋の欠片が突き刺さる。

だが、微動だにしない。

瓦礫。落ちる。クロエは全てかわしきる。

走る。ケビンの覚悟が、自分を突き動かす。叱咤する。

しばらくすると、入ってきた時と同じ雲が渦巻いているのが見えた。

クロエは瓦礫を蹴り上げながら、渦に向かう。

クロエが渦に入った刹那。

夢の世界は、崩壊した。

「うわっ!」

クロエは、もといた休憩室に投げ出されていた。  
休憩室の中は、けたたましくアラームの音が鳴っていた。

光る玉がクロエに近づいてくる。  
その精霊は、ぜんまいをクロエの前に出した。

「...?ぜんまい?...ああ、ドール達のねじか...」

クロエはそれを受け取ると、ドール達の元に向かい、まず蒼星石を抱きかかえた。

「...ここか?」

背中にぜんまいを入れると、見事に嵌まった。

クロエは何回かぜんまいを回した。

蒼星石の体が少しずつ動き出す。

「う...う〜ん...こ、ここは...?」

「休憩室だ。戻ってきたぞ。少し待ってろ、翠星石のねじを回す」

クロエは次に翠星石のねじを回した。

「う...う〜ん...。起こすのが遅えです!デカ超人!」

「むう...なんて元気の多いやつだ」

「そうだ、そういえばケビンは!？」

「そうです!ケビンは起きたですか!？」

「...まだだ」

クロエがケビンを抱き起こすも、まだ瞳は閉じたままだった。

「...まだ、眠っている...」

「そんな...起きるですよ...!翠星石に心配かけさせんじゃねえです!」

翠星石がケビンの頬を何度か叩く。

すると、ケビンから小さな唸り声が聞こえてきた。

「う...うるせえぞ...。気安く俺を起こすんじゃねえ...」

ケビンはゆっくりと上体を起こす。

驚いた翠星石は、思わずクロエの後ろに隠れた。

「ケビン!」

クロエは感極まり、ケビンに思いっきり抱きついた。

「おい...抱きつくな...気持ち悪い...」

「ははっ、いや悪い。お前がもう起きないのかと思ってな...」

「馬鹿なこと言ってんじゃねえ...。しかし...長い...夢を見ていた気がする...」

「ほお、どんな夢だ?」

「俺が小さくなる夢だ...。変な人形と闘って、ダディのことでクロエと喧嘩する夢だ...」

「...それは、悪夢だったか...?」

「...いや、不思議と...嫌な気はしなかったな...」

「そうか...」

「...なあにが変な人形ですか。乙女に向かって無礼千万ですう!」

翠星石は、クロエの背中からひょこっと顔を出すと、毒づきながら言った。

「!?!?...な、何故...!?!」

「こら、翠星石...!姿は隠しておく約束だったじゃないか...」

「...おい...!あれは夢の中の話じゃなかったのか!?!」

クロエがなんとも言いにくそうに目を泳がせる。

「まあ、何というかな...」

「お～まえがいつまでも反抗期だから、心の中で喝を入れてきたですよ!」

「ってことは...あの夢は、夢じゃなかったのか...!？」

「はあ～あ。『I'll be back!』って、かっこつけ過ぎですう」

翠星石の言葉に、ケ빈は見る見る顔を紅潮しだした。

「こんの腐れ人形があ...!あんとき助けた恩を忘れたかあ!」

「へん!蹴り飛ばされた恨みは忘れねえですう!」

「あっ、じゃあ僕も投げられた恨みを晴らして良いかな？」

「うるせえ、出ていけ!性悪人形ども!」

「きゃあっ、万年反抗期が怒ったですう」

ケ빈は年甲斐もなく、翠星石たちと追いかけてっこをしている。

「ほら、ケ빈。練習を再開させるぞ!遊んでる時間はないからな!」

「...分かってる!とっとと再開するぞ!」

「ああ、新しく覚えなきゃならない技もできたしな」

そう言うと、二人はリングに戻っていった。

「な～んか、翠星石たちの出番はなかったですね」

「そうだね。でも、これで良かったと思うよ」

「どうしてですか？」

「心の成長っていうのはさ、僕たちが無理矢理するんじゃなくて、その人自身の力でやるべきだと思うんだ。あの二人のやり取りを見て、そう実感したよ...」

「そうですか...なんとも面倒くさいものですう」

「ははっ...。ほら翠星石、二人の練習を見に行こうよ」

「うっしゃ。ばっちり野次を飛ばしてやるですう!!」

二人は走って休憩室を出ていった。

二人の消えた休憩室に、怪しげな影が現れた。

「...ウサギの穴は不思議の穴。奇奇怪怪にして、生死の繋がりを歪める...。だがさて、真に歪められているのは、運命か、この世界か...」

影は自然と立ち消えていった。

## プロフィール-テリー・ザ・キッド

---

名前:テリー・ザ・キッド

出身地: アメリカ・テキサス州アマリロ

身長体重: 190cm 86kg

超人強度: 105万パワー

年齢: 16歳

好物:ピーナッツ、ポップコーン

嫌いな食べ物: 醤油（ソイソース）、ガーリック

必殺技:ハイボルテージボム、スピニング・トゥホールド、テキサス・クローバーホールド、カーフ・ブランディング

備考: 万太郎と同期であり、親友でもある。超人オリンピックでは棄権し、万太郎の応援に回っている。

雪がちらつく山の中、黙々と鉄拳を繰り出す男がいた。

拳は巨大な岩を穿ち、当たる度に大きく山が鳴く。

その男の体は傷だらけで、お世辞にも優雅と呼べないものだ。

男はただ、更なる力を求めて、体を痛めつけていた。

その男を上空から見つめる人形が一人。

この人形、大きな力を持つ超人を探し求めていた。

当初は人間に巻かれており、その人間から力を貰う予定であった。

だが超人の存在を知り、更なる力を求めて、その者のもとを飛び出してきた次第である。

そして偶然にも、ここでポテンシャルの高い超人を見つけたのだ。

「...丁度良いわね。あいつを捕まえて、力の供給源にしましょう」

猫なで声でそう言うと、人形はその超人のもとに降下していった。

「はあい。精が出るわねえ」

「...ああ？」

超人は、突然声をかけられて思わず振り返った。

しかし、突然の出来事に全く驚いていないところを見ると、自分の力に絶対の自信を持っていることが窺える。

その態度こそ、水銀燈の求めていた者に近かった。

「うふふ、良いわあ。実は私、あなたの力が欲しいの。貸してくれるかしら？」

「...てめえ、人間じゃねえな。超人か？それに、人にものを頼む時くれえそのムカついた喋りをやめろ」

「ああ、それはごめんなさいね。でも、これは直せないわあ。だから、無理矢理にでも頂くしかないわねえ...！」

「けっ。おめえ、はなからその気だったじゃねえか。女の癖に殺気は一丁前に出しやがって...！」

男は腕を構え、ファイティングポーズをとった。

「少しは出来るんだろ?じゃなきゃ、そんなちっせえメスが、このスカーフェイス様に挑もうなんざしねえよな？」

「ふっ、まあ私が強いってのは当たりよお。でも、私はメスじゃないわあ...!誇り高きローゼンメイデン第一ドール、水銀燈よ!!」

水銀燈は、背中の羽を弾丸のように繰り出す。  
威力は低いが、次々とスカーに突き刺さった。

たちまち、スカーフェイスの体は黒い羽に覆われた。

「あはは！口ほどにもないんじゃないんじゃなくてえ？」

「...てめえ、誰を相手にしてると思ってやがる...!!」

スカーフェイスが腕で薙ぎ払うと、前方にあった羽は全て取り払われた。

スカーは腕に刺さった羽を乱暴に引っこ抜くと、地面に投げ捨てた。

「これがてめえの本気か...?ちゃんちゃらおかしいぜ!次は俺の番だ!股あ開く準備でもしておきな！」

スカーフェイスは頭にかけてある仮面を目につけた。

「狂乱の仮面(マッドネスマスク)!、突如スカーの雰囲気が一変する。

スカーフェイスから、狂気を帯びた凄まじい殺気が現れた。

「...ふふっ、それが...あなたの実力ってわけえ...？」

「もうてめえと喋る気はねえ...!一気に畳み掛けるぜ！」

スカーは水銀燈に向かって駆け出し、大振りに右拳を放った。

「ふん。そんな攻撃、当たらないわよお」

「はっ、こんな攻撃、餌に決まってんだろ！」

スカーは拳を放った状態から更に体を捻る。

背を見せると、鋭利な刃物に変わった尾を水銀燈に向ける。

「スワロウテイル！」

「くっ...!」

一度のけぞってしまった水銀燈は、体を捻って避けようとする。  
だが間に合わず、スワロウテイルは腹部を切り裂く。

「...ああ？てめえ、腹がねえのか？」

「...うるさい！」

「けっ、使えねえ女だ」

スカーフェイスは水銀燈の頭を掴んだ。

「悪いが、俺は女子供だろうと、容赦はしねえんだ。ヘルリバーブランチ！」

スカーフェイスは片膝を立てると、そこに勢いよく水銀燈の背中を叩きつけた。

「かはっ...!」

「まだまだあ！狂乱の宴は終わっちゃねえぜ!」

スカーフェイスは水銀燈の頭を抱えたまま、天高く上昇した。

そして水銀燈をキン肉バスターの体勢に持ち込み、その首に足で三角締めをかける。

「とどめだ!アルティメットスカーバスター!!」

スカーフェイスは勢いよく落下していく。

「ふふふっ...。さすが超人ね...！凄いパワーだわあ...。でも、すこおし、おつむが足りなかったわねえ...」

「何だっつ」

「まず一つ目、私の翼は、飾りじゃないわあ...!」

水銀燈の翼が大きくなると、思い切り羽ばたき、二人は空中で停止した。

「なっ...！」

「二つ目。この技は対人用ねえ。人形の私には、足のかかりが甘くてよ！」

そういうと、水銀燈は頭を横にして、三角締めから脱出する。

「何だと!？」

完全に技から抜け出した水銀燈は、スカーフェイスのバックに回る。

「三つ目。完治していない傷跡は、敵に見せるものではなくてよ!」

水銀燈は、翼を大きな龍に変え、背中にあるスカーの古傷に攻撃した。

「っ!...うがああああ!!」

スカーは昔、背中に重傷を負ったことがある。

その古傷は、対万太郎戦でのマッスルミレニアムによって、さらに開いてしまっていたのだ。

仮にも幾千と戦ってきた水銀燈が、それを見逃す筈がなかった。

「あっははは。あの尾の攻撃はやめなさい。弱点がばれてしまうもの...。もっとも、もう遅いのだけれど...!」

水銀燈は翼の龍に噛み付かせたまま、スカーを地面に叩き落した。

「さっきのお返ししよう。威力は段違いでしょうけどね!」

水銀燈が地面に着地すると、スカーは直ぐに立ち上がろうとする。

「てめえ、俺様をコケにしてくれたな...!」

「駄目よう動いちゃ。体は大切にしなきゃ」

水銀燈がスカーの頬に口付けをすると、スカーの体から力が抜け出した。

「...う、ああ...てめえ...何しやがった...」

「別にいい。ただ、ちょおっと眠っててもらおうかしら。アリスゲームの終わる頃までね」

「...くそっ.....やろう...」

スカーの瞼は、完全に閉じられた。

「うふふ、それでは、薔薇の誓いを...」

水銀燈が左手についている指輪をスカーの唇に当てると、その指輪はスカーの左薬指に移った。

「ふふ...凄いわぁ。力が漲ってくる...！」

水銀燈は力を試すように、周辺の樹々を薙いでいった。

「この力なら、ドールをまとめて相手しても全く遜色はないわねえ」

水銀燈は大きく高笑いすると、大空に飛び立っていった。

ところ変わって美波理公園、キン肉ハウス。

万太郎は、困惑した状況に直面していた。

「はい、万太郎。紅茶よ」

「ど、どうも...」

「ふふふ、今日も凜々しいわね。万太郎」

「は、はい...」

真紅は二人分の紅茶を淹れると、万太郎と自分の前に出した。

万太郎は助けてと言わんばかりに、チラチラと金糸雀を見る。

「...ちょっ、ちょっと待つかしら、真紅！カナの紅茶がまだかしら！」

「ツッコミ所そこ!？」

万太郎の助けてコールは、華麗に理解されなかった。

「あら、それくらい自分で淹れなさい。自分のことくらい自分で出来なきゃ、薔薇乙女失格よ」

「むう...じゃあ何で万太郎の分は淹れたのかしら...！」

「それは...勿論命の恩人だからよ」

「何で間があったのかしら...」

「ふふっ。聞けば、悪者に奪われたローザミスティカを取り返してくれたらしいじゃない。それに、私は感じたのだわ。奪われて体内にいた時、熱い魂の叫びを...！ あれは、必死に私を助けだそうとする情熱よ。そして私の心は、思わず焦がされてしまったのだわ」

真紅は頬に手を当てながら悶える。

だが金糸雀は、どうも理解出来ないようだ。

「...っでも、この顔を見るかしら！ 紛うことなきブタかしら！」

金糸雀は万太郎の顔を真紅に向けた。

「...ねえ、今猛烈に酷いこと言ってない...？」

万太郎が冷静に突っ込む。

「あら、男は顔じゃないのかわ。ハートの熱さよ。ねえ、万太郎？」

「...いや、僕に振られましても...」

「...はあ。これはだいぶ重症かしら...」

金糸雀は思わずため息を吐いた。

「ほら、万太郎！ノロけてないで、もう休憩は終わりかしら！さっさと練習に戻るかしら！」

「いや...僕はのろけてないぞ。って、まだ休憩して十分も経ってないじゃないか！」

「そうよ。私たちに妬いちゃだめなのかわ、金糸雀」

「カナは妬いてなんかないかしら！大体真紅。万太郎は決勝戦まであまり時間がないかしら！だから休憩なん...」

「凄いわ!万太郎。決勝だなんて。この真紅、精一杯応援するわ。頑張ってるね？」

「は、はい...。頑張らせて頂きます...」

「って、カナの話を聞くかしら~！」

「あら、二人の世界を邪魔するなんて無粋ね。そんなんじゃモテないわよ」

「うるせーかしら！」

「もーう！分かった、分かった。僕はこれから練習するから、二人で真紅の分の買い物行ってきて！」

「いやなのかわ！私は万太郎の練習を見ているのかわ！」

「お買い物に行かないと、もう口を聞かないよ！」

「うっ...わ、分かったのだわ...」

真紅はしぶしぶ、金糸雀に連れられて買い物に向かった。

点けっ放しのテレビが、ニュースを読み上げている。

『次のニュースです。超人が失踪するという事件が続き...』

「はぁ。僕も色んな意味で事件続きだ...。うおおお、なんで僕の周りには、人間じゃなくて人形の女の子集まるんだあ！」

万太郎は無駄な嘆きに浸っていた。

一方、金糸雀と真紅の二人は、堂々と歩道を歩いていた。

「ねえ...金糸雀。こんな白昼に道を歩いて大丈夫なのかしら？」

「それは大丈夫かしら。どうやらこの世界では、超人というのが人間と共存してるかしら。それで、不本意だけど私たちは、超人の子供だと見られてるかしら」

「むっ、この薔薇乙女を指して、子供とは失礼なのだわ!」

「でもその設定だと、スーパーのおばさんが優しいかしら。この前なんか、『女の子なのに闘うなんて偉いねえ』って言われて玉子焼きを貰っちゃったかしら」

金糸雀は両手で頬を押さえて、笑顔を綻ばせる。

それとは対照的に、真紅は顎に手を当てて難しい顔をしていた。

「ふ〜ん...違う選択をした世界なのね...」

「...どうしたのかしら、真紅？」

「...いや、何でもないわ。早くスーパーとやらに行きましょう」

真紅は顎に当てていた手を離すと、金糸雀を追い越して先に行った。

「ちょっと、待つかしら〜!」

二人はスーパーのカゴを持って中に入った。

「ああ、カナちゃん。また来てくれたの〜?」 「あ、この前のおばさんかしら〜。こんにちはかしら〜」

「はい、こんにちは。今日はお友達も一緒?」

「そうかしら。この子はカナの妹で、同じローゼンメイデンの真紅かしら」

「初めまして。私はローゼンメイデン第五ドール、真紅よ」

「初めまして。真紅ちゃんね。今日もお買い物？」

「そうかしら。新しく居候が増えたから、仕方なく買い足しに来たかしら～」

「むう、あなただって居候じゃない」

「ふふん、カナの方が一日先輩かしら～」

「あら、愛は長さじゃなくて想いの強さなのだよ。あなたには負ける気がしないのだよ」

「そ、そこでは張り合っていないかしら～...」

「ふふ、二人とも中が良いのね。それで、今日は何を買いにきたの？今は暇だから、おばさんが案内するわよ？」

「ありがとうなのかしら～。え～っと、メモメモ...あった。お米と牛肉と、玉ねぎと麦茶かしら」

「紅茶を忘れてるわ、金糸雀」

「うるせえかしら。そんなの自費に決まってるかしら」

「あらあら、カナちゃん。そんな乱暴な言い方しちゃ駄目よ。それじゃ、おばさんが、真紅ちゃんの入居祝いで買ってあげるわ」

「ありがとうなのだよ。どこかのデコっぱちに爪の垢を飲ませてやりたいのだよ」

「おばさんは甘すぎるかしら...」

二人はおばさんの案内で、比較的スムーズに食材を集めることが出来た。

「それじゃあ、おばさんは担当場所に戻るから、また来てね」

「ありがとうのかしら～」

「ありがとう、おばさま。また来るのだわ」

「優しいおば様だったわね」

「ふふ、人間も捨てたもんじゃないかしら」

二人がレジに向かっていると、お菓子売り場から騒がしい声が聞こえてきた。

どうやら、若い男の上に乗っかっている幼子が喚いているらしい。

「ハイ!落ち着けて雛苺。また『うにゅ〜』とやらを探してやるから」

「嫌なの〜。ヒナは今食べたいの〜」

「う〜ん...、困ったな。日本の食べ物には詳しくないんだがな...」

男が困ったように頭を掻く。

「あら、雛苺じゃない」

「あ〜っ、真紅なの〜!」

雛苺は男から飛び降りると、真紅のもとに駆け寄った。

「懐かしいの真紅〜」

「カナもいるかしら〜」

「あ、神奈川〜」

「カ・ナ・リ・ア!かしら!」

「うゅ〜、ちっさいことは気にしちゃだめなのよ〜」

「いやいや、カナのアイデンティティの危機かしら...!」

「おや、雛苺の仲間か?」

男も気づいたのか真紅たちのもとにやってきた。

「あら、こちらは？」

「うゅ、ヒナのミーディアムになったキッドなのよ」

「テリー・ザ・キッドだ。お前達もローゼンメイデンってやつか？」

「そうなのだよ。私はローゼンメイデン第五ドール、真紅よ」

「カナは第二ドール、金糸雀かしら〜」

「ああ、よろしくな。...ところで聞きたいことがあるんだが、こいつの言う『うにゅ〜』っていう食べ物を知らないか？ 昨日、近所の人から貰ったらしいんだが、俺は日本に来てまだ日が浅くてな。よく分からないんだ...」

「うにゅ〜？」

「そうなのよ〜白くて、甘くて、うにゅ〜ってしてるのよ〜」

雛苺が懸命に手を使って表現するも、金糸雀たちには伝わらない。

「...残念ながら、私たちにも分からないわ」

「うゅ〜真紅〜...」

何か思案していたキッドが、パチンと指を鳴らした。

「...よし、じゃあ雛苺。うにゅ〜ってやつの変わりにドーナツ買ってやる。それでいいか？」

雛苺は消沈した顔をすぐに輝かせた。

「やった〜!ドーナツなの〜!食べるの〜」

「単純かしら〜...」

「ははっ、お前達も一緒に来るかい?奢るぜ？」

「本当かしら?行くかしら!お買い物無視してでも行くかしら!」

「もう...はしたないわ、金糸雀。それに、遅くなると万太郎が心配するのだよ」

「えっ?今お前らは、万太郎のところにいるのか？」

キッドが万太郎という単語に反応した。

「ただいま居候中かしら〜」

「違うわ。同棲よ」

「ちょっと黙ってるかしら〜」

「なら丁度いい。ドーナツを買って万太郎のところで食べよう。最近あいつ音信不通だったからな」

「あら、お友達だったのかしら？」

「まあな、腐れ縁ってやつさ。あいつ、ミートがいなくなって意気消沈してたからな。ちょっと元気づけにさ」

キッドと真紅たちは、会計を済ますと、ドーナツ屋で十個ほどドーナツを買った。

「今頃あいつどうしてんだろうな。きっと、ケビン達の脅しにびびって練習どころじゃないだろうな」

「あら、万太郎は今練習中よ」

「えっ!?あの万太郎が!? 何でだ!?!」

「ふふん、カナがコーチしてあげてるのかしら～」

「ユーが...!?!」

「ねえ～キッド。そろそろ『まんたろー』について教えてなのよ～」

雛苺がキッドの上で暴れだす。

「ああ、分かったから頭の上で暴れるなって...」

キッドはなんとか雛苺を宥める。

「ふう。...そうだなあ。あいつは一言で言い表すと、ヘタレだな」

「そんなこと無いのかわ。彼は私を助けてくれるハートの熱い男よ」

「...へっ?」

「気にしなくていいかしら～。この子は只今マンタにゾッコン中かしら」

「なんという自然界の神秘...!」

「うゅ～しんぴなの～」

「...そろそろ本気で殴るのかわ」

真紅が少しムツとすると、キッドがとりなすようにおちゃらけた。

「ハイハイ、そうかっかするなって。あいつも、なんだかんだ日本の危機を救ってるヒーローだからな」

何とか宥めると、四人がキン肉ハウスに向かった。

商店街を少し外れると、突如としてキッドの頭が軽くなった。

「キッド～!!」

「なんだ雛苺？ 面白いもんでもあったのか...って、いない!？」

キッドが辺りを必死に見回すと、雛苺はショーウィンドウから伸びた腕に鷲掴みにされていた。

ゆっくりとショーウィンドウから人形が現れると、その人形は挑発的に笑いだした。

「ふふふ、おばかさあん。油断しすぎよお」

「誰だ!」

「あなたは...水銀燈!」

「水銀燈...?」

「同じローゼンメイデンなのかしら...。ただ、私たちと違って凄く好戦的で...姉妹を壊すことも躊躇わないのかしら...」

「何だと!？」

「あらあ、不思議なこと言うわねえ。アリスゲームなんだから、壊すのは当然でしょう?」

水銀燈は雛苺を掴む手の力を強めた。

「くっ、水銀燈!雛苺をはなしなさい!」

「キ、キッド〜...」

「雛苺!今助けるからな! おい、その手を離せ!さもなくば力づくでいくぞ!」

「あらあ、あなたのような雑魚超人が私を倒せるとでも...?」

「...おい、銀髪...。口の利き方には注意した方が良いぜ...」

「ふふふ、格下におもねる言葉は持ち合わせてないわあ」

「なら、体に刻み込んでやる!」

キッドは壁を蹴り上げると、上空の水銀燈のもとに跳んだ。

「テキサスの暴れ馬は、簡単にや止められねえぜ! テキサスストレート!」

キッドは渾身の右ストレートを放つ。

殴る。水銀燈は翼で受け止めた。

そしてキッドを羽で弾き飛ばす。

「くっ！」

キッドは直ぐに立ち上がる。

「ふふ、奇遇ね。乙女の狂気も、一度出たら止まらないわよお」

水銀燈は左手を胸元におく。

すると、体から邪悪なオーラを醸し出し始めた。

「...うう、何だかとっても怖いの...」

雛苺は思わず体を震わせる。

「な、なんなのかしら！このオーラは...!？」

「こ、これはまさか...！」

キッドは、身に覚えのあるオーラに、たじろいでしまう。

水銀燈の体が、闇を纏った。

「...ふふ、マッドネス・メイデンといったところかしらあ。ああ、何だかとっても真紅を壊したいわあ.....死になさあい！」

水銀燈は膨大な量の羽を一斉に飛ばした。

「くっ!」

真紅はすぐさま薔薇の弁で防護壁を作る。

しかし、ミーディアムのいない真紅では、防ぎきれずに破れてしまう。

「きゃあっ!」

「うわっ!」

三人は後方に大きく吹き飛ばされた。

「くっ...やはり、この力は...!」

「何か知ってるの...!?キッド」

「ああ...。このパワフルで、残虐性に満ちた力は、恐らくかの悪行超人スカーフェイスのものだ...!」

「悪行超人!?じゃあ水銀燈は、超人の力を取り込んだというの!?」

「そうだとしたら、最悪だぜ...」

その頃、騒ぎを聞きつけた近隣の人々が、集まってきていた。

一部の人達が、超人警察に連絡している。

「ふん、野次馬が集まって来ちゃったわねえ...。真紅、超人! nのフィールドに来なさい。そこで決着を着けてあげるわあ」

水銀燈はそう言うと、雛苺を捕まえたままショーウィンドウの中に戻っていった。

残された三人は、呆然と見送るほかなかった。

「くそ、なんてことだ...!」

キッドはそうやって頭を抱えた。

「スカーフェイスっていうのは、そんなに恐ろしいやつなのかしら...？」

「ああ。奴は強大なパワーを持ち、そして底抜けのタフネスさを持つ。実際、万太郎のターンオーバーを受けても立ち上がった男だ。古傷さえなければ、恐らく21世紀最強の強さを誇るだろうな...」

「それは恐ろしいやつかしら...」

金糸雀もようやく事態を飲み込んだのか、驚愕の表情をしている。

「...金糸雀、万太郎を呼んでくるのだわ」

真紅は立ち上がると、金糸雀にそう告げた。

「...分かったかしら！」

「キッド。私と一緒に雛苺の救出に向かってくれるかしら？」

「...オーケー！助けに行こう！」

真紅はショーウィンドウに手を当てた。すると、ショーウィンドウは光だした。

「...真紅、キッド。カナ達が行くまで、なんとか持ちこたえるかしら...」

金糸雀は不安そうに二人をみつめる。

「あら、そんな顔をしなくても大丈夫よ。むしろ、ダーリンの見せ場がなくならないか心配だわ」

真紅がいたずらめいたように笑う。  
それに思わず金糸雀も釣られてしまった。

「もうダーリン呼ばわりかしら...！ ...とにかく待ってるかしら！カナ達が華麗に駆けつけてすぐに倒しちゃうかしら！」

「ええ、待ってるのだわ」

「じゃあ、行くぞ、真紅！」

真紅とキッドはショーウィンドウの中に飛び込んでいった。

「カナも急がなきゃ！」

金糸雀は懸命に走った。  
鞆に乗って来なかったことを少し後悔する。

金糸雀が公園にたどり着いた時、万太郎は汗だくになりながら猛練習をしていた。

「...ミート...!観ててよ...!...必ず、チャンピオンベルト持って、お見舞いに向かうから...!」

「...はあ、はあ、万太郎！」

「ん？金糸雀。そんな急いでどうしたの？それに真紅は？」

「大変かしら!真紅とキッドが危ないかしら!」

「えっ！何だって!?一体何が!？」

「説明してる暇はないかしら！とにかく早く向かうかしら！」

「分かった！」

万太郎は持っていたサンドバックの人形を投げると、直ぐに金糸雀の後を追って駆け出した。

「場所はnのフィールドってところかしら。そこで真紅たちは闘ってるかしら！」

「nのフィールド...？」

金糸雀は万太郎の疑問に答えず、服屋に入った。

「ちょっと試着室借りるかしら！」

「え...！？お客様、商品の方は...!...っていない...？」

金糸雀は鏡に手を当てると、万太郎を引っ張って直ぐにnのフィールドに入った。

そこでようやく、金糸雀は手短かに経緯を説明した。

「うええ!?スカーがやってきたの!？」

「ち～が～う～かしら！ この脳筋!人の話はちゃんと聞くかしら！ だから、水銀燈がそのスカーってやつからパワーを貰って強くなってるのかしら！」

「ほっ。何だあ、スカーはいないのかあ。じゃあ何とかなるよ」

「そんな甘くはないのかしら...！ 実際、あのキッドが押されてたから、恐らくスカーのパワーと同等.....ローザミスティカの分を考えると、それ以上かしら...！」

「なに！？.....よし、カルビ井食べて今日は帰ろう！」

「ヘタレなかしら！キッドは万太郎の友達なんでしょう!？」

「そ、そうだけど...」

「それに、キッドは万太郎のこと心配してたかしら。ミートがいなくなって落ち込んでいるだろうって。だから、今日万太郎を励ましに行くって！」

金糸雀が真剣な眼差しで万太郎を見つめる。

その視線に、万太郎も顔を引き締めた。

「キッド...。よし！ カルビ井は後だ！金糸雀、急ぐよ！」

「がってん承知かしら！」

二人は更に速度を上げて、水銀燈のもとに向かった。

一方、真紅とキッド達は、既に水銀燈の世界に着いていた。

そこは相変わらずの廃墟の世界であり、ところどころに人形の残骸が落ちていた。

日は当たらず、陰鬱とした空気を醸し出している。

「来たわよ、水銀燈！姿を現しなさい！」

真紅は大きな声で叫ぶ。建物の上から、水銀燈が徐に降りてきた。

「荒々しいのね、真紅。そんなんじゃ薔薇乙女失格よ」

「人攫いに言われたくはないわね」

「おい、銀髪！ 雛苺はどこだ！」

「無礼な男ね。雛苺ならあそこよお」

水銀燈が指さした先には、雛苺が人形の残骸と一緒に捨て置かれていた。

「雛苺！」

キッドはすぐ駆けつけ、雛苺を抱き起こすが、反応は全くなかった。

「ごめんなさあい。指す場所を間違えてしまったわぁ…。本当はここ…」

水銀燈は両手をいとおしそうに胸元に置いた。

「あなた…まさか…！」

「ふふ、ローザミスティカは貰ったわぁ。だから、雛苺はもう返してあげる…。良かったわねえ…お二人さん」

「水銀燈...!」

キッドは雛苺をそっと壁によりかけると、水銀燈を睨みつける。

「...もう許さねえ！銀髪、俺が相手だ！」

キッドは水銀燈に向かって駆け出す。

「ふふ、バカじゃなあい。誰が地上戦に持ち込むものですか!」

水銀燈はキッドの到着前に飛び上がった。

「はっ、暴れ馬を舐めちゃいけねえ!」

キッドは並ならぬスピードを出し、大きくジャンプをする。  
足。取る。掴んだテリーは、不敵に笑う。

「テリー家に足を掴まれたことを後悔しな!」

キッドは両手を使って、空中で水銀燈の足を四の字に固めると、裏に返してその腰骨に乗った。  
そして両足で水銀燈を両脇から挟みあげた。

「くらえ！テキサス！クローバーホールド!!」

キッドは水銀燈の体を反り上げた。

「うっ、いやあああ！.....なんてね！」

効かない。水銀燈は腹部が無い分、余計に体を折り曲げると、キッドの足から脱出した。

「何だと!？」

「水銀燈には腹部がないわ！」

「残念ねえ、手遅れよ！」

水銀燈は羽ばたいて両足も脱出する。  
体勢を変えると、キッドの頭を下に向けた。  
そして羽ごとテリーの体に抱きつく。  
キッドは顔だけ出ている状態になった。

「このまま脳天をぶちまけてあげる!」

水銀燈は地面に向かって急降下する。

「させないわ!」

真紅が花卉を使って、攻撃をするが、水銀燈は巨大化した羽に覆われていて、全く効果がない。

「くっ!だめなのだわ!」

真紅が諦めかけたその時、

「うおおお!俺は諦めちゃねえぜ!」

テリーは何とか着地寸前に片腕を抜くと、それをクッション代わりに、頭からの直撃を防いだ。

「テリー!」

「へっ!テキサスブロンコを舐めるなよ!」

キッドは痛めた左腕を庇いながら立ち上がった。

「ふん、粋がったところでぼろぼろじゃなあい」

「なぁに…。ぼろぼろの方が、男は映えるのさ」

「ばっかみたあい。次は殺してあげる!」

「それはどうかな?」

水銀燈が動くより先に、キッドがダッシュで前に出ると、片手、両足でラッシュをかけた。

「お前の力は強大だが、俺には体格差でのリーチがある!」

キッドのラッシュは更に激しさを増した。

水銀燈は反攻に出たいが、文字通り、腕も足も出ない、もとい届かないのである。

「ふん!なら翼を使って…」

水銀燈が翼を動かそうとするが、それは途中で止まった。

「私を忘れては困るのだわ」

真紅は花卉と両腕で水銀燈の翼を抑えていた。

「くっ、離しなさい!!真紅!」

「あら、良く聞こえないのだわ。こっちを向いて話して頂戴」

「この…!」

「隙ありだぜ！」

キッドの放った右ストレートが、遂に水銀燈を捉えた。

水銀燈は後方に吹っ飛ぶ。

その勢いを借りて、更に真紅は水銀燈を後方に投げ飛ばした。

「ひゅ〜っ。良い投げしてるじゃないか」

「万太郎の見よう見まねでやってみたけど、案外上手くいくものね」

投げ飛ばされた水銀燈は、亡霊のようにユラリと立ち上がった。

「許さない許さない許さない……!!!」

「まだやる気なの!？」

「ふふふふふ…。お父様から頂いた体だから、嫌だったのだけれどね…。四の五の言ってもらえないわ……マッドネスパワー…」

水銀燈が胸に手を当てて、再び陰影とした影を出した。

そしてそれは徐々に広がり、水銀燈を覆いつくした。

「な、何が起きてるの!」

「お、おいおい…。これはヤバいんじゃないか…」

暫くして暗雲が晴れる。

中から現れた水銀燈は、かつて80cm程であった身長が二倍近く伸び、翼も比例して大きくなっていった。

「うふふ、この体になるとね。ミーディアムの力をフルに活用出来るのよ。それにお腹も元に戻るわあ。ミーディアム様々ね」

「なんてこと!?あなたまだ強くなるの...?」

「ははっ...もう笑うしかねえな」

「ふふふ。残虐性も倍になるから、ちょおっと可哀想な死に方になるわ。ごめんなさいねえ...」

水銀燈はそういうと、羽の弾幕を張った。

その弾幕は容赦なく二人を襲う。

圧倒的な力の前に、キッド達はなす術を失った。

「...万太郎、後は託したぜ...。俺にこいつは倒せねえ...。俺に出来ること...出来ることは、この子を守ることだ!!」

キッドは真紅を守るように抱えた。

「ぐああああ!!」

「キッド...!」

キッドの背中に無数の羽が刺さる。

「...キッド...離して...。そして逃げなさい...。この戦いはドールたちのもの...。あなたが命を張る理由はないわ...!」

「はっ。俺たち正義超人はな...弱きを助け、悪を挫くためにいるんだぜ...! 困ってる女の子を助けなくて、何が超人だ...! 何が正義だ...! 俺は...自分の覚悟を守るためなら、死んだって構わない...!!」

キッドは苦痛に耐えながら、まるで自分に言い聞かせるように叫んだ。

「キッド...」

「ふん、ヒーロー気取りかしら? バカらしい...! とっととその人形を渡しなさい!」

水銀燈は羽を飛ばしながら、二人に近づいた。

二人との距離を一步一步近づけていく。

だがその時、上からなにかが降ってきた。

それは水銀燈に当たり、水銀燈は下敷きになってしまった。

「いたたたっ。もう、金糸雀！落ちるなら落ちるって言ってよ！」

「それは万太郎が鈍いからかしら～…って！万太郎、下！下！」

「…下？そういえば、さっきから柔らかい感触が…って、あらっ…」

万太郎が手を動かすと、程よい感触が伝わってきた。

「…ふ、ふふふふっ…。お、お父様にも触れられたことがない、ち…乳房を…！死ね!!!」

「うひゃあ、結構なお手前…っじゃなくてごめんなさ～い！」

万太郎は直ぐに逃げ出すも、羽が容赦なく追ってきた。

「もう、万太郎は何をやってるのかしら～…」

金糸雀は傘を閉じると、水銀燈に向かってそれを向けた。

「水銀燈！神妙にするかしら！…って、見ない間に成長してるかしら～！奇跡体験かしら！アンビリバボーかしら！」

「あたしをおちょくるんじゃない！」

怒りに震える水銀燈は、次に金糸雀に標的を変えて羽を飛ばした。

「ひゃあっ！」

金糸雀はすぐに建物の裏に隠れた。

その間に万太郎はキッドのもとに駆けつける。

「二人とも大丈夫!？」

「...ははっ。さすが奇跡のエアースレイカーだな...。見事にぶち壊してくれたよ...」

「奇跡の逆転ファイターだ！...ってキッド！背中から凄い血が...！...羽...？」

キッドの背中には数多の黒い羽が突き刺さり、止めどなく血が流れていた。

「...キッドは私を庇ってくれたのよ...。それが正義超人の覚悟だって...」

「キッド...」

「はっ。負った傷は男の勲章さ...。万太郎、勝利の勲章はお前にくれてやるよ...このラッキーボーイ...！」

「...それはサンキュー、キッド...。...真紅、キッドを少し見ててくれ...」

「わかったのだわ」

「キッド...！僕も正義超人だ！ 正義超人として、今から僕は仲間を助ける!!」

万太郎はゆっくりと立ち上がると、水銀のいる方を振り返った。

「気をつける万太郎...！あの銀髪...パワーだけならスカー以上だ...！」

「大丈夫！今の僕は、負ける気がしない！」

「ははっ...ならもう言うことはねえ...行って来い！万太郎！」

「おうよ！」

万太郎は駆け出していった。

「良いの...？あんな勢いに任せちゃって...。実際、水銀燈の力は強大よ」

「確かに強大だが...、だからって今、何が出来る...？決戦を後日に伸ばすことなんて出来ない...。なら、俺達に出来ることは発破をかけることぐらいさ」

「でも...」

「心配するなって...！それに、心の力は大きいぜ...。強いハートは、時として偉大なる力を付与してくれるものさ」

キッドは笑って答える。

真紅の心配とは反対に、万太郎は勢いよく水銀燈に突っ込んでいった。

「行くぞ！水銀燈！」

「ふふ。わざわざジャンクにされに来たわけえ？」

水銀燈は、金糸雀を追うのを止めると、万太郎の方を振り返った。

万太郎は速度を維持したまま、跳び蹴りを入れる。

「甘い！」

水銀燈はしゃがむ。かわす。

そして、翼を使って万太郎を横薙ぎに吹き飛ばした。

万太郎は勢いよく飛ばされ、建物の壁にめり込んだ。

「万太郎！大丈夫かしら！」

金糸雀がすぐに万太郎のもとに駆けつける。

「...まだまだあ！」

万太郎は金糸雀を制して、再び水銀燈に向かっていった。

万太郎は殴りかかるも、それは容易く掴まれる。

「なんの！力比べだ！」

万太郎は水銀燈と両手を合わせた。

「うおおお!!」

「ふん、ぬるいわあ...！」

万太郎は押し返そうと踏ん張る。

だがやはり、分があるのは水銀燈だった。

徐々に押されて、体が下に下がっていく。  
だが、万太郎はまだ諦めていない。

「...今だ！」

万太郎は力を抜き、後方に倒れる。  
と同時に、巴投げの要領で水銀燈を宙に飛ばした。

「きゃっ！」

水銀燈はすぐに体勢を変えるも、飛び上がってきた万太郎に両足を掴まれた。

万太郎はその足を持って水銀燈を上下逆さにさせ、水銀燈の両二の腕に足を置いた。

「いくよ...！48の殺人技+1！キン肉ドライバー!!」

両者は疾風の如く、凄い勢いで落ちる。  
水銀燈の両腕には膨大な風圧がかかり、万太郎の足と相挟まれて動かせないまでになった。

「くっ、これはやばいわぁ...！メイメイ！」

水銀燈が叫ぶと、突如として丸い精霊が出てきた。

それは万太郎の目の前に行くと、強く光りだした。

「うわっ！眩しい！」

その眩しさに、思わず力が抜けてしまった。

その隙に、水銀燈は足を抜く。  
そして逆に、万太郎の足を持った。

「しまった...！」

翼を用いて、万太郎と体勢を逆転させる。

「ふふ、この0距離なら、効果は絶大でしょうね」

水銀燈は翼を構えると、無数の羽の弾丸を万太郎に乱射した。

「うひゃあ！」

万太郎は思わず、顔の前に両腕を出した。

「万太郎！今助けるかしら！第一楽章、攻撃のワルツ！」

金糸雀のバイオリンから、音の波動が飛び出す。  
それは水銀燈の飛ばす羽に当たり、威力を減殺させた。

「続いて、野薔薇のプレリュード！」

少し威力の弱い波動が、万太郎と地面の間に入り、クッション代わりとなった。

「うう、いてて...」

万太郎は腕に刺さった羽を抜いた。

「...万太郎！あなた、その程度の怪我ですんだのかしら！？」

「えっ？まあ、キン肉族の筋肉は頑丈だからね」

「...これは頑丈ってレベルじゃないのかしら...。恐らく、皮膚の硬化が一時的に起きたのかしら...」

金糸雀は顎に手を当てて、考えた。

「ふんっ、運良く重傷は避けられたみたいね...。なら、もう一度！」

水銀燈は再び羽を飛ばし始めた。

「万太郎！カナを肩に乗せるかしら！」

「へっ...？了解！」

万太郎は急いで金糸雀を肩に乗せると、走った。  
間一髪。水銀燈の攻撃は後ろを通過していった。

だが、水銀燈は執拗に追尾する。

「くっ、当たる...！」

「そうはさせないわ！沈黙の鎮魂歌(レクイエム)！クレッシェンド！」

金糸雀は突風を巻き起こし、羽を吹き飛ばす。

「くっ！まだまだあ！」

水銀燈は羽を更に増やして攻撃する。「ふふん、空気抵抗の受けやすい羽なら、いくらやっても無駄かしら！」

金糸雀の演奏の前に、羽は全て地面に落ちる。

「今よ、万太郎！接近戦に持ち込むかしら！」

「よっしゃ、行くぞ！」

万太郎は再び水銀燈のもとに駆け出す。

それに対して、水銀燈は翼を構える。

金糸雀。いない！

「敵は万太郎だけじゃないかしら！」

後方。水銀燈はすぐさま振り向く。

既に金糸雀が、バイオリンを構えている。

「ちっ。あっちは囷だったのね...！」

「気づくのが遅いかしら！第二楽章、追撃のカノン！」

「きゃあっ！」

頭の芯から激痛が走った。

金糸雀の奏でた音は、直接脳を左右に揺さぶる。

「隙ありだあ！」

万太郎は駆けたままの速度を乗せて、跳び蹴りを繰り返す。

だが、水銀燈にはまだ余力があった。

咄嗟に避け、蹴りは頬を掠める。

「くっ、もう許さない！」

水銀燈は翼を巨大化させると、万太郎を抱きかかえようとした。

「万太郎、今すぐ離れて！水銀燈は何かする気かしら！」

「何を言ってんだ。折角接近戦に持ち込めたんだ！ 返り討ちにしてやるさ！」

水銀燈が万太郎を捕まえようとするも、万太郎は屈んでそれを避ける。

「ふふ、私がローザミスティカを二つ持っているのを忘れちゃ困るわ！」

突然、万太郎の体は細い蔓に掴まれた。

「うわぁっ！」

「あれは蔓わだち！ まさか... 雛蔓の...！」

「あらぁ、知らなかったの？ 雛蔓のローザミスティカは、こ〜こ...」

「くっ...、すぐに返すかしら！ 追撃の...」

「同じ手は二度食わないわぁ！」

水銀燈は自らの羽を持つと、ダーツの様に投げる。

それは金糸雀のバイオリンに当たり、弦は切れてしまった。

「あっ...！」

「ふふ、そこでミーディアムの末路でも見ときなさい」

そう言うと、水銀燈は万太郎を強固に縛り上げる。

万太郎のものがきも虚しく、水銀燈は抱えらと、天高く上昇した。

「ふふふ、安心なさい。即死するくらいの高さから叩きつけてあげる...！」

「くっ.....もう...無理か...」

万太郎の目から精気が消え、万太郎はぐったりと顔を下げた。

その時、キッドの声が耳に届く。

万太郎は直ぐに反応した。

「おい万太郎！諦めてんじゃねえぞ！お前が負けたら、この子たちの運命はどうなると思う！」

「...っ！」

「お前、約束しただろ！正義超人として、仲間を助けるって！その覚悟を見せてみるよ...！」

「そうだった...。僕には守るべき仲間がいた...。失えない友がいた...！」

「ふん、まあ覚悟ってやつ...？」

「そうさ...！人は、背負う覚悟の重さが力になる...！！」

万太郎は両腕に力を込めた。

「うおおおお！火事場のクソ力あ！！」

額に肉の字が現れると、万太郎の体は青く光りだした。

「...すごいかしら...。カナの体にも力が溢れてくる...。そうだ！この力なら、切れた弦を直せるかしら！」

金糸雀はバイオリンに力を込めだした。  
上空の万太郎も、両腕に力を込める。

「うおおお!!」

万太郎の込める力は急速に強まり、葎わだちの一部は切れかかる。

「な、何!?まさか、このわだちを力で破る気!?!」

水銀燈が力を込め直すも、それより早く、わだちは破れた。

「次は僕の番だ!」

「ふん、わだちを切ったくらいで図に乗るんじゃないわよ!」

万太郎は掴みかかろうとする。  
それを水銀燈は、翼を繰って避ける。

「ちょっと予定が狂ったけど、これで終わりよ!」

水銀燈は全精力を片側の翼に込める。  
翼は急激に大きくなり、巨大な黒龍に変わった。

「死になさあい...!!」

黒龍の翼は、落下する万太郎に向かっていった。

「万太郎! 顔を覆うように両腕を前に!」

金糸雀は、声を上げて万太郎に言った。

万太郎は、両腕で防御の姿勢を取る。

刹那、龍は万太郎に噛み付いた。動きが止まる。万太郎の両腕がそれを抑えた。

「なっ!? か、噛みきれない...!」

「万太郎の腕は、筋肉を硬化させることでどんな攻撃にも耐えられるようになるかしら!」

「これが、父上から聞かされたキン肉族の、肉のカーテン...!」

「うわ...それはちょっとネーミングセンスを疑うかしら...」

「こらあ! 僕がつけたんじゃないぞ!」

「ほら、万太郎。手助けかしら! 失われし時へのレクイエム!」

金糸雀は修復したバイオリンを奏で、小さな竜巻を起こした。

それは地面を大きく抉り取る。そして抉られた大地は、万太郎の足元に向かう撃するかしら！」

「サンキュー金糸雀！行くぞ！うおおお!!」

万太郎の額が再び輝きだした。

万太郎は両腕を左右に広げだす。

すると、徐々に龍の口は開き始めだした。

「くっ！まさか...力押しされてるの...!？」

万太郎が最大出力で広げると、龍の口は大きく割れた。

「きゃあ!」

水銀燈は、痛みで悲鳴を上げる。

「今かしら! ディスコード!」

金糸雀は、小さな音の渦を無数に作った。それは列をなし、水銀燈のもとまで導く。

「万太郎! これを駆け上がるかしら!」

「了解!」

万太郎は音の足場を一つ一つ蹴り上げ、遥か上空の水銀燈のもとに駆ける。

見る間に距離を詰めると、万太郎は水銀燈の背後に跳んだ。

後ろ手で水銀燈の首を持つ。

そして、勢いよく首を肩に乗せると、両足をキャッチしてキン肉バスターの体勢に入った。

「ふんっ。何をするかと思えばこんな技...! 私は一度この技を破ったことがあるのよ!」

「スカーのバスターは破れたかもしれないけど、僕のバスターはそう簡単に破れないよ!」

万太郎は、水銀燈を前後反転させ体勢を変える。

次に、両足で翼をロックした。

「なっ!? 羽が動かせない...!」

「これで終わりだ! ターンオーバーキン肉バスター!!」

力を込める。万太郎は、凄い速度で落下していく。

「な、なにこの凄まじい圧力は...!か、体が...!」

水銀燈の体に重圧がのしかかる。

何かが生まれる。そう、万太郎は感じた。

音速に近い速度を維持し、地面に激突。

波動が、周囲に拡散した。

地面はその衝撃に耐えられず、大きく沈下する。

万太郎がゆっくりと手足を解くと、水銀燈はゆらりと前に倒れこんだ。

倒れた水銀燈は、元の姿へと縮んでいった。

その水銀燈に目をくれず、万太郎は両腕を見つめていた。

「万太郎!」

「...金糸雀。ははっ、勝ったよ!」

「ふふ...やったかしら!」

金糸雀がはしゃいでいる隣で、万太郎は重い表情で水銀燈を見つめていた。

「...どうしたのかしら？」

「...いや、成り行きで倒しちゃったけどさ。この子もまた、小さな人形だったんだなって...」

「憐憫の情でも湧いたの？」

「真紅...！」

「万太郎...。あなたの思っていることは正しいわ。確かに私たちは、元々戦闘用に作られていない。けどこの子は、明確な意志を持って戦いに臨んだわ。それは、この水銀燈の覚悟に依るもの...。その結果がどうであろうと、覚悟を蔑ろにして、情をかけるのは失礼じゃなくて...？」

「う〜ん...」

「そうだけ、万太郎」

キッドが雛苺を抱えてやってきた。

「キッド！もう起き上がって大丈夫なのか!？」

「まあな。...万太郎。俺達は、悪行超人であろうとも互いを認め合って闘っているはずだ。水銀燈の覚悟も尊重してやれ」

「...ああ、分かったよ」

「ふふ、良い子ね...。万太郎」

真紅は万太郎に微笑むと、水銀燈を抱き起した。

「...この子の損傷は激しいわ...。恐らく、この時代でのアリスゲームは無理でしょうね」

真紅が少し悲しい表情で言った。

「それはつまり、どういうことなんだ？」

「.....金糸雀の決定次第ね。金糸雀、仮にもあなたのミーディアムの勝利なのだから、水銀燈と雛苺のローザミスティカはあなたのものよ。二つを得るか...、二人に返すか...、あなたはどうするの？」

真紅は真剣な眼差しで金糸雀を見つめた。

金糸雀は躊躇う様子を見せず、毅然として答えた。

「カナの気持ちは、真紅の時から決まってるかしら...!。二人に返すわ。カナは、姉妹が、好きだから」

「良いのね？あなたの決定は、凄惨なゲームを長引かせるだけかもしれないのよ？」

真紅の厳しい言葉に、金糸雀は顔を下に落とす。

だが、金糸雀は懸命に言葉を搾り出した。

「うう...。でも...でも、カナは、皆がいなくなる方が辛いかしら...！」

「.....ふふ、分かったわ。ローザミスティカは、二人に返しましょう」

真紅が水銀燈の胸に手をかざすと、一つの赤く光る宝玉のようなものが出てきた。

「これが...ローザミスティカ...」

「ええ...。そしてこれを、雛苺に...」

真紅が雛苺のもとに手で導くと、吸い込まれるように雛苺の体に入っていった。

「...私も、皆がいなくなるのは寂しいわ。だから私は、あなたの答えに感謝してる」

「真紅…」

金糸雀は駆け寄ると、真紅に抱きついた。

「もう……出来た妹を持つと、姉も鼻が高いかしら～」

「ちょっ、ちょっと離しなさい、金糸雀!」

「離さないかしら～」

二人がじゃれているのをキッドたちは微笑ましく見つめている。

「ほら、金糸雀、離してやりな。それで、雛苺はどうしたら動き出すんだ?」

「う～、分かったかしら～」

金糸雀は渋々といった表情で、真紅を離れた。

ほっとした真紅は、衣装の乱れを整えている。

「はい、ぜんまいかしら。これを巻けば、雛苺は元通りかしら」

金糸雀がポケットからぜんまいを出すと、それをキッドに渡そうとした。

しかし、渡す寸前に、一陣の風が二人を遮った。

「な、何だ!？」

「これは……いや…!」

真紅は突如として心を乱し、万太郎にしがみついた。

「どうしたんだ真紅…?」

万太郎の疑問が届かぬうちに、黒い影が雛苺と水銀燈を攫っていった。

「うさぎの顛れは神出鬼没。巡り合いは数瞬にして、別れは千秋の限りとなる…。アリスゲームもまた然り…」

「…ラプラスの魔!」

そこには、顔がうさぎの、タキシードを着た奇妙な者がいた。

「雛苺はもう動きません。水銀燈がいえ、この世界でのアリスゲームは終了しました。雛苺とは次の逢瀬でお会いに…」

「待って!」

ラプラスの魔の言葉に、金糸雀が反応した。

「私たちは、もう眠ってしまうのかしら…!?!」

「これは異なることをおっしゃる…。既にゲームは終了し、この世界での意義は失われておりますのに」

「まだ...まだ、終わって無いかしら!カナには、万太郎を助けるという約束があるかしら!」

「出会いは永々に紡がれる織物にあらず...。些細なしがらみなど切りなさい」

「...駄目かしら。カナは、約束を守らなければいけないのかしら!」

「...そうね。アリスを目指す乙女なら、完璧の証として、約束は守るべきだと思うわ」

真紅は金糸雀を庇うように出てきた。

そして、しっかりとラプラスを見上げた。

「違って...?ラプラス」

ラプラスは無表情のまま、しばし沈黙した。

四人は固唾を呑んで見守る。

「...分かりました。二日待ちましょう。二日で、すべての縁を断ってきなさい...」

ラプラスはそう言うと、二つの人形を抱きかかえて去っていった。

「...ふう。危なかったかしら...」

「金糸雀...。約束、覚えてくれたんだね」

万太郎の感謝に金糸雀は笑顔で胸を張る。

「薔薇乙女は約束を違えないかしら。それに、万太郎のそばには、この金糸雀が必要かしら」

「あら、それは私への宣戦布告と受け取るわよ?」

「昼ドラにするなかしら~!」

二人がまた掛け合いをし出す。万太郎が視線を横に流すと、キッドが暗い表情をしているのに気づいた。

「キッド...」

「ははっ...、なんか不思議なもんだな。僅か三日の出会いだったんだけどさ。いなくなると、寂しくなるんだな...」

「...それは、不思議なことじゃないよ。それだけ、雛苺のことを想っていた証拠なんだから...」

「...ふっ。俺は一人っ子だからさ、妹がいるとこうなのかなって。迷惑かけてきて、心配させてきて、よく懐いてきて...楽しかったな...」

「.....よし！今日は僕ん家に来い！出会いがあるから別れがある。なら、皆で騒いでその悲しみを楽しい思い出に変えちゃおう！」

「万太郎...。ああ、そんじゃ、御相伴に預らせてもらうかな」

「おし、決まりだ！お〜い二人とも、じゃれてないで帰るぞ〜今日のご馳走買って帰るよ〜！」

「ご馳走！？」

「な、なんだって〜！かしら！」

二人はつかみ合う手を止めて、一斉に万太郎を見た。

「おう。今日はキッドを入れてどんちゃん騒ぎだ〜！」

万太郎は笑顔で拳を上に掲げる。

「やったのだわ！」

「やった〜！...って、ああ!!」

「どうしたの、金糸雀?大声なんてはしたないわよ？」

「やばいかしら....、お買い物袋忘れてきちゃったかしら〜!」

「何ですって!?あれは私の分の材料じゃない！今すぐ探してきなさい！」

「ちょっと待つかしら！真紅もいたから同罪かしら！ってか、真紅の食材だから自分で探すかしら！」

「私はあくせく動くのが嫌いなのよ」

「どこの女王かしら！そんなこと言ってないで早く探しに行くかしら！」

二人は何度目かの言い合いを始めた。

「...あっ、俺もドーナツ忘れた」

「これからパーティーの食材買いに行くし、一緒に探そうか？」

「いや、もう良いかな。上げる相手もいなくなっちゃったし、見たら悲しくなりそうだ...」

「...分かった。お〜い、二人とも。忘れたのはしょうがないから、買い出しと一緒に買いなおすよ〜」

「まあ、太っ腹なのだわ。でこっぱちに天罰なのだわ」

「あ〜！なにさりげなくカナの悪口いってるかしら〜！」

「ほら二人とも、さっさと行かないとスーパーが閉まっちゃうぜ」

「分かったのだわ」

「逃げるなかしら～！」

四人はどたばたと慌てながら、nのフィールドから出ていった。

現実世界は既に午後七時になろうとしており、近所のスーパーはまさにシャッターを閉めようとしていた。

そこに金糸雀がスライディングで滑り込み、何とか入れて貰えた。

「ふっふっふ。兵は神速を尊ぶ...カナの素早さの勝利かしら！」

「滑ってこけて運良くヘッドスライディングになっただけじゃないか...」

万太郎が冷静に突っ込んむ。

そんな四人の背後に、近づく人がいた。

「ふふ、来たわね、カナちゃん、真紅ちゃん」

「あ～おばさ～ん！」

「あら、こんばんわなのだわ」

「ふふ。カナちゃんたち、道路に荷物忘れたでしょ。はい、これ」

おばさんが抱えていたスーパーの袋とドーナツの箱を渡してきた。

「わあ！ありがとうございますら～！」

金糸雀は袋を抱えて満面の笑みを作った。

「一昨日の玉子焼きといい、どうもすみません」

万太郎がおばさんに少し頭を下げた。

「あらあ、良いのよ。私も娘が出来たみたいでうれしいわあ。うちは男の子しか生まれなくてね」

おばさんは笑顔で金糸雀の頭を撫でる。

金糸雀も嬉しそうだ。

それを見て、キッドは受け取ったドーナツの箱をおばさんに渡した。

「わざわざ届けてくれてありがとうございます。そのお礼として、このドーナツを上げますよ」

「あら、別に良いのよ、そんなことしなくても」

「いえ、受け取ってください。実のところ、渡す予定だった妹が、突然実家に帰ってしまいました。どうしようか迷っていたところなんです。息子さんも喜ぶと思いますよ」

万太郎の心がチクリと痛む。

「そうなの。それじゃあ頂こうかしら」

おばさんは恭しそうに受け取った。

「それじゃあお先に失礼しますね。またね、真紅ちゃん、カナちゃん」

「バイバイかしら～」

「またなのだわ」

二人は手を振って、おばさんを見送った。

その後、四人は店長の視線を感じながらも、急いで買い物を済ませた。

スーパーを出ると、キッドが万太郎の肩を叩いた。

「よし！今日は飲むぞ！」

「うえ！？まさか買ったの!？」

「さっきこっそりな。一緒に飲もうぜ」

キッドは万太郎の肩に腕を回して誘う。

「もう、我が家は酔っ払いの立ち入り禁止かしら!」

「ははっ心配すんなって。飲み会は九時から始めるさ」

「んもう、なんで人間というのはこうも飲みたがりなのかしら～…」

「まあ金糸雀。今日は許してやってくれよ。お酒で忘れられることもあると思ってさ」

「うう、分かったかしら」

「万太郎。酔っての夜這いはいりなのだわ」

「真紅は、はしたないという言葉をも自分の言動に当てはめてろかしら」

「あら、愛の前には言葉も霞むのだわ」

「都合よすぎかしら…！」

「ほら。ご飯が遅くなるから、皆帰るぞ～」

「分かったのだわ」

「ま～た逃げるのかしら～」

「はいはい、帰るよ、金糸雀」

そう言うと、万太郎は金糸雀を抱き上げた。

「あっ!金糸雀だけずるいのだわ!」

「ふふん。べー、かしら」

四人は、実に騒がしく帰途に着いた。

光の閉ざされた暗い場所。  
人形は笑っている。

...ふふ...体がぼろぼろ.....動かないの...? ...お人形さんみたいね.....私が動かしてあげましよう.....良い...?.....ゲームに参加させても.....

人形は、そっと姿を消した。

リングの上。ケ빈はクロエを追いかける。

蹴る。かわされる。ケ빈は距離を詰めていく。

だが、クロエはいなすように避ける。

追う。ここで逃がしたら、また振り出した。

ケ빈は、上手くコーナーに追い詰めた。

再び蹴る。上段。それをクロエは腕で防ぐ。来い。

クロエは、がら空きになったケ빈の片足にローキックを入れる。

読み通り。ケ빈はその足を掴む。

しゃがみ、その足を捻る。  
クロエの体が後ろを向く。

ケ빈は、クロエを逆さに持ち、遥か上空に跳んだ。

クロエの首を足で四の字に絞め、そのまま自分の腕で着地する。

「はあ！ロビンスペシャル！」

クロエの首が極限まで絞まった。

「ぐはっ！タップだ。ケビン」

その言葉に、ケビンは足を解く。

クロエは背中から飛び降りた。

「これで完全にマスターしたな」

「ふん。俺に出来ないことなどない...！」

そんな二人を、一体の人形がベンチから見学していた。

「けっ。な～に言ってやがるですか。さっきのロビンスペシャルなんか、股押さえて悶絶してたじゃねえですか。乙女になんつーもん見せてるですう！」

「なっ！？あれは少し着地を間違えたただけだ！ノーカウントだ！この人形！」

ケビンが大声で怒鳴る。

「きゃ〜、怒ったですう、犯されるですう」

翠星石は休憩室に逃げ込んだ。

「たくっ...」

「ほら、落ち着けてケビン。昼休憩にするぞ」

クロエが、ケビンの肩を叩いた。

「...分かった」

二人はリングを降りて、休憩室に向かう。

休憩室では、蒼星石が料理の配膳を行っていた。

翠星石も、食器並べを手伝っている。

「おっ。おかえり、二人とも。練習ごくろうさま」

「ああ。毎回すまないな、料理を作ってもらって」

「いや。マスターのお役に立てるならこれくらい大丈夫さ」

蒼星石は、照れるように言った。

結局、クロエは蒼星石と契約を結んだ。

翠星石ともする予定だったが、「もうしばらく考えてみるですう」だそうだ。

クロエとケビンは、向かい合って腰を下ろした。

卓上には、今まで食べたことのない和食が、並べられている。

これらは、全て蒼星石と翠星石が作ったものだ。

クロエの家で作り、それを詰めて持ってきている。

今まで、素のスパゲッティやサラダなど、栄養重視で素っ気ないものばかり食べていたので、バランスの良い和食には、大いに感謝している。

「さあ、召し上がれ」

「「いただきます」」」

四人は、料理を口に運ぶ。

「煮物はどう？おいしく出来たかな？」

「ああ、良く出来ている。とてもおいしいぞ」

「あ～！それは翠星石が楽しみにとっていた唐揚げですう！」

「ふん、何を言う。俺は選手だ。俺が優先されるべきだ」

「英国超人は、レディファーストをわきまえろですう」

「ははっ。笑わせるな。お子様にかかる礼儀など持たん」

ケ빈はひょいと唐揚げを口に運ぶ。

「こんの～吐き出せですう！」

「ぐおっ！やめろ！どけ！」

翠星石がケビンに飛びついて暴れている。

それをクロエは、目を細めて眺めていた

「賑やかだな」

「そうだね。あっ、お茶持ってこようか？」

「ああっ。頼む」

蒼星石は、近くのポットにお茶を淹れにいった。

賑やか、という言葉がクロエはしばし反芻していた。

今考えれば、ケビンとの昼時にここまで騒いだ記憶はない。

むしろ、二言三言話せば上出来という具合であった。

パートナーとしての自分。それは、ケビンの一面を強固に支えている。そう自負している。だが、もう片方からのアプローチも必要であった。俺が理で支えるなら、もう片方は情で支える。

ケビンの緊張を解く存在。

そう考えると、翠星石たちはとても重要な存在だ。

ケビンも追い出していないところを見ると、嫌ではないのだろう。

蒼星石が、湯のみを四つ持ってきた。

「はい、どうぞ」

「むっ、ありがとう。...あち」

「ほら二人とも。ここにお茶置いておくから、こぼさないようにね」

「はいですう」

「言われるまでもない。俺は子供じゃねえぞ」

「唐揚げでむきになってるやつが言う台詞じゃねえですう」

「それはお前だろうが！」

「...本当にこぼさないでね」

一通り食べ終わると、蒼星石が片付けに入った。

「ほれ。食後のおやつですよ」

翠星石がスコーンとメイプルシロップを持ってきた。

「おっ、悪いな」

「いえいえですう。因みに、唐揚げをくれなかったひねくれ超人の分はねえです」

「やっぱり、むきになってんのお前じゃねえか！ どんだけ根に持ってたんだ！」

「けっけっけ。そこで指をくわえて、見てるが良いですう！」

翠星石は魔女のように高笑いした。

それに対して、蒼星石がたしなめる。

「ほら翠星石。いじわるしちゃだめだよ」

「あーっ、蒼星石い」

蒼星石は、スコーンを割ってメイプルをかけると、ケビンに渡した。

翠星石はぶつぶつと文句をこぼす。

「...うちの姉はああ言ってるけど、本当はケビンのこと心配してるんだよ。だから、嫌いにならないでね」

ケビンはスコーンを受けとる。

「どこをどう見たんだお前は...。素直じゃないってもんじゃねえぞ」

「ふふっ。双子にしか分からないこともあるんだよ」

蒼星石はケビンにウィンクしてみせた。

それにケビンは、少し頬を掻きながら考える。

それから、スコーンを一口食べた。

翠星石がじっとケビンを見つめる。

ケビンは二口目で食べ終わると、立ち上がった。

「クロエ。練習を再開するぞ」

クロエはパーカーをケビンに渡す。

「次のメニューは、ランニング10kmだ」

「分かった」

「ちょちょい待てですう！感想ぐらい言ったらどうですか！」

「感想？」

「そうですう。『翠星石様のスコーンを頂けて光栄です』とか言えです！」

「蒼星石、唐揚げ旨かったぞ」

「うん？ありがとう、ケビン」

きょとんとした後に、蒼星石は苦笑した。

そのまま、ケビンは外に出ていった。

「きーっ！何ですか！あいつは！」

「まあまあ、翠星石も一緒に唐揚げを作ったじゃないか」

「そういう問題じゃねえです！感謝の一言ぐらい言えですう！」

「ははっ…。ちょっと素直になれなかったね」

「まったく、男のツンデレなんて需要ないですう！帰ってきたら、とっちめてやるです！」

「いや、二人とも…ね」

翠星石の怒りは未だに治まらない。

いつも、ケビンはジム周辺を走っている。

それは、日本に来て幾度となく使ったルートだ。

どこに何があるのかなど、全て把握している。

だからこそ、知っている。ここに悪行超人など出やしない。

しかし、目の前にいる超人は、明らかに自分を狙っていた。

「てめえは...悪行超人か...？」

「くほお...」

「...ふん。返事はねえか。何の目的で俺の前を遮る？ことと次第によっちゃ容赦はしないぜ！」

前を塞ぐ超人は、突如としてケビンに襲い掛かる。

「ぐおおおがああ！！」

「やろうってのか...！良いだろう。再び捻じ伏せてやる！」

ケビンも戦闘態勢に入った。

三時間後。ジムでは蒼星石が不安を感じていた。

「やっぱり遅いよ。あのケビンが、こんなに時間がかかるとは思えない」

「うむ...。では私が見て来よう」

クロエは靴を履くと、扉を開けて走っていった。

「しかし、ケビン達はどうしたんだろうね？」

「う～ん、何か嫌な予感がするですう...」

翠星石が不安そうに顔を落とす。

丁度、ドアが開く。招かざる客が、敷居を跨いだ。

クロエは走った。

元々二人で走っていた道のりだ。ルートはクロエも覚えていた。

そのルートを逆走して探した。

走っていると、路地裏で騒がしい音が聞こえてきた。

ふと、そちらを見やると、悪行超人たちが群れていた。

「むっ。こんな街中にいるとは！」

クロエは正義超人として、直ぐ飛び込んでいった。

クロエが駆けつけると、悪行超人達の中でケビンが闘っているのが分かった。

「ケビン！」

クロエは、並みいる超人達を投げ飛ばし、ケビンのもとに駆けつける。

「大丈夫か！」

「くそっ、気をつけろ。こいつら、何者かに操られてる...！倒しても起き上がってくるぞ！」

「何だと！？」

悪行超人が、クロエに殴りかかる。

かわす。クロエはその腕を掴む。体を捻り、悪行超人を投げ落とした。

頭から落下。首から鈍い音が聞こえた。

だが、敵は首が折れたのも構わず、立ち上がる。

「...なるほど。これは文字通り、骨が折れそうだ」

「冗談言ってる場合じゃねえ。敵が来るぞ」

「よし、ケビン。十分で終わらせるぞ！」

二人は背中合わせで、周囲の敵と対峙した。

異変は、ジムでも起きていた。

「蒼星石！」

「ぐっ、うあっ！」

蒼星石は、巨大な超人に投げ飛ばされる。

「この！やめるです！」

翠星石は大きな蔓を繰り出し、超人に攻撃する。

だが、片手で押さえられてしまう。

「ふん！この程度か？少しは楽しませろ！」

片手を薙ぐ。瞬く間に蔓はちぎれた。

「次は、私の番だ！」

超人は左拳を振り上げる。

翠星石は思わず目を瞑った。

「...待って。そのお姉様は契約をしてないから弱いですわ。まず、蒼薔薇のお姉様からローザミスティカを奪って下さい」

「ああ？」

超人は拳を降ろし、翠星石を見る。

確かに、翠星石にはもう打つ手がなく、ただ怯えていた。

「けっ。使えん...」

超人は踵を返し、蒼星石のもとに向かう。

「僕を...舐めるな！」

蒼星石は、渾身の力を振り絞り、鋏を振るう。

「はっはっはっ。なるほど、お前はまだやるか！」

超人は、蒼星石の奮闘に喜ぶ。

「いくぞ！私の力を受け止めてみろ！」

超人は、胸に掌底を振るう。

直撃。否。蒼星石は鉄で防ぐ。

「うっ！」

鉄ごと、蒼星石は壁際まで吹っ飛ばされた。

「蒼星石！」

翠星石は直ぐに駆けつける。

「...逃げて...。翠星石...」

「嫌です！」

「...今の君じゃ...足手纏いだ...。...ケビンたちを見つけだすんだ...」

蒼星石はゆっくり立ち上がった。

超人が、再び蒼星石に攻撃を開始する。

「...僕が、こいつを足止めする...。その間に...、クロエたちを呼んできて...」

「...でも、蒼星石が...」

「...お願いだ...。それが、一番可能性のあるやり方なんだ...」

「...分かったですう...」

翠星石は落胆した表情で頷いた。

蒼星石は、反撃に転ずる。

力は最大。ミーディアムを気遣う余裕などない。

手を緩めたら、やられる。蒼星石は、肌で脅威を感じていた。

ゆらりと、壁に掛けられた鏡の中に、人形が現れた。

純白のドレスに、右目には薔薇を纏っており、それは純粋な狂気さえも感じさせる。

「雪華綺晶よ。こいつは壊して良いのか？」

「...駄目ですわ、バロン・マクシミリアン。蒼薔薇のお姉様は、私の新しい体になるのですもの」

鏡の奥の雪華綺晶は、僅かに微笑む。

ドレッドヘアを靡かせて、バロンは少し迷った表情を見せる。

バロンの気が鏡に向かっている隙に、蒼星石は天井の蛍光灯を破壊した。

「くっ！なんだ！」

咄嗟に顔を腕で守る。

「今だ！翠星石！」

その時、翠星石の姿はもうなかった。

「むっ。逃げやがったか」

「...大丈夫ですわ。行く場所は知っています。それに契約者は、もう私の手の上...」

ケビンたちは、未だ闘っていた。

殴る。かわし、飛ぶ。追ってきた敵を掴む。そして敵の首、足を捉える。

「はぁ！タワーブリッジ！」

敵を肩に背負い、敵の背骨を弓反りにさせる。  
敵の背骨をへし折る。醜い音を奏で、ゆらりと倒れる。

だが、休む暇もなく次々と敵は現れる。

また殴る。かわす。一体どれほどの時が経ったのか。

クロエをしばらく見ていない気がする。

後ろ。叩きつける音がした。大丈夫、まだいる。

ケビンはやってくる敵を蹴り上げた。  
すぐに横に跳び、もう一人の敵をかわす。

後ろ蹴り。背後に立った敵が倒れた。

まだ敵は現れる。突然、敵は糸が切れたよう倒れだした。

「何だ！？」

ケビンは驚く。クロエが直ぐに駆けよった。

「ケビン。指輪が熱くなっている。もしかしたら、蒼星石たちも襲われているかもしれん」

クロエが指輪を見せた。  
その時、背後からヒールの音が聞こえた。

二人は一斉に振り向く。

そこには、一人の人形が立っていた。

「誰だ!？」

「くす... お初にお目にかかります。私はローゼンメイデン第七ドール、雪華綺晶」

「てめえがこの超人どもを操っていたのか！」

ケビンの怒鳴りに対して、雪華綺晶は僅かに顔を傾ける。

「...? 私が操ったのは、あなたたちの心ですわ」

突如として世界が崩れる。

「...ここは私のお庭。あなた達はここで私に飼われ続ける。ゲームの終わりまで...ね」

世界は崩壊し、周りは黒一色の空間となる。

「くっ! いつの間に幻覚をかけられた!？」

「くすくす。あなた達は、いつ起きられました？」

「...! ...なるほど、今日そのものが幻覚か...」

クロエが、絶望に似た様子で舌打ちをする。

「なにが目的だ！」

「私たちの目的はただ一つ。ローザミスティカを集めて、アリスになることですわ。あなた達はそれに巻き込まれた。ただ、それだけ」

「ふんっ。なら、お前を倒して、ここから出れば良いわけか...！」

「それは無理です。ここは、私の舞台。あなた達はその中の役者。私には逆らえませんわ」

闇の中から茨が現れ、二人に巻きつく。

「ぐっ！離せ！」

「...無駄ですわ」

「ふん、こんなもの...！はあああ！！メイルストロームパワー！！」

ケビンの体が黄金に輝き、茨が少しずつ切れていく。

「言ったでしょう...。ここは私の舞台。その力は、私のもの」

茨がケビンの力を吸い出す。ケビンの抵抗は徐々に弱まり、体は輝きを失った。

「くすくす...。これは凄い力ですわ。体が熱くなる...」

雪華綺晶は体のエネルギーを確かめて、笑った。

「...人の力を勝手に奪うんじゃねえ...」

「大丈夫ですわ。もうそのような片手間はしませんもの。あなた達は、ここでお休みください」

雪華綺晶は踵を返し、闇の中に消えていった。

「...くそっ、打つ手はねえのか」

「ここは、あの二人に任すしかないな...」

クロエは諦めに似た表情で、そう言った。

翠星石は、 $n$ のフィールドにいた。

昨日から家に帰ってこないクロエたちを探して、蒼星石とジムに行ったのだが、そこにはいなかった。

故に、もしかしたら $n$ のフィールドに囚われているのではと思ったのだが、 $n$ のフィールドは広い。

このnのフィールドから二人を探し出すのは、砂漠から一握の砂を見つける程難しい。

翠星石は、絶望した表情で立ち止まってしまう。

「うう...。どうしたら良いです...。...もしかしたら、ケビン達は既にあのドールに...。...どこにいるですか...ケビン...」

翠星石は思わずしゃがみこんでしまった。  
塞ぎこんでいると、珍しい客がやってきた。

「これはこれは。迷いし役者よ、次の台本が見つかりませんか？」

突然、タキシードを着たうさぎが現れた。

「！？ラプラスの魔！」

翠星石はすぐに飛びのく。ラプラスはやれやれとため息を吐く。

「これは手厳しい歓迎ですな。しかし、オブザーバーとしての職務を損なった私には、妥当な仕打ちかもしれません」

うさぎは少し眉を顰めた。

「...どういうことですか？」

「あなたは、この世界が今までの世界とは異なることに、不思議だと感じませんでしたか？」

うさぎの問いに、翠星石は少し顔を傾ける。

「...確かに、ちょっとはおかしいと思ったですけど、無限にある世界の一つに来ただけじゃないんですか？」

「ええ。世界樹はあらゆる枝葉を持ち、ここはその一つ。ただし、本来の幹からは大きく外れた、根の世界とでも表しましょうか」

「根の...世界？」

「本来、世界は多くの選択肢に満ちております。電子の確率から、決断の有無も含めて、選択肢の数だけ世界がある。ですが、幹から離れていった世界は、徐々に細くなり、最後は潰えてしまう」

うさぎはおどけたような仕草をした。それは何とも怪しげで、翠星石は体を横に向けた。

「しかし、世界の創世時に別れた世界ならばどうか。根底に根ざされた別の世界は、途切れることなく枝葉を伸ばし、舞台は展開される」

「...！ もしかして、超人の誕生が、その違った世界を生み出したのですか！？」

「ご名答。進化の過程に生まれた選択肢は、自我の自己同一性に決定的な相違を作り、その歪みは、世界を分かつに至った。そして二つの世界は交わることなく、記憶と夢の輪廻を伸ばし続けた」

「だが、その世界を結うものが現れた」

「...第七ドール...」

「そう。彼女は、実体のないアストラル体。その彼女がアリスゲームに参加するには、現実世界に協力者が必須。ドールと渡り合え、自分の力を供給できる大器が」

「それで、この世界を選んだんですか...。でもおかしいです。お前の話を信じるなら、私たちは、この世界とは接点を持ってない筈です」

「真に心苦しいですが、そこが私の失態の場所であり、第七ドールの策謀の始まりです」

「？」

「一度、こちらの世界の一つが消失した時、向こうの世界とこちらの世界が繋がった時があります。それは数瞬でありましたが、彼女はそれを見ていました。そして、繋げ方をも知ってしまいました」

「世界の消滅...？」

「先ほど、別の選択をした世界が、いずれは潰えると話しました。その消滅の時、幹に近い世界の質量が極限に圧縮される時、ひと時ですが、 $n$ の存在を曲げ、違う時空と繋がる時があるのです。それを彼女は利用し、わざと世界を崩壊させ、この私をもまとめて、こちらに吹き飛ばしたということです」

「うう...ちょっと頭がこんがらがってきたきたですう...」

「では、手短かに言いましょう。招かざる存在である私たちは、この世界にとって非常にイレギュラーな存在なのです。故に今、この世界では拒絶反応を起しています。今後一週間もしないうちに、異物を吐き出す作業に移るでしょう」

「えっ!？」

「私の役目は、アリスゲームを完遂させること。故に、皆様をこの世界から脱出させます」

うさぎが指を鳴らすと、渦が現れた。

「さあ、ここから潜り、脱出してください」

「ちょ、ちょっと待つですう!ケビンたちは、どうなったですか!？それに、蒼星石をまだ助けてないですう!」

「蒼星石の契約者達は第七ドールに囚われ、恐らく現実世界に戻って来れないでしょう。蒼星石は、生存していたなら回収しましょう。敗北の場合は、アリスゲームの敗者として処理致します」

その言葉に、翠星石は強く反発した。

「なら...、翠星石はここに残るです!ケビン達を助けて、蒼星石を救い出すです!」

「分からないお方だ。あなたがここに残ってもデメリットしかないでしょう。愚見ですが、契約者のいないあなたが、一人で闘ったところで戦局が変わるとは思いませんな。妹を大切になさるのも結構ですが、アリスゲームを戦い続けるには、ここを脱け出さなければならぬ」

うさぎは翠星石をたしなめる。

その言葉に、翠星石は少し戸惑う。

うさぎの言ってることは寸分の違いなく正しい。だが、自分にも譲れないものがある。翠星石は顔を上げた。

「それでも、闘うです!妹も、クロエもケビンも、翠星石には大切な存在です!僅かな希望があるなら、それにすぎるです!翠星石の運命は、おめえに決められるものじゃないです!」

翠星石は大きく啖呵を切った。

うさぎはしばしの間黙る。無表情な顔からでは、蔑んでいるのか、考えているのか分からない。

「...ふむ。どうやらドール達は、この世界で何らかの干渉を受けたようだ...。良いでしょう。道化の手は藁よりもか細い。切れる前に手を取りなさい」

うさぎは、新たに渦を作った。

「あなたの想い人はこの先にいる。気持ちが変わらないのなら、飛び込みなさい。そして、あなたの運命を掴み返せばいい」

うさぎはまるで興を失ったかのように、翠星石を一瞥する。

「この先にケビンが...。待っててるですよ蒼星石！お姉ちゃんが今、二人を連れて助けに行くですよ！」

翠星石は渦に飛び込んでいった。

力を失い、一体どれ程の時をこの闇の中で過ごしたか。

最初は、精神を維持するためにケビンと声をかけあっていた。

だが、悠久とも言える時の中で、そのやる気さえも失せていた。

闇、闇、闇。心も溶け込みそうだ。

今や指輪が熱いのかさえ判別がつかない。

クロエがそっと眼を閉ざす。閉じた瞳が、淡い光を感じとった。

「...なんだ...？」

クロエが眼を開ける。眼前には久しく光が見え、その光は、やがて人形を生み出した。

「二人とも無事ですか！？」

「翠星石！来てくれたのか！」

「遅えぞ...人形...」

ケビンは相変わらず毒づく。

「なんだと～です！折角、眉目麗しい翠星石が助けに来たというのに！」

「...まあまあ。それより、蒼星石はどうしてるんだ...？指輪がかなり熱くなっていたが...」

「そうです！今、蒼星石はでっかい超人と闘ってて、すぐに救出にいかなきゃいけないんです！」

「なんだと...！？それではすぐに向かおう！」

「翠星石、すぐにこの蔦を切れ。俺が倒しに行く！」

「分かったです」

翠星石は如雨露を用いていくつも蔓を出す。  
それを纏めて槍のようにすると、ケビンに巻きついている蔦を刺した。  
だが、蔦は硬く、弾き返されてしまった。

「なっ！硬いですう...」

翠星石は何度か試すも、ことごとく跳ね返される。

「じれったい...。もっと強化できないのか？」

「うるせーですう！これがフルパワーです！」

「...ふう。...翠星石、契約したら俺の力が使えるんだな？」

「そうですけど...」

「なら契約だ。俺の力を外部から使えば、これは切れるはずだ」

「えっ！？け、契約ですか！？...しょ、しょうがないですねえ...」

「ほら、早くしろ」

翠星石はケビンのマスクをずらし、口付けを指輪にかわす。

「おお、力が漲ってくるですう」

「翠星石。この蔦は力を吸い取るから、一瞬で決める必要がある。ケビンと息を合わせて、まとめて薙いでくれ」

「分かったですう！ほら、ケビン。いくですよ」

「言われなくても分かってる。いくぞ！メイルストロームパワー！！」

ケビンの体が黄金色に輝く。

「おお、すごい...熱い力ですう...。これならいけるです！スイドリーム！！」

如雨露から巨大な刃を模った蔓が現れた。

翠星石がそれを薙ぐ。二人に巻きついていた蔦は、細切れとなった。

「よし。すぐに蒼星石を助けにいくぞ！」

クロエは指輪を見つめる。

指輪は、すでにかかなりの熱を持っていた。

「おー！ですう。今の翠星石なら何でも出来そうな気がするです！」

翠星石も拳を上げて賛同する。

「ふん。とっとと行くぞ！蒼星石がいつまでも持つとは思えん」

三人は、光の渦に向かおうとした。

しかし、突如として現れた茨に、翠星石が捕まった。

「まさか...！」

「ふふ。お暇には早いですわ。もう少しいらしても構いませんのに」

雪華綺晶が闇の奥から姿を現した。

「手厚くもてなされて悪いが、急用を思い出してしまった。帰らせてくれないか？」

「...ふふ」

雪華綺晶は、茨を引っ張り、翠星石を手元に引き寄せる。

その顔に手をやり、翠星石の眼を見つめた。

「お姉さまは、もうお帰りになさるのですか...？」

雪華綺晶の眼を見た翠星石は、途端に意識を失う。

「翠星石！」

ケビンが咄嗟に指輪に力を込める。

翠星石はすぐに眼を覚ました。

「...っ！」

「今だ！ベアークロー！」

クロエが手の甲から四本の針を取り出し、それで茨を断ち切った。

翠星石がすぐに脱出する。

「三人と一人じゃ、分が悪いんじゃないか？」

「そうですわね。でも、あなたの体力ももう限界なのではなくて？」

「何だと!？」

「くすくす。膝が笑ってますわよ。いかに超人といえども、ずっと力を吸われていては、体力が持つはずありませんわ。これでは、満身に蒼薔薇のお姉さまも闘えませんか」

「...くっ!...まさか...！」

「うふふ。お姉さまのピンチですわね」

「くそっ！」

突然、クロエが膝から崩れた。

「!？」

「クロエ! 翠星石! ここは逃げるぞ! 分が悪すぎる。それに蒼星石が心配だ！」

「...分かった！」

「くすくす、逃がしませんわ」

幾多の茨が行く手を塞ぐ。

「こんなもの! 翠星石! いくぞ！」

「がってんです! スイドリーム！」

巨大な蔓が、全ての茨に絡みつき、阻止した。

「今だ！」

クロエは懸命に力を入れて、扉まで飛び上がる。  
それにケビン、翠星石が続いた。

「くすくす。逃げられてしまいましたね。でも、向こうの世界には、私のお人形がいますわ。

強い...操り人形が...」

雪華綺晶は不気味に笑うと、姿を消した。

クロエは、崩れるように鏡から抜け出した。

最早立つことすら儘っていない。

「クロエ！」

ケビンが抱き起す。その時、近くの壁が粉々に砕けた。

翠星石とケビンはすぐに振り向く。

そこには、満身創痍となった蒼星石が横たわっていた。

「蒼星石！」

翠星石がすぐに蒼星石のもとに向かう。

「...ふふっ。...ぎりぎり...間に合ったかな...」

蒼星石はぐったりと倒れた。

「蒼星石！」

翠星石の必死の叫びにも応えない。

その翠星石の背後に、巨大な影が現れる。

影が腕を振り下ろす。その刹那、ケビンが防ぎに飛び込んだ。

「...おい。女に手を出すなんざ、お前も落ちたな...バロン！」

「おや、これは久しいな。ケビンマスク！」

ケビンとバロンは、互いに両手を組み合い、力比べに入る。

「...変だな。俺の記憶じゃ、お前はもっと大きかったはずだが...」

「ふっ。お前らなど、この姿で余裕だということだ！」

バロンが力で勝り、ケビンを腕ごと持ち上げた。

「くらえ！」

ケビンを抱きかかえ、バロンが飛び上がろうとする。

だが、その足を蔓が捕まえた。

「いかせねえですよ！」

「くっ！この人形があ...！」

「ナイスだ、翠星石！」

ケビンはバロンのキャッチから脱する。

そしてバロンの肩に乗り、首を足で締めつける。

「砕けな！ストームエルポー！」

バロンの頭上から、嵐のように肘打ちをくらわす。  
脳が揺さぶられ、バロンの視界が霞みだした。

「...翠星石！バロンをさらに上に持っていくんだ！」

「了解ですう！」

クロエの言葉に翠星石は頷く。

翠星石は更に蔓を伸ばし、二人を天高く運んだ。

頂上で蔓が離されると、ケ빈は足を締めたまま、逆さまに落下する。

「ロビンスペシャル！」

ケ빈は両腕で着地する。それと同時に、バロンの首は極限に締め上げられた。

「ぐはあっ！」

バロンはすぐに脱出する。

間合いを取るが、今度は蔓が槍の如く飛んで来た。

掴む。強い。ケ빈の力が、翠星石を後押しする。  
バロンが少しずつ押されだした。

「...仕方ありませんわね...。手助けを致しましょう...」

鏡に雪華綺晶が現れた。胸に手をかざすと、バロンを白い瘴気が包み込んだ。

「これは...！感謝するぞ！」

突然、バロンは力を強め、蔓を押し返しだした。

「うっ…。強いですう…！」

すかさず、ケビンがバロンに蹴りを入れる。

だが、持っていた蔓で防ぐ。蹴る。逆にケビンは、遠くに蹴り飛ばされてしまった。

「何ということだ…！雪華綺晶といったか…。いずこにそんな力を隠していた？」

クロエは地面に伏しながらも鏡を見る。

「ふっ。何てことはありませんわ。ただ、ジャンクにした超人たちの力を集約させ、与えているに過ぎません」

「まさか…最近の超人失踪事件は、全てお前の仕業か！？」

「くすくす。ご想像にお任せしますわ。それよりもほら、お姉様のピンチですわよ？」

雪華綺晶は小ばかにするように笑った。

クロエがバロンを見ると、バロンが蔓を持ち、翠星石を投げ飛ばそうとしていた。

「いかん！ケビン、急いでカットに入れ！」

クロエが声を上げるも、ケビンは遠くに飛ばされ、間に合わない。

「うおおらあ！」

「きゃあっ！」

バロンは力づくで、翠星石を蔓ごと投げ飛ばした。

遅まきに追いつき、ケビンは後ろからバロンを捉える。

「そらあ！」

ケビンは後方に投げようとするも、バロンは空中で腕を無理矢理解いた。

「ふんっ！甘い！」

バロンはケビンを逆さまに抱え、再びジャンプする。

「次は助ける人形はいねえな。エメラルドフレンジョン！」

ケビンを頭から地面に叩きつけた。

「ぐはあっ！」

バロンはドレッドヘアーをなびかせ、高らかに笑う。

「くはははっ。惨めだな、ケビンよ」

「...ふんっ...。...たかが一回...技を繰り出しただけでいい気になるなよ...！」

「口の減らない奴だ。ならば、次でとどめをさしてやる！」

バロンはケビンの頭を捕まえ、タワーブリッジの体勢に入った。

「ぐあっ...！なに猿真似してんだ...！」

「お前の古ぼけた技と一緒にするな。これは、私の最強にして最大の大技だ！」

バロンはケビンを抱えたまま、天高く跳んだ。

そして体を竜巻のように回転させ、さらに上昇する。

遙か天高くまで舞い上がると、ケビンの頭を下に向け、落下した。

「バロントルネードボム！！」

圧倒的な速さで地面に吸い込まれていく。ケビンは圧力で体を動かすことが出来ない。

「ケビン！指輪に力を入めるです！」

翠星石が如雨露を構えた。

「うおお！メイルストロームパワー！」

ケビンが力を指輪に集中させる。

翠星石の如雨露が輝きだし、巨大な蔓を生み出した。

「いけえです！」

蔓は二人を受け止めに掛かる。

「無駄だぁ！蔓ごと破壊してくれる！」

バロンの勢いは止まらず、受け止めようとした蔓はどんどん裂けていく。

「うおおおお」

ケビンは指輪に力を入れ続ける。

「うっ...！負けないです...！」

翠星石も力を入める。

バロンのトルネードボムは徐々に勢いを失う。

「な、何だと...！」

バロンの勢いは失せ、地面にゆっくりと着地してしまった。

「バロントルネードボム、破れたりですう！」

「よくやったぞ翠星石。ケビン！タクティクス№THE ENDだ！」

クロエの命令に応えるかのように、ケビンはバロンの腕から脱出する。

「いくぞ。これで終わらせてくれる！」

ケビンは背中合わせになり、後ろ手にバロンの腕を奪う。  
そして足を大腿部にかけて、腕を締め上げる。

「OLAP！（オラップ）」

「ぐぎゃあああ！」

バロンの腕から、捻じ切れるような音が聞こえる。

「ぐがぁあ...！おい人形！もう一度私を助けて...！」

バロンは鏡に向かって叫ぶ。

「くすくす。仕方ありませんわね。もう一度、強化してあげましょう。...ただし、あなたにはもう用はありませんわね」

「なに！？」

雪華綺晶がそっと手をかざす。

その瞬間、バロンの首は力なく下がった。

「くすくす...。次は私がお相手しましょう」

バロンの体は、再び瘴気に包まれた。

すると、バロンの体が大きく変化しだす。

その変体に、ケ빈は技の解除を余儀なくされた。

バロンの体が変わってゆく。髪がドレッドから銀髪に、黒かった体は赤く、その2mはあった体躯は、更に筋肉が付き3m近くまで大きくなった。

「くすくす...。超人100人分の力を授けましたわ。さあ、仕切り直しとしましょう」

雪華綺晶は不気味に笑う。

「まずは、腕試しからですわ」

雪華綺晶が指を動かす。

すると、バロンの体も動いた。

バロンはその巨体から、ケ빈に拳を振り下ろす。

避ける。避けられない。

「くっ」

ケ빈は腕でガードする。だが、バロンはものともせず、ケ빈を壁まで吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

「ケ빈！」

翠星石が、蔓をクッション代わりに使う。だが勢いは止まらず、蔓ごと壁を破壊した。

「なっ、威力が段違いですう...！」

「くすくす。追撃をなさい」

バロンは外に飛び出したケビンのもとに駆けた。

「くっ、行かせないですよ...！」

翠星石は蔓を絡ませ、バロンを防ごうとする。

だが、バロンの力には敵わず、引きづられてしまう。

「邪魔なお姉様...。まずは、お姉様から壊して差し上げましょう」

バロンは、翠星石に標的を変えた。

翠星石は、絶望的と知りながらも構える。

バロンが殴りかかる。それを蔓で防ぐ。否、防げない。

翠星石は吹き飛ばされる。

バロンは休む暇を与えず、追いかける。

翠星石は立ち上がる。

「やめろ！！」

ケビンは体を輝かせ、翠星石に力を送る。

膨大な力を感じた翠星石は、受け取りを拒否した。

「なっ！？」

バロンの拳が、翠星石の体を捉える。翠星石は吹き飛び、壁にめり込んだ。

ケビンがすぐに駆けつけ、抱き寄せる。

「てめえ！なぜ俺の力を拒否した！」

「...へん。おめえの力は...翠星石の為じゃなく...あいつをぶっ飛ばすのに使えです...」

「ふざけんじゃねえ！お前ぼろぼろじゃねえか！」

「...あいつを倒せるのは...お前しかいないんですよ...。私は...ケビン信じてるです...。そのためなら...体の一つぐらい...どうってこと...ない...です...」

翠星石はそこで意識を失う。

ケビンは翠星石をそっと横たえる。

「ふふ。これで、一騎打ちですわね」

背後から、ケビンに殴りかかった。

振り向き、その腕を両手で止める。

「...背負うもんが出来た...。...もう、負けるわけにはいかねえ...！」

ケビンは、その眼に炎を灯した。

「うふふ。では、超人らしく、リングの上で闘いましょうか」

バロンはリングに上がった。

ケビンも続く。

ケビンが上がった瞬間、バロンは動いた。

バロンの蹴り。回避。反撃する。

ケビンはその脛にローキックを放つ。

痛みに反応せず、バロンはケビンに掴みかかる。

掴む腕を持ち、力の流れを変える。バロンは、ケビンに巻きつくように投げられる。倒す。

雪華綺晶は指を複雑に動かし、バロンをすぐに立ち上がらせる。

バロンの体勢が立ち直る前に、ケビンは殴りかかる。

人中、鳩尾、頸部、横腹。ケビンはラッシュをやめない。

バロンも殴る。二人の足の距離、僅か一インチ。

ケビンは引かない。逃げない。バロンを押すことに全力をかける。

圧倒的な力の差を前に、ケビンは真っ向から闘った。

何度、俺は殴られたか。身体中が、悲鳴を上げている。

だが、例えこの身が朽ち果てようとも、打つ。打ち勝つ。

俺の使命、いや、俺の想いがそれを望んでいる。

「うおおおお！！」

ケビンの体は黄金に輝きだした。バロンを押す。押していく。

「...なぜです...？バロンには、百人分の力を授けましてよ...？」

「ふっ。鏡から出たことのないお前には分かるまい。バロンの痛みが、傷が！ ケビンは、感情に任せて打ってなどいない。急所を狙い、バロンの体を確実に破壊しているのだ。いかに百人分の力を得ようとも、体がそれを出しきれていない！」

「くっ！傷なんて...操り人形には関係ありませんわ！ バロン、敵を掴み上げなさい」

バロンは打つのを止め、ケビンに掴みかかる。

ケビンはしゃがんで避け、そのままローキックを繰り出した。

遂に、バロンの巨体が片膝をつく。

「くっ。立ち上がりなさい！ケビンもぼろぼろですわ。あと少しで...！」

「無理だ。絶対にケビンは、バロンより先に倒れなどしない！ 想いが、ケビンを立たせる！  
覚悟が、ケビンを勝利に導く...！」

「世迷いごとを...。バロン、必殺技で一気に片をつけますわ」

バロンは無理矢理立ち上がる。

ケビンも立ち上がり、両手で掴みを防ぐ。

バロンと組み合い、そのまま力比べの体勢になる。

「ふふ。バロンと力比べなど、愚の極みですわね」

「どうかな？」

バロンが押す。ケビンの足が後退る。

だが、ケビンの輝きは、消えない。ケビンの想いは、揺らがない。

「ケビン！想いの丈をぶつけてやれ！掴み取れ！その勝利を！」

バロンの力が弱まり、ケビンの足が止まる。

「はあああ！」

ケビンが押し返す。その輝きは今、頂点に達した。

「そ、そんな…。嘘ですわ…」

バロンの体が、どんどん退がっていく。

ケ빈は止まらない。ケ빈の力が、遂にバロンを勝った。

ケ빈は、バロンの腕を左右に引っ張り、振り上げた。

腕から悲鳴が上がる。

「…ビッグベンの鐘に、耳を傾けな…！」

ケ빈は、更に腕を振じる。

振り上げた反動で、バロンの体が天高く飛び上がった。

ケ빈も飛び上がり、バロンを逆さまにキャッチした。

ケ빈は片腕で腕をロックし、足で胸を締め上げ、敵の片足をもう一つの腕でロックした。

「ビッグベン！ エッジ！！」

ケ빈は、もの凄い速さで降下した。

「くっ。脱出を！」

雪華綺晶は足掻く。だが、技は完全に決まっていた。

急降下。ケ빈は、バロンを脳天から叩き落した。

キャンパスが大きく歪む。その歪みが、衝撃の激しさを物語る。

闘いが、終わった。ケ빈がバロンを離すと、その体は崩れ落ち、体格は以前の大きさに戻っていった。

「ケ빈の、勝ちだ」

「.....驚きましたわ。まさか、ミーディウムがここまでの力を発揮するなんて。.....これは、ローザミスティカより素晴らしいかも知れませんね...」

「...お前は、まだ闘うのか...？」

「...いえ。手駒がなくなってしまいましたわ。私はここで、手仕舞いと致します。良い発見も出来ましたしね...」

雪華綺晶は踵を返すと、鏡の奥へと消えていった。

しばしの静寂が流れる。

だがそれも束の間。入れ替わるかのように、タキシードを着たうさぎが、宙に現れた。

「...久方ぶり、といったところでしょうか。翠星石のミーディウム」

「お前は！？」

ケビンが、驚愕の表情をする。

「知っているのか！？ケビン」

「ああ、夢の中じゃ世話になったな」

「礼には及びません。他世界干渉を抑える為の措置に過ぎませんので」

うさぎはシルクハットを取り、軽く会釈をする。

「それで、何のようだ？」

「ドール達の回収に参りました。この世界でのアリスゲームはあってはならないこと。まして、この損傷では闘うのも儘ならないでしょう」

「待ってくれ。蒼星石たちは、もう行ってしまうのか？」

クロエが慌てて尋ねる。

「ええ。何かご不満でも？」

「...せめて、最後に話させてもらえないか？礼が言いたい」

「真に残念ですが、目覚めるのは数十年先となります。私が、ことづてを預かりましょう」

うさぎは、にべもなくそう告げた。

「...分かった。では、ケビンの心を開いてくれてありがとう。...そして、楽しいひと時を与えてくれて、ありがとう...。そう、伝えてくれ」

「分かりました。翠星石のミーディアムは、何かありますか？」

「ふん.....。勝った。そして、俺は必ず勝つ。...そう伝えろ」

「かしこまりました。儂き灯火の、影の重なるまたの逢瀬にお会いいたしましょう」

うさぎは二つの人形を抱き上げると、渦の中に消えた。

ケビンとクロエは、それを静かに見送った。  
その顔に、悲壮感はない。

数日後。ロンドン、トラファルガー広場。

ケビンの父、ロビンは、噴水の前で待っていた。

十一月に入ろうというロンドンは、既に冬に入っている。  
太陽をあざ笑うかのように、冷たい風が吹き荒れる。  
ロビンは、コートポケットに手を突っ込み、今かと息子を待つ。

久しぶりの再会である。もう十年会っていない。

私は、怒鳴られるのだろうか。それとも、ケ빈はもう水に流してくれたのだろうか。

不安と期待が混じり合う。だけど不安が少し勝り、怖くなる。

歴戦の私も、息子には形無しか…。自分で毒づいてみせても、不安は拭えない。

不意に足音が聞こえた。

振り返る。背後に、長身の男が立っていた。

男はフードを被っており、顔が良く見えない。だが、それは確かに、成長した我が子だった。

言葉が出ない。不安や期待は吹き飛び、ただ、息子の成長に感慨する自分がいた。

「ダディ…」

ケ빈が、私を呼ぶ。随分と聞いてない言葉だ。ただ、胸に染み込む。

「…ケ빈。…大きくなったな…」

それしか出なかった。昨日考えた謝罪の言葉も、父の威厳を保つ言い回しも、全て吹き飛んだ。

「ふっ…。あれから何年経ったと思ってんだ…。俺はもう十八だ」

「…そうだったな…。あれから…」

ロビンの胸が縮む。あれという言葉は、軽蔑を込めて使ったのだろうか。思わず、顔が下がった。

「ダディ。これを…」

ケ빈は、一枚の白い封筒を渡した。

ロビンは、ゆっくりとそれを受け取る。

「…決勝のチケットが入っている。…暇があれば、見に来ればいい」

そう言うと、ケ빈は踵を返してしまう。

「...待ってくれ！」

思わず声を上げる。ここで言わなければ、ずっと有耶無耶のままだ。

ケビンが振り返る。

「ケビン！すまなかった！自分の意地をお前に押し付けてしまった！お前に、酷いことをしてしまった！...本当に、すまなかった...」

ロビンは、大きく頭を下げた。

ケビンは、黙ってそれを見ている。  
そっと、ロビンの肩に手を添えた。

ロビンが顔を上げる。

「ダディ...。歯を...食いしばっておけ...」

ケビンは、思い切りロビンの顔を殴った。  
フードが取れ、顔が鮮明に見える。

倒れそうになったロビンは、やっとのところで、転ぶのを耐えた。

「これで、おあいこだ」

ケビンが、少し笑ったような気がした。  
少し、気持ちが楽になった気がする。

改めてケビンの顔を見ると、そのマスクが古ぼけているのに気づいた。

「...ケビン。そのマスクは...まさか...」

あの額の傷は、忘れもしない。

「ふん。勘違いをするな。俺は、このマスクの雪辱を晴らす。ただ...それだけだ」

ケビンは踵を返すと、振り返りもせず去っていく。

その背中が、何とも頼もしく感じた。

「ケビン！必ず、見に行く！私は、お前を応援しているぞ！」

ケビンは、黙って親指を立てた。

かっこつけたがりも、親父譲りか…。なんとも微笑ましく感じてしまう。

その背中が見えなくなるまで、ロビンは見送った。

封筒をポケットに入れ、ロビンも家路につく。

今日のコーヒーは、甘くなりそうだ。

そう、ロビンは思った。

## プロフィール-ロビンマスク

---

名前: ロビンマスク

出身: イギリス・ロンドン

身長体重: 217cm 155kg

超人強度: 96万パワー

年齢: 65歳

家族: 妻 アリサ・マッキントッシュ、息子 ケビンマスク

趣味: ラグビー、ゴルフ、チェス

必殺技: タワーブリッジ、逆タワーブリッジ、チームズリバーストーム、ロビンスペシャル、オラップ(実戦では未使用)

「起きるかしら、万太郎～」

相変わらず、金糸雀はフライパンを叩いて起こす。

万太郎は騒音に驚き、飛び上がって金糸雀を制した。  
既にキッドは、耳を塞いで二度寝の体勢に入っている。

「待った待った...!頭がガンガンするから、それは止めてくれえ...」

「もう、うるせえかしら。未成年の癖に飲酒なんかしちゃって!」

「超人は内臓の発達が早いから、規定年齢が低いんだよ...」

「知らないかしら。大会まで残り少ないのに体調管理がなってないかしら!」

「ううむ...面目ない...」

万太郎も、金糸雀に頭が上がりなくなってきたようだ。  
そんな中、真紅が扉を開けて入ってきた。

「あら、おはよう、万太郎。良く寝れた?」

「まあ...ね。目覚めは最悪だけど...」

万太郎が恐る恐る金糸雀を一瞥する。

金糸雀は、まだ頬を膨らませていた。

「ほら。やっぱり私が、目覚めのキスで起こせば良かったじゃない」

「そんなわけないかしら...! ほら、万太郎。朝食を食べるかしら!」

「うげ...。まさかまたあの朝食を食べるのか...!」

「大丈夫よ万太郎。卵料理は私が阻止したのだから。私の監修で料理を作らせたわ」

「よくやった～真紅～」

「ふふ、もっと褒めるのだわ」

「...もう、卵の美味しさを知らない人はこれだから...」

万太郎が喜び勇んで食卓に着くと、そこにはほうれん草のソテー、サラダ、卵雑炊、牛乳と、アスリート顔負けの栄養管理食が置かれていた。

「ま、カナのレパトリーは卵だけじゃないかしら」

「何を言ってるの。栄養管理のイロハも分からなかったのに」

「なにを～かしら。真紅だって後ろから指示するだけじゃない」

「ま、まあ、二人ともどうもありがとう」

万太郎は、面倒になる前に割って入る。

「それじゃあ頂きます」

「召し上がれかしら～」

万太郎は、ソテーを口に運ぶ。

「おお、美味しい！」

「ふふ、当然かしら。カナだって頑張ってるかしら」

金糸雀は、ちょっと自慢げに言う。みる。

一応、朝食はつつがなく終えた。

そしてキッドが起き上がった頃には、万太郎はストレッチを終えて練習を始めていた。

「おう万太郎、おはよう」

「十時は『 こんにちは』だ、バカヤロー」

「ははっ、細かいことは気にするな。大事なのは挨拶を交わすってことだ」

「その大事なことに、早起きも入れておけよ！」

万太郎はサンドバックに連続で三回、蹴りを入れた。

サンドバックは勢いに任せて左右に大きく揺れた。

「ひゅー、良い蹴りだな」

「なっはっは。僕を舐めちゃいけないよ」

「こら、気を抜くんじゃないかしら!」

万太郎がキッドの方をむいて照れていると、すかさず金糸雀が注意した。

「うう...へいへい、分かりましたよ〜」

「金糸雀も、だいぶミートが板についてきたんじゃないか？」

「それは褒められてるのかしら...？」

「うるさいとも似てきて、ホントに困るよ...」

万太郎がやれやれといった表情をする。

万太郎のトレーニングを見ながら、金糸雀は困ったというように唸っていた。

「う～ん...」

それに気づいたキッドが、声をかける。

「どうしたんだ？」

「やっぱり、練習相手が欲しいかしら。いくら万太郎が技を覚えても、それを試せる相手がいないければ、意味がないかしら。それに、実戦で経験を積んだ方が、トレーニングの百倍は効果があるかしら」

「そんなことか。じゃあ俺がスパーリングの相手になるぜ」

「う～ん、キッドじゃ駄目かしら」

「何でだ？」

「出来れば、万太郎にとって未知の相手が望ましいかしら。ケ빈は恐らく、大会でまだ見せてない技をいくつか持ってるはず...。だから、未知に対応できる術を身につけて欲しいかしら」

「うーん、確かに俺らは、互いに技を知り尽くしてるからなあ。でもそうになると、だいぶ相手は絞られてくるぜ。万太郎が殆ど知らなくて、かなり強い超人...」

---

その時、二人の背後から大柄な男がやってきた。

「...私が、やろうか？」

二人は直ぐに振り返る。

そこには、マントを翻し、迷彩服を着た超人が立っていた。

「あ、あなたは...！」

「？どちらさまかしら？」

「これは失敬した。二人とも初めましてだな。私はキン肉アタル。またの名をキン肉マンソルジャー。キン肉マンの兄で、今は超人特別機動警察隊(アンタッチャブル)の隊長をやっている」

「ひえ～、なんか凄そうな肩書きかしら～」

「凄そうじゃんくて凄いんだよ。こちらこそ初めまして。俺はテリーザキッド。今は日本の防衛を任されています」

「おお、テリーの倅か。大きくなったな」

ソルジャーは小さく微笑んだ。

「カナはローゼンメイデンの第二ドール、金糸雀かしら。今は訳あって、万太郎のコーチをしているかしら」

金糸雀は元気満々といった調子で、笑顔で答えた。

「ほう、女の子がコーチとは。万太郎も面白いことをしているな」

「この子は、こう見えて意外とミートの資質があるんですよ。小うるさいところとか」

「なっ！キッドまで言うかしら～！」

「ははっ、これは頼もしい限りだな」

「それで、アタルさんはどうして遥々日本へ？」

「なに、私の甥が決勝まで進んだというのでな。今日、弟のスグルと一緒に見に来た所存だ。早く着いてしまって手持ち無沙汰でな。スパーリングの相手ならしてやれるぞ」

「へえ～、頼もしいかしら。でも、伯父さんは強いのかしら？」

「さっきも言っただろ。この人は精鋭超人が集まる機動警察のトップなんだぜ。その強靱な肉体と、老練なテクニックで、数多の悪行超人を捕まえてきたんだ」

「ほえ～、それは凄いかしら。早速やって貰いたいかしら」

「おいおい、今日来たばかりだから疲れているだろう」

「いや、私是一向に構わんぞ」

ソルジャーは毅然とした表情でそう言った。

と同時に、万太郎がトレーニングを終えてリングを降りた。

その万太郎に、真紅が健気にタオルとドリンクを渡す。

「あっ、終わったかしら。じゃあ早速万太郎との練習をお願いしたいかしら～」

金糸雀はそう言うと、ソルジャーの腕を取って、リングに向かった。

「万太郎～。練習相手を引き受けてくれる人が見つかったかしら～」

「うん?...って、げえ！お、伯父上！」

「久しいな、万太郎。火事場のクソ力修練以来か？」

「あら、こちらは？」

「初めまして、お嬢さん。私はアタル、もう一つの名はキン肉マンソルジャー。万太郎の伯父だ」

アタルは丁寧に会釈をした。

「あら、紳士な方ね。初めまして。私はローゼンメイデン第五ドール、真紅よ。そちらの金糸雀とは姉妹なのだわ」

アタルは真紅への挨拶を済ますと、再び万太郎の方を向いた。

「ふふふ、では万太郎よ。どれほど強くなったか、見せてもらおうか！」

アタルはマントを脱ぎ捨てると、万太郎を掴んだ。

「へっ、へっ!？」

「そりゃあ！」

アタルはリングの上に万太郎を投げ、自身も跳んでリングインした。

「ちょっと待って！僕は今、休憩の最中なんだよ」

「ふん、万全の状態でリングに上がれると思うな！強い男とは、どんな時であろうともベストを尽くせるやつを指すのだ！」

「んな無茶苦茶なあ。金糸雀～、キッド～」

「頑張るかしら～」

「行ってこい、万太郎！」

「薄情者め～」

「いくぞ！万太郎！」

アタルは老齡を感じさせない素早さで、万太郎に向かった。

「くそっ、やってやらあ～！どんなに強そうでも、父上より年上なんだろ？ってことは六十近いお爺ちゃんじゃないか」

万太郎も構えると、アタルと両手を合わせて組み合った。

「ふおおおお！」

万太郎がアタルを押し返す。

「少しはやるようになったか。...だが、まだ足らん！」

アタルは組み合っている両腕を下に持っていき、万太郎の腕の筋を攻める。

「うっ！」

「まだいくぞ！」

アタルは万太郎を腕ごと抱えると、後方に投げ飛ばした。

「うわっ！」

万太郎は胸からマットに落ち、うつぶせに倒れた。

「反応が遅い！すぐに立ち上がれ！」

アタルは万太郎が起き上がる前に覆いかぶさる。

そして足を固め、万太郎の後方から羽交い絞めをかける。

「あれは、ケビンのSTF(ステップオーバートゥホールドウィズフルネルソン)！」

「う、うぐっ！」

「油断しすぎだ、万太郎！一瞬を大切にしろ！常に頭を働かせろ！」

アタルはそう言うと、技を外した。

「これが戦場であったなら、お前は今、死んでいた。貴様に、後二つ命をくれてやる。二つの灯火が消える前に、私を倒してみろ！」

アタルが万太郎に強い発破をかける。

その言葉が、万太郎の闘志に火を付けた。

万太郎が素早く立ち上がる。

「伝説超人だかなんだか知らないけど、僕を舐めないでよ！潜ってきた修羅場は段違いかもしれない。だけど、僕だって超人オリンピックファイナリストなんだ！ただじゃ、終わらせない！」

「ふん、いっぱしの矜持は持っていたか。ならば、来い！お前のプライドをかけて！」

今度は両者とも動かない。

二人の気と気がぶつかり合う。

万太郎の額から、汗が零れ落ちる。

見えないせめぎ合い。緊張が、万太郎の体力を蝕んでいく。

最初に動いたのは、万太郎だった。

万太郎は、アタルに反撃の隙を与えないほど、左右の拳でラッシュを加える。

だが、アタルは両手で防ぐ。防ぎきる。

しかし、アタルの胴体に隙が生じた。

万太郎は躊躇いも無く、その隙間に右ストレートを放つ。

「あ、駄目よ万太郎！」

金糸雀の叫びも空しく、既に万太郎はモーションに入っている。

「ふん、躊躇なく踏み込んできた度胸は買ってやる！」

アタルは体を左にずらし、上段に構えた左腕で万太郎の腕を叩き払う。

そして、右ストレート。避けられない。  
万太郎は後方に吹っ飛ばされる。

直ぐに体勢を立て直す。  
だが、眼前にはアタル。既に攻撃体勢に入っていた。

万太郎は、咄嗟に腕でガードを作る。  
だが、それはアタルに身体を差し出す行為に他ならない。

「万太郎！常にイニシアチブを握り締めておけ！心が受身に入ったものに、勝利などない！」

アタルが万太郎の肩を掴む。  
掴んだまま、体を後方に反り、ブリッジの体勢に入る。  
そして万太郎を腹部の筋肉を使い、空中に放り出した。

直ぐに、アタルも空中に飛び出す。

「これがキン肉王家の秘宝だ！その体に刻んでおけ！」

アタルは後方から、両足で万太郎の片足と首を決め、両腕を両手でキャッチする。

「マッスルスパーク！！」

万太郎の全身が、極限にまで軋みだす。  
「ぐあっ...！」

「な、なにかしら！？あの全身を隈無く決めている技は！？」

「そういえばパパが言っていたぞ！キン肉族の石碑には、伝説的奥義が記されており、それが三十年前に復活したと...！」

「そんな...！そんなもの、脱出できるわけじゃない...」

脱出は不可。万太郎の五体は、綺麗に締め上げられている。

「これで終わりだ！」

アタルは体勢を変えた。背中合わせになり、両足で足を、両手で腕を決め、万太郎の体をくの字に曲げた。

その体勢でマットに急降下し、万太郎を叩きつけた。

「がはっ...！！」

万太郎は、微動だにしない。

アタルが技を外すと、そのまま崩れ落ちた。

アタルは万太郎を見下ろす。

「...万太郎よ。確かに、お前の闘志には目を瞠るものがある。だが、覚悟が足りない！技から抜け出す気概、相手の先手を取ろうとする策略性、そして何より、一瞬への真剣さが足りない！！ファイトは数十分やる。だから、一々、瞬間に全力を注いでいられないか？」

万太郎は朧げな意識の中、アタルの言葉が脳の奥にしみこんできている。

「ふざけるな！闘争とは、刹那の死闘の重なりだ！闘いは、一瞬で終わることもある。それは、貴様にも理解できるだろう。ならば全力を、その刹那に注げ！真剣な闘志を次に持ち越すな！死ねば、貴様には何も残らんのだ！」

アタルは厳然たる口調で、万太郎に言い放った。

「...お前の命は、あと一つだ。明日、その最後の命を奪いに来る」

アタルはリングから飛び降り、マントを羽織った。

そして金糸雀たちに近づいていく。

金糸雀は思わず後退る。

「...手加減をしてある。万太郎の手当てを頼む。心のケアもな」

そう言うと、アタルは踵を返し、去っていった。

直ぐに、金糸雀が万太郎に駆け寄る。

「万太郎！大丈夫かしら！」

万太郎を抱き起そうとすると、小さな嗚咽を聞こえた。

「...負けた...。...手も足も出なかった...。...僕には...超人たる...資格はないのか...」

「万太郎...」

金糸雀が言葉に詰まっていると、真紅が万太郎の前に立った。

万太郎が顔を上げると、真紅のツインテールが鞭のように当たった。

「見損なったわ、万太郎。あなたの闘志は、一回負けただけで消えてしまうの？そんな吹けば飛ぶようなものだったの？」

「おい真紅...！」

キッドが止めようとするも、真紅はそれを遮る。

真紅は、さっきの口調とはやや変わり、諭すように話した。

「万太郎...立ち上がりなさい。今日はまだ終わってないわ。彼の言っていた、一瞬への覚悟を見せてちょうだい」

真紅はしゃがみ、万太郎を見つめた。

「そうかしら。まだお日様は、てっぺんまで昇ってないかしら！練習する時間はたっぷりあるかしら」

金糸雀も納得したのか、元気良く賛成した。

「ほらほら万太郎。うな垂れてないで練習するかしら。次の目標は、集中力の維持かしら」

「う、うん...」

「おら、女の子に心配かけさせやがって。この罪作りの男め」

キッドが、万太郎の手を引っ張り立たせると、喝だとばかりに背中を叩く。

「いてっ！」

「元気があれば何でもできる！ だろ？」

「キッド...」

「さあ、もたもたしてる時間はないわ。練習再開よ」

真紅の言葉を皮切りに、再び練習は再開された。

最初は、先の闘いで節々が痛む万太郎を考慮し、ソフトなトレーニングから入った。

だが、それでも万太郎は、中々エンジンが掛からなかった。

「へい真紅、金糸雀。そろそろお昼の準備をしてくれないか？万太郎は腹が減って力が出ないらしいぜ」

「いや...、僕ならまだ...」

その万太郎をキッドが手で制す。

それに何かを悟ったのか、真紅が金糸雀の背中を押す。

「ほら、金糸雀。あなたが台所に立たないと料理が出来ないでしょ？」

「はいはい...って、そろそろ真紅も料理を覚えるかしら！」

「嫌よ。面倒くさい」

「なっ！薔薇乙女の風上にも置けないかしら！」

「ほら、つべこべ言っていないで早く行くのだわ」

真紅は無理矢理に金糸雀をキン肉ハウスに入れた。

「...ふう、これでやっと話せるな」

「どうしたんだよキッド。別に話なら、あいつらを退席させなくても出来たじゃないか」

「いや、ちょっとデリケートな話なんだ。...お前は、あいつらのことをどう思ってる？」

「...ええ！？な、なにを突然！？相手は人形だよ！？」

「バカ。修学旅行のネタじゃねえって。つまりだな。お前は今、あいつらドールが、明日でいなくなることをどう思ってるんだ？」

「...それは...」

「寂しいと思っているか？あいつらも同じだよ。口にこそ出さねえが、名残惜しいと思ってる」

キッドは木陰に座ると、万太郎にも座るよう促した。

それに倣って、万太郎も腰を下ろす。

「あいつらは、お前と離れるのが寂しい。だがどうしようも出来ない。なら、せめてお前の役に立とうとしている。最後のひと時を大切にしようと、今頑張っている」

ひと時という言葉に、万太郎は思わず反応した。

「そうだ。お前とあいつらの出会いは、このひと時で最期なんだ。お前が火事場の力を出そうとも、父親に頼もうとも、もうあいつらに会うことは出来ない。お前は、それをちゃんと理解しているか？ それとも、いるのが当然と思って、理解の度合いを薄めていたか？」

キッドは、いつになく真剣な目つきで万太郎を見つめる。

「アタルさんが言っていたのは、何もリングの上だけじゃないぜ。大切にすべき一瞬は、ここにもある。この一瞬は、お前がその全身全霊をかけて、充実させなければいけないものだ。例えそれが、困難なことであろうともだ。その覚悟は、あるか？」

「.....勿論だ...！ 出会いは短かったけど、金糸雀達はかけがえのない仲間だ！ 失いたくない...！」

「ふふ、そこまで分かってんなら話は早い。落ち込むんじゃない！元気を振り絞れ！あいつらと

の大切な一瞬を暗い気持ちで汚すな！」

「分かった！僕はもう落ち込まない！ 金糸雀達を笑顔で見送るんだ！」

「おし、元気が出たな。そんじゃ飯を食いに行くか！そろそろ出来てる頃だろ」

「えっ！？もうそんな時間！？」

「俺は語ると長くなるんだよ。ほら行くぞ」

キッドたちは立ち上がると、キン肉ハウスまで走っていった。

キン肉ハウスに入ると、料理の匂いが鼻を捕まえた。

「おっ、この匂いはまさか...！」

「あら、お帰りかしら万太郎、キッド。ご飯はもう出来てるかしら〜」

金糸雀がエプロンをしたまま出てきた。

即座に万太郎は、奥に駆け込んでいく。

「おう、直ぐいく...って、早いな万太郎...」

キッドが食卓に着くと、万太郎が両手を挙げて喜んでいた。

「やった〜！カ〜ルビ丼だ〜い！」

「ふふ。以前万太郎が、カルビ丼を食べたいって言ってたから、作ってあげたかしら。感謝するかしら」

「まさか、万太郎の好物がカルビ丼だったなんてね。これはメモなのだわ」

「ありがとう金糸雀〜！いっただっきま〜す！」

「召し上がれかしら〜」

万太郎はカルビ丼を持つと、驚くような速さで掻き込んだ。

その食い意地に、思わず皆は苦笑いをする。

真紅は、そっとキッドに近づく。

「一体何を話していたの？万太郎が元気を取り戻してるようだけど…」

「なぁに、カッコいい万太郎は、ちょっと情緒不安定だっただけさ」

そう言うと、キッドは万太郎の肩に手を回した。

「なぁ万太郎。今日は男の子の日で、情緒不安定だったんだよな」

「へっ？へへっ??」

「でも治ったから、もう落ち込まないよな？」

「…勿論だい！この万太郎、もうネガティブとは手を切った所存！これからはガンガンいくよ～！」

万太郎は箸を持った手を高らかに上げた。

その様子に、ドールたちも顔を綻ばせる。

「ふふ、いつもの万太郎に戻ったかしら～」

「さすがダーリンね。さっ、たくさんおかわりすると良いのだわ。金糸雀が持ってきてくれるから」

「ちょっと待てかしら！」

「なあに？ツンデレはモテないわよ」

「どこをどう聞いたら、今のがツンデレになるのかしら！」

「金糸雀～、おかわり～」

「乗るなかしら！」

昼食を終えると、万太郎は張り切って練習に臨んだ。

その動きは、午前練習は休憩時間だったとばかりに、段違いの動きを見せた。

金糸雀も、万太郎の一々の無駄なモーションを省き、実に合理的な構え、技の入りを教えた。

技への入り方は、格闘家でないからなのか、斬新なものとなり、練習相手を務めているキッドも思わず感心してしまう。

こうして、練習の時間は瞬く間に過ぎていった。

キッドは、何度もご馳走してもらうのは悪いと言って、みんなの制止を振り切って帰っていった。

その行為に、万太郎はキッドなりの思いやりを感じた。

その夜の晩御飯は、久方ぶりの三人での食事だった。

「金糸雀。この玉子焼きは甘すぎるわ。紅茶と合わないじゃない」

「なんで晩御飯に紅茶を飲んでるかしら！今ぐらい麦茶にするかしら」

「なにを言っているの。紅茶は淑女のたしなみよ」

「TPOぐらいわきまえろかしら～！」

「これだから空気に流される日本人は嫌なのだわ。斬新な発想は、囚われた心から生まれないのよ」

「カナは日本人じゃないかしら～！もう、こうなったらお肉やけ食いかしら！」

金糸雀は瞬く間に肉を平らげる。

「ちょちょっと待てい！僕まだ米が残ってるんですけど！ ってか、それ唯一のおかずなんですけど！」

「美味しかったかしら～」

「あれ...？玉子焼きしか残ってないんだけど...！？」

「それはマンタに上げるかしら。カナの胃袋はプチトマトサイズだから、ごちそうさまかしら～」

「おい～！くそう、玉子焼きじゃご飯が全く進まない...」

万太郎はため息をつく、諦めたかのように玉子焼きを口に放る。

かつてあった肉を思い起こす。

そして気合でご飯を掻き込み、なんとか食いきった。

「よくあれで食いきったかしら～...」

「誰のせいだ、誰の」

万太郎の怒りを他所に、金糸雀はどこ吹く風である。

真紅はというと、台所で食器洗いをしていた。

働かざるもの食うべからずと、金糸雀が無理矢理押し付けたのである。

その金糸雀はというと、真紅の紅茶で一服をしている。

「ほら万太郎。口直しの紅茶かしら」

「口直して言ったな。今言ったな」

「いないなら真紅にあげるかしら」

「飲みます。飲ませてください！」

万太郎は奪うようにひったくると、一気に飲み干した。

それでやっと一息つく。

それからしばらく、金糸雀は静かになった。  
かすかな沈黙が漂い、真紅の食器を洗う音が聞こえてくる。

「...明日、お別れね」

金糸雀は視線を紅茶に向けたまま、そっと言った。

万太郎も、真剣な面持ちに変わる。

「万太郎は、カナ達といて、楽しかったかしら？」

金糸雀が、ゆっくりと万太郎を見上げた。

「もちろんだ。金糸雀たちがいなかったら...、未だにミートがいなくて、寂しがってたと思う...」

「ふふん。カナの影響力は偉大かしら」

金糸雀はちょっと胸を張ってみせる。

「ああ...。ありがとう」

万太郎は、金糸雀の頭を優しく撫でる。

「うう、ちょっと調子狂うかしら〜...」

金糸雀は困ったという顔を見せる。  
だが、今の万太郎にはそれさえも愛しく感じる。

「さっきさ、キッドに諭されたんだ。金糸雀たちとの出会いは、もうこれっきりなんだって。だから、その一瞬一瞬を大切にしろって」

万太郎は少しトーンを落として話す。

「そして今日、その一瞬を大切に思っただ。僕は、金糸雀たちに出会えて本当に良かった」

「万太郎…。カナも万太郎に出会えて良かったわ」

「ありがとう、金糸雀。僕は、二人を笑顔で見送りたい。だから、明日の試合に僕は勝つ…！」

「ふっ、頼もしいのだわ。万太郎」

洗い物を終えた真紅は、エプロンを外して、万太郎の隣に座った。

「金糸雀。あなたも、明日頑張るのよ。万太郎のサポートという約束は、まだ終わってないわ」

「当然かしら！金糸雀の光る頭脳で、万太郎を勝利に導くかしら！」

「あら、光るのはおでこだけじゃないのね」

「真紅、ちょっと表へ出ろかしら」

「金糸雀、落ち着けて」

万太郎が金糸雀の肩を押さえていると、真紅が万太郎の膝の上に乗かった。

「最後くらい抱っこしなさい」

真紅は少し顔を赤らめて言う。

その表情に、万太郎は少し笑みを見せると、両腕で真紅を抱きかかえた。

「りょーかい」

「あ～カナも～」

金糸雀がさっきまでの真剣さを取り払い、不満を口にする。

「ふふ、べーなのだわ」

万太郎たちの騒ぎ声は、九時を過ぎても収まらなかった。

翌日。

その日は、前日の快晴とは打って変わって、灰色の雲に空は覆われていた。

万太郎は、少し早めにストレッチを開始する。

アタル対策は、昨日の練習で十分に練ってある。

もっとも、アタルはフェイバリット、マッスルスパーク以外は見せていない。故に、様々な想定をしなければならなかった。

だが、それが万太郎の不安要素などには、繋がらない。何より、万太郎の試合への真摯さが違っていた。

「万太郎、痛むところはない？」

真紅が万太郎に問いかける。

「大丈夫。コンディションは抜群だ」

万太郎は笑顔で答える。

アキレス腱、大腿部、横腹の筋と、下から順に伸ばしていく。

体に残っていた疲労も、今は丁度良い具合だ。

程よい緊張が、アドレナリンを分泌し、闘志も準備万端だ。

三人のいる公園に、一人の男が入ってきた。

「キッド！」

「ハロー。応援に来たぜ」

「ふふ、歓迎するのだわ。お菓子と紅茶の準備は完璧なのだわ」

既に真紅はシートを引き、その上に紅茶一式を置いていた。

「いつの間に準備してたのかしら...！」

「うんじゃ、邪魔するぜ」

キッドがシートの端に腰を下ろす。

万太郎がストレッチを終えようとした時、突如、上に大きな飛行物体が現れた。

それは強い突風を巻き起こしながら、ゆっくりと地上に降りてくる。

機体は、大きな音と共に着陸した。

ハッチが開き、そこからアタルが飛び降りてくる。

「驚かせてすまない。少し超人警察の方に戻っていてな」

「いや。こちらこそ、わざわざ僕のためにきてくれてありがとう、伯父上」

「ほう、少しは礼儀正しくなったか、万太郎」

「昨日の言葉が深く響いてね。先にお礼を言っておこうと思って」

「ふっ。少しは成長したか。では早速、お前の覚悟を見せてもらおうか！」

アタルはマントを脱ぐと、リングに飛び上がった。

「いってくるよ。金糸雀、真紅」

「頑張るかしら～！」

「勝つのだわ、万太郎」

「おいおい、俺を忘れんなよ」

「悪い悪い。行ってくるよ、キッド」

「おう！いってこい、万太郎！」

万太郎はロープに手をかけると、リングの中に飛び込んだ。

「いくぜ。レディーファイト！」

キッドが、開始のゴングを鳴らした。

両者はファイティングポーズを取る。

どちらも動かず、またも気と気のせめぎ合いとなった。

「どうした？怖気づいたか？」

「なら、攻め込んできなよ。伯父上」

「ふむ…」

アタルは考えたふうに息を漏らした。

すると、アタルは腕を下ろし、防御の構えを解いた。

「…万太郎。お前には失望した。一瞬を大切にしろと言ったが、こうも無駄にするとはな。貴様のようなルーキーなど、対峙を続ければどれほどの力量か分かってくる。攻め込まなければ、活路はないぞ」

「それこそ、伯父上の妄言だね。ここで動けば、まさしく伯父上の言われたイニシアチブを奪われる」

「ふふ、なるほどな。俺の言葉は、確かに届いていたようだ。では、本格的にいこうか！」

アタルは手を下げたまま、万太郎に向かって走り出した。

万太郎も体勢を低く、迎撃の構えを作る。

「万太郎！腕の動きじゃなくて、体全体を注視するかしら！」

金糸雀が万太郎に警告する。

腕。違う、フェイク。

アタルは体を丸め、ハンドスプリングで万太郎の肩に両足をかけてきた。  
そして、足で顔を締め上げようとする。。

「甘いよ伯父上！」

万太郎は、アタルが上半身を起こすより先に、その胴体を抱えていた。

「そらぁ！ハイボルテージボム！」

万太郎は飛び上がり、アタルを頭から叩きつけようとする。

しかし、アタルは素早く地面に手を着く。  
勢いを利用して万太郎と自分を反転し、上下逆転させる。  
そして、逆に万太郎を頭から地面に落とす。

今度は万太郎が、手を着いて交わす。

万太郎が振り返る。  
既にアタルの拳は、モーションを完了させていた。

右ストレート。不可避。  
万太郎は体を捻った。拳は僅かに頬を掠める。

万太郎は、アタルの斜め前に出た。

アタルの防御は間に合わない。  
強烈なボディブローが放たれる。

アタルは避けられないと悟ると、前に体重を傾けて、ボディブローを掠らせるにとどめた。

二人は直ぐに間合いを取り合う。

「は、早い攻防なのだわ」

「ああ、これがオリンピック決勝だって言ったって遜色ないぜ」

キッドたちも思わず息を呑む。

今度は、万太郎がアタルに組み付いた。

「ふん、お前から来るか！」

「悪いけど、負ける気しないんだ！」

アタルは、胸ぐらを掴む万太郎の手を取る。そして、一本背負いの構えを取った。咄嗟に、万太郎はアタルの背中に飛び乗った。

そして、脇から手を入れ、アタルの首裏で両手を絡める。

「おお、フルネルソンに取ったぞ！」

このフルネルソンは、事前に金糸雀と話し合っただけ出来た作戦である。  
だが金糸雀は、直前になって言い知れぬ不安をよぎらせていた。

「成功するかしら...」

「こんなもの！」

アタルは腕を上げて万太郎の顔を捕まえると、そのまま前に投げた。

「にっ。引っかかったな伯父上！」

両足で着地すると、万太郎の両腕の決めが、首に挿げ替わっていた。

そのまま万太郎は飛び上がる。

そして体を一回転させ、アタルの首を肩に、両足を両腕でキャッチする。

「王家の至宝は、マッスルスパークだけじゃない！ターンオーバーキン肉バスター！」

万太郎は凄まじい勢いで落下する。

だが、アタルは冷静だ。

「万太郎よ。このキン肉バスターは、反転させることは阻止しているが、首のフックが改善されていないぞ！」

「えっ!？」

アタルは背中を柔軟に丸める。

それで出来た隙に、体を通した。

体は万太郎の肩と首の隙間を通り、アタルは万太郎の背後へ脱出した。

「ああっ！ターンオーバーが...破られただと...！」

「うう、悪い予感が当たったかしら...」

金糸雀は、胸に手を当てて無事を祈る。

だが、金糸雀の思いも空しく、アタルは攻勢の手を緩めない。

「必殺技とは、全身を隈なくロックし初めて成功するのだ！」

アタルは、両腕で万太郎の腕を掴み、両足を万太郎の足に絡める。

「殺傷力は最大だ。ナパームストレッチ！」

万太郎を後方からロックしたまま、胸からマットに叩きつけた。

「ぐはっ...！」

万太郎は血反吐を吐き、マットに突っ伏す。

「万太郎！」

金糸雀は悲痛な表情で万太郎を見つめる。

「ふんっ、これで終わりか...」

アタルは、そう言い捨てた。  
その時、突如として足を取られる。

下を見ると、万太郎がその足を握っていた。

「...まだ...僕は死んじゃいないよ...！」

「往生際が悪いな...。私のナパームを受けたのだ。次の試合の為に養生しておけ」

「...次なんかないよ...」

「なに？」

「金糸雀たちに見せれる試合は...これが最後なんだ...。僕が強くなって.....試合で勝って.....二人を笑顔にするんだ...！」

万太郎の額に、想いの証が宿りだす。

「.....それが、大事な試合を棒に振ってしまうことになってるか...？」

「...僕の大事な試合は...今、この試合だ...！！」

「なるほど...。覚悟は充分なようだな...！ 本来なら、ここで華を持たせるのが伯父なのだろうが、それは私の信条に反する...。  
故に、私も本気で闘うぞ！」

アタルも、その眼に闘志を宿す。

万太郎は立ち上がると、即座にラッシュに入った。

「うおおおお！」

万太郎は打つ。打つ。がむしゃらに。ひたすらに。  
それは鬼気迫っており、アタルも全ては捌き切れないでいる。

「くっ...!!」

「万太郎～！押すかしら！今こそ最大の勝機かしら！」

期待に答えるかのように、ラッシュの激しさを増していく。

「ぐうっ...！私を舐めるな！」

アタルは反撃に移る。

「今よ万太郎！アタルは足への注意が疎かかしら！」

金糸雀のアドバイスに、万太郎はローキックをふくらはぎに決める。

「ぐあっ...！」

アタルが呻きで刹那に防御を緩める。

主導権は今、万太郎が握っていた。

「万太郎！作戦通り、巴投げで敵を宙に放るかしら！」

「了解...！」

万太郎はアタルを掴み、巴投げで宙に放る。

これも、昨日のうちに万太郎と金糸雀で話し合っていた。

フェイバリットへの入り。

金糸雀は、万太郎の必殺技であるマッスルミレニウムを見た後に、ひとこと指摘をした。

「技の決めが甘いかしら。そんなんじゃ、敵に逃げてくださいと言っているようなものかしら」

「ええっ！でも、今まではこれで決まっていたんだよ！」

「それは恐らく、敵と動けないまでの死闘を繰り広げた後に決めていたからかしら」

「うっ...言われてみれば...。じゃあ技の入り方を変えるの？」

「いや、入り方は変えないかしら。これ以上はいじりようがないでしょうし。それよりも、万太郎の動きを変えるかしら」

「え？どこを変えるの？」

「簡単かしら。万太郎は敵を宙に投げた後、ロープを思いっきり引っ張って、反対側に飛ぶわよね？」

「うんうん」

「その時にロープを一本じゃなく、二本を絡めて引っ張るかしら。そうすれば、単純計算で速度は二倍になって、敵を高く飛ばす必要もなくなるし、万一に敵が避けようとしても、速さで押し切れるかしら」

「おお！でも待てよ。そうしたら、引っ張らなきゃいけない力も二倍になるじゃないか！そんなに引っ張れないよ」

「...そこは気合でカバーして貰うしかないかしら」

「でも...」

「相手はおじじでは無いかしら。数十年のキャリアを持つ海千山千の豪傑かしら。これくらいの速さを求めなきゃ、恐らく技は破られるかしら...！」

「.....そうだね。あの伯父上に勝つには、生半可なことじゃいけない！ 全力を超えなきゃ、普通じゃ負ける...！」

「うんうん。その意気かしら～」

そう。二人は昨日、マッスルミレニアムの改良に取り組んでいた。

そして今、二人の成果が試される。

「おお！万太郎がロープを二つ持った！あれをやるのか！」

「でも、昨日は成功しなかったのだわ。不安ね...」

「おいおい、あいつは奇跡の逆転ファイターだぜ。きっとやってくれるさ！」

「万太郎...！」

「助走は充分！今の僕なら...いける！」

万太郎はロープ後方に向かって勢い良く跳んだ。

リングアウトかと思われる程飛び込み、ロープ二本は大きく伸びた。

それは強大な反動を呼び、万太郎はボウガンのように射出される。

アタルは、万太郎に背を向けて逆さに落くる。

「甘いぞ万太郎！修羅場を潜ってきた私に、ただ落ちてきて下さいは無理な注文だ！」

アタルは体を半回転させ、万太郎の方を向いた。

「な、なにをするの！？」

真紅が思わず声を上げる。

「アタルさんは、万太郎をその体で止める気だ！」

「そんなの無茶かしら！あの速度は、誰にも止められないかしら！」

「アタルさんはキン肉族の嫡子だ…。もしかしたら、あの力で…」

「万太郎よ！お前の覚悟、想いは良く分かった。だが、私にも譲れないものがある！私が歩んできたこの数十年には、俺の男としての意地がある！ 自負がある！ 万太郎、お前が想いの為に闘うのなら、私は己の誇りをかけて闘う！」

アタルの体が強く輝きだした。

それと同時に、全身の筋肉が大きく盛り上がる。

「僕も…負けるわけにはいかないんだ！」

矢のように飛んだ万太郎がアタルに衝突する。

「業火の…クソカ！！」

アタルは体を丸め、両腕、両膝で万太郎の頭部を止める。

「くそお！まだまだあ！」

「はああああ！！」

爆発した。キッドは最初そう感じた。  
二人の衝撃波は周囲に拡散し、砂煙が舞った。

「なんつー力だ！」

「うっ...見えないかしら！勝敗は！」砂塵が徐々に収まり、視界が明るくなる。

と同時に、リング上も明けてくる。

明けなければ良かった。詮なきことだが、金糸雀はそう思った。  
視覚の情報は、金糸雀たちに凶報をもたらした。

「万太郎...」

「そ、そんな...」

「や、破られた...」

アタルは見事に万太郎を止め、万太郎は宙で静止していた。

「見事だった。万太郎。ただ、戦歴の差が私を勝者に変えた」

アタルは万太郎の頭をキャンパスに叩きつけた。

「うう...必殺技が、破られたかしら...」

金糸雀は思わず目を瞑る。悲しみ、悔しさ、失意が渦巻く。

だが、視界を遮断して聞こえてきたのは、まだ闘志を失っていない万太郎の声だった。

「万太郎...!？」

金糸雀は思わず目を開ける。

「金糸雀！万太郎はまだ闘っているのだわ！」

そこには、アタルの猛攻を受けながらも、必死に反撃をしている万太郎がいた。

「何で...?だって万太郎は、唯一の必殺技を破られたのよ...！」

「金糸雀！何で万太郎が闘っているかを思い出しなさい！...彼にとって、これはあなたとの最後の試合なのよ。その最後の思い出を、笑顔で飾りたいと思っているのよ。私たちに、笑顔で帰って行って欲しいのよ。その為なら、彼は闘い続けるわ！そして絶対、闘志を失ったりしない！」

真紅の言葉に、金糸雀は心を震わせた。

「...分かったかしら！カナも、最期まで闘うかしら！」

「ふふ。偉いわ、金糸雀」

金糸雀は目をリングに向ける。

もう、目は逸らさない...！

金糸雀の意志は固かった。

リング上で、万太郎は反撃を敢行する。だが、それは徐々に弱まっていた。

「その揺るがない闘志！恐れ入ったぞ、万太郎。だが、ここで終止符を打とう！これが、最期

の技だ！」

アタルは万太郎を抱え、ブリッジのように体を反り返らせる。  
万太郎を体に乗せ、反った反動で天高く飛ばす。

「あの体勢は、マッスルスパーク！」

キッドが技の入りで素早く反応する。

「金糸雀！早く万太郎に指示をするのだわ！」

真紅が焦ったように金糸雀を見つめる。

だが、金糸雀は動かない。

かつて金糸雀は、万太郎の肉のカーテンによる防御力を試したことがあった。

その結果分かったのは、恐ろしいものであった。

万太郎は、防御で息を止めた瞬間に、関節さえも硬化させ、鋼鉄の壁となったのだ。

金糸雀は、これを何かに使えないかと考えていた。

そして昨日、遂に使い道を見つける。

「万太郎。マッスルスパークの攻略法を思いついたかしら！」

「ええ！ あれは三大奥義のひとつで、完全無欠の技なんだよ」

「ふふん。カナには奥義なんて関係ないかしら。それより、今から言うことを頭に叩き込めかしら」

「おう...、なんだい？」

「まずマッスルスパークは、二つの技から構成されてるかしら」

「ああ、最初に全身を決めるやつと、最後のブリッジするやつだね」

「そうかしら。で、ぶっちゃけると、二つ目の方には隙が見当たらないかしら」

「って、おいおい。攻略したんじゃないの？」

「話は最後まで聞けかしら。でも、最初の方には隙があるかしら」

「それは？」

「技がかかる寸前に、万太郎が肉のカーテンをやるかしら。そうすれば、首のフックも掛けられず、技は解けるかしら」

「...いやいや。でも無理矢理、腕を広げられたらどうするのさ？」

万太郎が動作をつけながら説明する。

「それは、実際にマッスルスパークをかけてみれば分かるかしら。キッド～」

金糸雀がキッドを呼んだ。

直ぐに、キッドは万太郎達のところにやって来た。

「おう、なんだ？」

「ちょっとグリコのポーズをしてかしら」

「...はっ？なんでだ？」

「いいから。これは非常に重要かしら！」

「...おう、こうか？」

「よし、万太郎。マッスルスパークのように足をかけるかしら」

「...悪い、キッド」

万太郎はキッドの首、片足に足を掛ける。

「うげっ」

「それじゃあ次に、手を決めるかしら」

万太郎がキッドの両手を持つと、その手は突然止まる。

「ぐおおお。ふ、節々の関節が...！痛くて、手が取れない...」

万太郎は、痛さで技を外してしまう。

「おい、これはどういうことなんだ？」

体勢を戻したキッドが、金糸雀に聞く。

「見ての通りかしら。マッスルスパークというのは、体に負荷をかける技かしら」

「ほう、パッと見はそんな感じしなかったな」

「恐らくあのアタルって人は、この技の為に、だいぶ関節を柔らかくしたかしら。でも、元々は体の可動範囲を超えた技。あの体勢から、万太郎の肉のカーテンを破るほどの力は、入れられないかしら」

「なるほど。先手を取って、腕を縮めちまうのか。これは良いアイデアだ！」

キッドが大きく頷く。

「そ、そんな簡単に奥義が破れるかなあ...」

尚も万太郎は不安という態度を示す。

「何を言ってるかしら。伝説は讃えるんじゃなくて、破るためにあるのかしら。破って伝説を塗

り替えるかしら！」

金糸雀は意気軒昂といった表情だ。

万太郎は、かつての金糸雀との作戦を思い出す。

アタルによって宙に飛ばされた今、やるしかない。

「いくぞ！肉のカーテン！」

万太郎は技をかけられる寸前に腕を縮め、首を防御する。

「何！？」

アタルは、万太郎の腕をキャッチ出来ない。

「ならば、腕ごと決めてやる！」

アタルは腕ごと足で押さえ、強引にマッスルスパークを敢行する。

だが、万太郎の体は岩のようにビクともしない。

「な、なんだと...！」

「ふふふ。マッスルスパーク破れたりかしら！」

「まだだ！まだ技は終わっておらんぞ！」

「万太郎！すぐに技から脱出するかしら！」

「おう！」

万太郎は肉のカーテンを解き、足を外そうとする。

「ならば、頭から叩き落とすまでだ！」

アタルは、後ろから万太郎の頭を抱えた。

「何を！」

万太郎は、後ろ手で離させようとする。

「掛かったな！」

直ぐに頭から手を離し、アタルは腕を掴む。

「しまった！」

「もう遅い！」

そのまま背中合わせにブリッジに移り、万太郎の足を両足で絡める。

「マッスルスパーク！」

アタルは最終段階を決めた。

「そ、そんな...！せっかく破ったのに...」

「くそっ、もう駄目か...」

キッドは、慚然として言い捨てた。キッドの絶望とは対照的に、金糸雀はまだ頭を回転させている。

「まだ...まだ、どこかにあるはずかしら！見えていない隙が...」

金糸雀とて、この最悪の状況を想定しなかったわけではない。  
勿論何百通りとシミュレーションを行なった。

万太郎に勝って欲しいと願い、常に考えていた。

私が隣にいて良かったと、万太郎に言わせたかった。

数日の間に生まれた新しい絆は、かけがえのないものへと昇華していた。

だからこそ、勝って欲しい。

絆の証明として。

私たちは無敵コンビだって、笑って言いたかった。

金糸雀の頭脳は、昨日から休ませてなどいない。

往々にして、発想とは努力の賜物であることが大きい。

常に努力をしているものに、1%の閃きが訪れる。

金糸雀の99%の努力が、今まさに1%の閃きを生み出す。

「万太郎！思いっきりお腹を張るかしら！」

金糸雀の言葉に、万太郎もなにかに気づく。

諦めを知らない戦士と、諦めなかった軍師の頭脳が、今、交差する。

「うおおお！ 火事場のクソ力！！」

万太郎は渾身の力で腹を正面に押し出す。

振り返るようになると、体勢はムササビのような格好になった。

「腕を外側に回すかしら！」

カナの言葉と同時に、万太郎は腕を体の外側に回す。

万太郎が振り返ったことによって、腕のクラッチが不自然になっていたアタルは、両手を外されてしまう。

「なっ！？」

「そして相手の頭を肩に担いで！ 足を掴まえるかしら！」

万太郎はアタルを弓反りにし、顔の部分が肩に当たるようにする。

そして両手を後ろに回し、絡めている足を捉える。

足のクラッチが外れ、万太郎は足を脱出させる。

そして万太郎の両足は、前でアタルの両腕を挟み込んだ。

「な、なんだこの体勢は！？」

アタルは、全く身動き取れないでいる。

地上のキッドたちにも、驚きは波及した。

「あ、あの体勢は何だ！？」

「一体何が起きるといふの！？」

キッドたちが困惑する中、金糸雀も興奮気味に言う。

「これこそ、カナと万太郎の新必殺技かしら...！その名も、マッスル...！」

「マッスル...！」

「「グラヴィティ！！」」

曇天の空が晴れ上がる。

両者は凄まじい速度で落ちた。

アタルの体に圧力が発生し、背骨が軋みだす。

巨大な爆裂音が響く。

万太郎はこれまでにない程、体をキャンパスに沈めこんだ。

衝撃波が、周辺の木々をざわつかせる。

「み...見事だ...万太郎...。今お前は...歴史を変えた...」

アタルは、静かにマットに落ちていった。

キッドが大きくゴングを鳴らす。

「うおおおお！やったぜ！ 勝者！万太郎！」

「やったかしら～！」

金糸雀が万太郎に駆け寄り、抱きついた。

陽光がリングを照らす。

長い戦いが、終わった。万太郎は感無量だった。

「なあに、ぼーっとしてんだ。お前の勝利だぜ」

何者かに肩を叩かれる。それがキッドだと分かるのに、数秒を要した。

「僕が...勝った...」

万太郎は、大きな叫び声を上げた。

雄たけびが、万太郎の心にあるものを全て吹き飛ばす。

「ふふふ。おめでとうなのだわ、万太郎」

真紅もリングに上がってきた。

落ち着いた万太郎は、しゃがんで真紅を迎える。

「ありがとう。皆のおかげだ」

真紅は万太郎に近づくと、そっと顔を埋めた。

小さく嗚咽が漏れる。

万太郎はそっと手を回す。

「ふふ、真紅はだらしなにかしら。乙女は泣いちゃ駄目かしら」

「金糸雀だって...。...目を腫らして言うんじゃないのだわ」

「腫れてないかしら...！目にごみが入っちゃっただけかしら」

涙を浮かばせて金糸雀は言う。

リングで倒れていたアタルがゆっくりと体を起こした。

「...ナイスファイトだった...。私も久々に...心が奮えたぞ...！」

アタルは右腕を差し出す。

万太郎もそれに答え、握手をする。

「...今の気持ちを忘れるな。超人オリンピックは、一瞬の油断が命取りとなる」

「伯父上との闘いで、身を持って教わったよ。僕はもう、大丈夫だ」

「本当かしら？」

「何を～。さっきのファイトで、僕は強いて証明したぞ」

「ふふふ。そうだったかしら。強くなったわ、万太郎...」

金糸雀は目を細める。

その時、頭上の空間が歪みだした。

「なんだ!？」

「……」

その歪みから、タキシードを着たうさぎが出てくる。

「相変わらず空気が読めないのね、ラプラスの魔！」

「逢瀬の別れとはいつも唐突にやってくる。ただ、私がそれを代行しているに過ぎない」

ラプラスは帽子を取り、お辞儀をする。

「最近の異空間の出現は、貴様のせいかな」

アタルがラプラスに問いかけた。

「道化の通った跡から、道化の成した芸は分からない。その詮索は無意味というものでしょう」

「ふん。治安を維持するためには、後始末も必要なのだ。貴様をひっ捕まえてその口を割らせようか？」

「あなたとの出会いも一期一会。私という残滓を捕まえたいのならどうぞ自由に。だが、そこに存在があることはない。ただ私は、あるがままに浮遊するだけのこと」

ラプラスはアタルを一瞥すると、ドールたちの方を向く。  
そしてうさぎは、自分の出てきた歪みとは別の渦を作った。

「そろそろ時間です。次のアリスゲームまでの眠りと致しましょう」

うさぎは穴へと促す。

諦めを感じたのか、真紅はそっと、万太郎から離れた。

「今までありがとう、万太郎。とても楽しかったわ」

「こちらこそありがとう、真紅。紅茶、おいしかったよ」

「ふふ。機会があれば、また入れて上げるわ。...だから、それまでのお別れ...」

最後に笑顔を向けると、真紅はゆっくりと浮かび上がった。

そして、静かに穴に入っていった。

「...カナも、万太郎に出会えて良かったわ。こんなにも熱くなったのは、初めてかしら」

「僕も、こんなに頼もしいパートナーは初めてだ」

「...カナは、役に立てたかしら...？」

「ああ。金糸雀の頭脳は、天才的さ」

「そ、そうかしら...ドールーの頭脳を持てたかしら？」

「ドールーどころか、世界一だよ」

「...ありがとう万太郎。ちょっと、自分に自信がついたかしら」

「もっと胸張っていいぞ。何たって、あの万太郎からお墨付きをもらったんだよ」

万太郎の笑顔に、金糸雀は思わず絆されてしまう。

だが、それは振り切らねばならない。

「万太郎...。決勝戦、頑張ってね...。負けたら承知しないかしら！」

「ふふん。僕を誰だと思ってるんだ。あの厳しい金糸雀の特訓を耐え切ったんだ。負けるわけないさ！」

「...うん。じゃあね...、万太郎」

金糸雀は万太郎にそっと近づき、頬にキスをする。

驚く万太郎を尻目に、穴に飛び込んでいった。

「それでは、再びの邂逅がありますよう...」

うさぎも穴に入ると、渦は完全に消えた。

「行っちゃったな...」

キッドが、そっとつぶやく。

「うん...。僕は、ちゃんと笑顔で送れたかな...？」

「ああ。最高の笑顔だったぜ」

「なら...良かったのかな」

万太郎は、微笑みながら空を見つめる。

空は、快晴だった。

## プロフィール - キン肉アタル

---

名前:キン肉アタル

出身地: キン肉星

身長体重: 197cm 102kg

年齢: 62歳

超人強度: 108万パワー

必殺技: ナパームストレッチ、アタル版マッスルスパーク(当小説では、完全版を習得)、超人稲綱落とし、肉のカーテン

備考: 自分のマスクを捨てた為、今はキン肉マンソルジャーとして活動。現役として闘い続けているため、肉体の衰えは皆無。

どうもご閲覧ありがとうございました。

さて、唐突にして奇妙な組み合わせのクロスオーバー作品を書き上げましたが、まあ書いた理由は単純です。

「ミートの頭脳(笑)具合って、金糸雀に似てね？」

最初は、本当にそれだけでした。

その後にユーチューブで二世のオープニング聞いて、盛り上がって、気づいたら書いてた次第です。

だいぶ勢い任せですね。すいません(笑)

作中では悪役になっていますが、自分は決してアンチ水銀燈ではないです。  
ただ、敵キャラを探していたら、彼女にたどり着いてしまって...

それと、アニメと原作は結構違うのですね。  
wikiで設定調べてたら、水銀燈のお腹があるって...

ええ、ずいぶん知識不足でした...。  
原作も読んでみようかと思えます。  
まあ、上記の説明で分かると思いますが、筆者は雪華綺晶について全く知りません。

そのため、他作家のSSなどを読んで真似てみたのですが、合っていましたかね？

これも機会があったら、直していきたいと思えます。

後、キン肉マン二世知らない人にはごめんなさい。

キン肉マンが主体になってて、面白くなかったですね。

ドール達を活躍させたかったのですが、作者の格闘技熱に火が付いてしまいまして...。  
はい、暴走しました...(笑)

知らない人への配慮として、なるべく技の説明を分かりやすく書いたつもりですが、ちょっと厳しかったですね…。

すみません。

もし宜しければ、youtubeで『Kinnikuman Muscle Grand Prix 2 Mantaro(又はKevin Mask) Specials』を検索してみてください。

恐らく、出てきた技の殆どがあると思います。

それでは皆様、この駄作にお付き合い頂き、有難うございました。

作者として、深くお礼を申し上げます。